

共創福祉

2008年 第3巻 第1号

【原著論文】

石津 孝治

苦悩することの臨床心理学的な意味について 1

村田 透

子どもの行為の成り立ちと自己実現 9

北澤 晃

学びのなか<ソーシャル・インクルージョン>の成り立ち 21

末光 正和

現代社会におけるいじめの構図（1）
—「大河内清輝君いじめ自殺事件」の考察を通して— 31

炭谷 靖子

自己実現に関する心理学理論の比較研究
—看護への適用のために— 41

【研究ノート】

鷹西 恒

ろうあ高齢者の生活実態と介護ニーズに関する一考察 69

苦悩することの臨床心理学的な意味について

富山福祉短期大学 石津 孝治

(受付2008年3月5日)

要旨

本稿では、苦悩することの臨床心理学的な意味について、臨床例2事例と体験手記を素材として論じた。それぞれの事例に即して、苦悩することが人格成長を導くことについて考察した。事例1では、対象を断念する作業が、対象への依存を弱め、主体的に生きる姿勢に導いたことが論じられた。事例2では、悲哀の仕事によって運命を受容するプロセスが、仏教思想と相似であることが論じられた。体験手記からは、苦悩が象徴の超越機能を発動させることが論じられた。最後に、運命的なものによって苦悩することは人間にとって本質的な一つのありようであり、真摯に苦悩することが要請されていると結論した。

キーワード 苦悩すること 対象喪失 人格成長
運命

I はじめに

人間は苦悩する存在である。そして苦悩する作業はまさに苦しいプロセスではあるが、それが人格成長を促すことは、経験的にも臨床的にも認められることである。しかし、苦悩することそのものの意味については、これまであまり取り上げられてこなかったといえるであろう。本稿では、筆者の経験した臨床例と、手記による体験を素材とし、苦悩することの意味を検討したいと思う。後述するように、苦悩の本質は、何らかの対象に愛着することや自己の要求の断念しがたさであると考えられ、それゆえ広い意味での「対象喪失」に伴う苦悩とみなされる場合が多いと考えられる。対象喪失は、「どんなに人間があがいても、その対象を再生させることができないという、人間の絶対有限性への直面」(小此木, 1979)であり、特に、人間がこのような有限性に直面する様態と、それが人格成長を促す点について、事例に即して考察したい。

II 苦悩が主体的な生への取り組みに導くこと

1 臨床素材(1)

20代女性。失恋体験を機に、意識を失ったり吐

血する等の身体症状と、うつ状態で会社に通えなくなることや自傷行為などの行動化が頻発し、心療内科に受診した。相手の男性との交際がクライアント(以下CI)にとって不幸な形態であったため、最初からCIはそれを理解してのことではあったが、だからこそ日に日に苦痛が増し、またその男性の心ない対応によってその傷つきを深める結果となってしまった状態で発症したものである。面接過程の初期で、CIを中傷するような同僚の発言に接したことがきっかけとなって、自殺を企図し、意識を失って救急車で搬送され、しばらく入院となった。CIは、自分の抱えている悲しみや怒りなどを、実感をもって言語化することが難しく、それは筆者(以下Th)が面接で感じる漠然とした不全感によっても察知できることではあったが、そのような、CIの感情にアプローチしがたいところが自殺企図というアクティングアウトにつながったと思い、明確に自殺を禁じた。その後も、様々な感情や思いについて、少しずつ言語化を進めていく作業が継続されたが、もとより自分の感情に触れることが苦手なCIにとっては困難な作業であり、様々な感情が突出してきて混乱状態に陥ることもしばしばであった。また、面接の話題として、それまでの自分の生き方を振り返り、漠然とした、何か充実してない感じについて時々言及し、よりステップアップした人生のプランについて検討しようとするが、なかなか現実的な努力につながっていない。しかし、このような苦痛をとまなう直面化を徐々に行っていく中で、ネガティブな感情の裏に常に存在した相手の男性への愛着から離脱していくことが可能となり、また、症状も消失した。そして同時に、自分の生き方についての取り組みが真摯なものとなり、現実的に相当な努力をされ、それが形となって結実されたと同時に面接は終結となった。

2 事例の考察

通常の事例研究では、CIのパーソナリティやThの介入等を考慮に入れ、治癒までの過程を詳細に検討することが必要であろうが、本項ではそれらは扱わず、本論文のテーマに関連することのみに焦点を当て考察したい。

(1) クライアントの人生における苦悩の意味

この事例の治療プロセスにおいて特筆すべきことは、愛情対象を喪失することを体験し、それは症状が生じるほどの負荷を有するものであったが、それらを自分のこととして悩みぬくという作業が、自分の生き方に対する省察をも深め、それ以前よりも充実して生きようとする姿勢につながったことである。上述のような不幸な恋愛に巻き込まれていく以前のCIは、その時点で自分が望む仕事に就くことができ、同僚との仲間関係も良好であり、CIなりの理想を持って、熱心に仕事に取り組んでいた。しかし一方で、漠然とした生き方への不充実感があり、また異性とのかかわり方についての課題もあった。すなわち、CIにとっては幸福感を感じられる日々であり、それなりの安定感を保っていた状態であるといえる。このような状況の中で一連の苦痛な体験と苦悩がCIを襲うのであるが、これらは結果としてCIの人格成長を導いたのである。ここで、CIの内的な課題と外的な状況を次のように捉えてみたい。すなわち、失恋体験以前は、CIにとって、取り組むべき未来の課題を包含しつつも、あるレベルでの安定を保っている状態であったが、その安定を崩すような外的な状況が起こってくる。それに真摯に取り組み、乗り越えた結果、より高次の安定に達した。内的課題と外的状況の配置が一致する現象の一例と思われる、本事例にとっては、外的状況が自己の成長の契機となったという個別的な事実注目したい。

(2) 苦悩することが主体性の発現を促すことについて

CIが自分の生き方について内省を深め、また実際に生き方を変えていく直接の原動力になったのは、対象喪失を苦しむということであった。CIは相手の男性に極めて強い恋愛感情を抱きながらも、交際の過程ではそれ以上の傷つきを経験し、それが限界状況に達したときに発症したのであるが、相手の男性に怒り等の感情があったとしても、一方では愛着の感情も保持されていることが、対象の断念を困難にしている。交際していた男性に暴力を受け、身体的心理的に外傷を負い、PTSDを発症したクライアントですら、この機制が認められる(石津, 2002)。CIはこのような困難を伴う過程を乗り越え対象の断念に至ったのであるが、むしろこの困難さが対象に依存することの強度を弱め、CIの主体性を発現することを助長したと考えられる点を本稿では強調したい。これによってCIは、相手の男性に依存する自分のあり方に目を向けざるをえなくなった。そして、対象への依存を弱めて、自分の生を主体的に生きるという姿勢へ

の転換が起こった。対象喪失にまつわる強い苦悩が、逆にこれを可能にしたということができであろう。このような転換は、対象喪失を苦しむことによる、一つのポジティブな方向性として考えられるのではないかと思う。また、この苦しむというプロセスの中で、自分のあり方や漠然とした不全感が自覚されたことも、この転換を補強する要因となったと思われる。

しかし、CIにとって対象喪失を苦しむ作業、つまり「悲哀の仕事」は想像以上に厳しいものであった。本事例では、面接経過中に混乱状態に陥ることがしばしば見られ、またそれに伴う自殺企図などの行動化が起こった。CIにとってこれら悲哀の仕事は、苦痛で地をのたうち回るようなプロセスであったに違いない。Thにはそのような苦痛が感じられながらも、CIが抱えている量のわずか数パーセント程度しか面接場面で共有できないという不全感、もどかしさ、無力感を感じざるを得なかった。また、CIは他の診療機関でも治療を中断していたので、このままでは中断に至るのではないかというあせりがあったのも事実である。したがって、CIにとっては、Thは存在するけれども、自分が抱える苦痛の解放を援助してくれる治療者というイメージからは程遠く、自分だけでそれを抱えていかなければならないという、やり場のない孤独感も同時に抱えざるを得なかったと思われる。しかし一方、CIは最終回の面接時に、「一番大変な時期」を共にしてくれたことについて、Thに礼を述べ、号泣されたことも事実である。つまり、中断するかしないかという瀬戸際の状況で、かろうじてCIの苦しむプロセスを支えられていたと思われる。

以上のような状況は、CIとThとの関係において、Thに依存したくとも依存しきれないという、CIにとっては、半ば一人で苦しむことを強制されるような治療過程を経験させられることになったと思われるが、実際はこのような経験も、上述のような、主体的生への転換を助長したと考えられる。なぜなら、他者の援助が必要な状況ではあったとしても、それを援助者が代わりに苦悩することは不可能であり、そして人間の人格的な成長は、基本的にそのような孤独を軸としてなされる面があるからである。愛情対象の喪失は、前述した通り、「人間の絶対有限性」に直面し、それに苦悩する作業であったが、Thとの関係においてもまた、個別性の限界に直面せざるを得なくなったのである。愛情対象を断念することに、Thへの依存をも断念する苦痛が加算されたわけで、回復までのCI

が通り抜けた苦悩と孤独は、CIの人生においても、非常に特殊な期間となったのである。ここで、孤独のうちに苦悩を抱えることの意義を強調しているが、セラピストによる共感や、クライアントに気持ちを向けていることは必要な要因であって、既述のように、これらのバランスが、苦悩がCIの心に収斂する環境をアレンジするのである。

III 喪失の受容と世界観の変容 1

本項では、悲哀の仕事の結果として、対象の断念が世界観の変容へと導かれる可能性のあることを論じる。

1 臨床素材(2)

60代男性。うつ病により受診。以前にもうつ病やアルコール依存、その他身体的な病気のために入退院を繰り返し、そのためにリストラの対象となり、数年前に退職している状況。面接過程の初期は、うつ病による強い焦燥感と絶望感が面接の雰囲気支配し、カウンセリングを受けることについても拒否的であったが、徐々に、Thとの間に関係性が成立していった。面接過程では、喪失が大きなテーマとなり、特に、それほど自分に向いてなかったと思われる仕事と会社に尽くしたために失った時間についてと、病気により正常な身体的機能を失い、すでに20代である種の身体的なハンディキャップを背負ったことにまつわる苦痛についてが中心となった。そして、面接の後半には、きれいに輝くピンク色の球体を追いかけるが消えてしまう、という夢を頻繁に見るようになった。そして、その夢において、初めは感動や荘厳な感じを味わったが、その後は「猛烈にものすごく悲しい」という感情を体験することが多くなった。これらの体験を通り抜けた結果、「世の中のことはすべて秩序のようなものがある。それを誰かが、何か、何か大きな力が働いてやっている」ので、「流れに逆らうよりは身を任せる。その大きな力の前には抗し切れませんから」と言い、「生きているだけ幸せ」であるという認識に達し、上記の喪失を受容していかれたのである。

2 事例の考察

本事例については、面接過程の詳細な検討とともに、喪失の日本的な受容のあり方について論じている(石津, 2001)が、ここでは本稿に必要なテーマのみについて取り上げたい。CIは、その人生の中でなすべきであった悲哀の仕事に、この治療過程で取り組むことになったが、その作業が進むにつれ、それまでは防衛や日常生活に適應する必要性から意識下にあった、喪失にまつわる感情

が賦活され、夢によって、いわば体験させられるようになる。それらは、CIの人生の底流をなしてきた、様々な喪失体験やそれに伴う苦痛の、掃きだめのようなものだったと言えるであろう。この夢を見始めてからは、この掃きだめの構成要素である個々の具体的な喪失感情もいっそう実感をもって語られるようになった。これらのプロセスを通過して、CIは喪失を受容することができたが、同時に世界観を明確にしていったことが特筆できる。その世界観は、「大きな力」の存在の確信と、それに対して身をゆだねるという態度が特徴的であった。これは消極的でニヒリスティックな態度ではなく、彼の根底にある「大きな力」の実感に支えられたものであり、むしろもっとポジティブなものと考えられた。喪失の受容がこのような世界観に導く理由について、仏教の人間観に基づいて考察したいが、その前に、臨床心理学にとって人間の存在構造に関する考察が必要とされる理由について述べておきたい。セラピストとして目の前のクライアントに向かい合うとき、クライアントは、病を持った「患者」や「通所児童」等である前に「人間」であり、その体験世界がいかにか病気によって修飾されていようと、人間として共通の基盤を有していることに、常に気づかされているものである。そしてその気づきが、「自分もなったかもしれない」、または未来に「なるかもしれない」といった、人間としての共通の可能性を認識させ、それが人間の存在構造の考察を要求するのである。臨床心理学はまだ完全な人格理論を持たないので、理論に治療過程やクライアントそのものを限定的に当てはめてしまう危険性を可能な限り避け、また、セラピストとして時に困難な治療過程に意味を見出すためにも、他の学問領域の成果を援用することは有益な場合があると考えられる。

ここでは、仏教において高度な理論的構築をなしえたといわれる唯識思想を取り上げ、喪失の受容と比較することによって考察したい。(唯識思想については、服部・上山, 1970、太田, 1983、三枝, 1983、横山, 1976, 1979を参考にした)横山(1976)によれば「唯識」とは、現実に認められる外的現象と内的精神とは全て、根源的なもの、すなわち「阿頼耶識」によって表されたものにすぎない、という意味である。自我意識もそこから生じるのであるが、本来そのような実体はなく、自己感覚を設定、維持する根深い働きのために「自己がある」と誤認され続けるという。また、外的な対象も本来実体的なものではなく、自己がそれを

認識すると実体があるかのように固定化され、それに執着する。したがって、もともと何もない実体が、何もない実体を愛していることに気づかず、対象に愛着するので苦しみが生じることになる。そこで、あらゆる事象や存在は根源的なものがつくりだした幻にすぎない、と真に理解することによって、そのようにさせている潜在的な力が根底から消滅し、安心の境地に達するという。ところで、喪失の受容とは、外的対象や自己の要求を断念することが本質であろう。そして唯識思想の場合、対象と自己に対する断念が極端に推し進められている状況が説かれていると考えられ、この状況では「対象や自己が幻影にすぎない」と認識されるまでに至る。それに対し一般的な喪失の受容の場合はそこまでに至らず、対象や自己の喪失が無常観や諦観を実感させるにとどまると考えられる。つまり、両者は対象や自己の断念がもたらす感慨や認識という共通の事態が問題になっていると見ることができる。さらに唯識思想の場合、このような断念は同時に、「根源的なもの（阿頼耶識）が自己や対象の全てを現象させている」と自覚することでもある。一方、一般的な運命受容の場合はそこまでの宗教的認識には至らないが、CIらの認識する「大きな力」を、「阿頼耶識」のイメージで見るとより良く理解できるように思われる。すなわち、「暴流」（「唯識三十頌」三枝，1983）のように生滅しつつ不断に対象と自己を現象させてゆく根源的な生命力の流れ、というイメージである。つまり、そのような根源的な生命力の存在を仮定し、その働きに身をまかせ、またそれがCIを支えているのだと考えると、対象や自己の苦痛を伴う断念にもかかわらず、どうして「大きな力には抗しきれない」と達観し、「生きてるだけ幸せ」という境地にいられるのが理解できる気がするのである。

以上、喪失の受容、すなわち対象への愛着と自己の要求を断念することは、唯識の実践と相似であり、人間の存在構造における根源的なものの認識に開かれる可能性のあることを論じた。

IV 喪失の受容と世界観の変容 2

本項では、小学生の娘を殺害された母親の体験を素材として取り上げ、考察したい。以下の母親の体験の記述は、山下（1998、2003）の著書から構成したものである。

1 ある母親の手記から

集中治療室で昏睡状態にある娘と共にした一週間に、母親は「命の深い秘密」を教えられること

になる。加害少年の行為は絶対に許されることではないとしながらも、少年の凶行は娘の内なる「命の力が自ら選択したきっかけ」にすぎず、「粛々と自分自身の寿命の最終章に進んでいく」とする認識に達するのである。また、苦悩の日々の中である印象的な体験をする。誰かに呼び止められたような気がして振り向くと、それまでに見たこともない美しい月の姿が飛び込んでくる。じっと見つめていると、亡くなった娘の笑顔になり、「お母さん、私は大丈夫。だから、もう人を憎まなくてもええんよ」という娘の声が胸に響いた。その頃は、憎しみと恨みに支えられて生きていたといっても過言ではなく、鏡を見れば、いくら笑顔をつくろうとしても、怖く悲しい自分の目が映って愕然とするような苦悩の極地にあったが、この月の体験を機に、「温かい心を取り戻して」いたのである。そして加害者の少年に対して、一方で許しがたく、怒りや憎しみの感情を抱えながらも、「思い切り抱きしめて、共に泣きたい。言葉はなくても、共に苦しみたい」という感情も不思議と湧き上がってくるのである。

2 母親の体験における苦悩することの意義

上記の母親の内的な変容過程のプロセスは、読むものにとって深く心を動かされるものである。母親と家族を襲ったこの事件は、尋常でない苦痛を母親らに与えることになったが、母親はそれを苦悩しぬくことによって、生死に対するより深い認識に啓かれたのだと考えられる。娘の内なる命の力が自身の運命を全うする、という母親の認識は、合理化などの防衛のたぐいであるとは考えられず、母親の心の奥深いところに由来する生命観であると思われる。母親を襲った苦悩の衝撃は心の表層を突き抜け、深層においての、生命観の根源的な再構成を促したと考えられる。

ところで、「月の体験」が意味深いものであることも間違いないと思われるが、本稿の文脈に沿った考察を行う際、Jung（1921、1957）の「超越機能」の概念が参考になるのではないと思われる。この概念についてJung（1921、1957）の説明をまとめると次のようになる。すなわち、自我が無意識内の情動と取り組み、しかも例えば、それを単に知的に理解することによってその情動のダイナミズムを剥奪することなしに、真剣に向き合い続けている場合、エネルギーは退行し、無意識が活性化してくる。すると、自我と無意識双方に深く関わり、なおかつ両者の対立を止揚するような象徴が生じ、停滞していた生は新たな力を得て前進していくことができる。このようなプロセス全体

が超越機能である。母親の場合であれば、自身の心に向き合い続け、また苦悩を保持し続けることによって、深層が活性化され、その頂点で強烈な現実感を伴う娘のイメージが産出され、母親が癒される節目の体験となったのであろう。この「月の体験」の場合、現実の外的な環境である月によって、母親のイメージ体験が触発されている、あるいは、母親の内的な準備状態が整ったところで「誰かに呼び止められる」ことになるが、いずれにせよ、「月」という外的な対象そのもののイメージがになっている要因も大きいのではないかと思われる。月は古代から様々な象徴を付与されるものであり、また信仰の対象であったが、ここでは、内省の深まりとともに作動した、意識にとっては超越的な領域ではたらく、苦悩を包含し、人格を統合する力の象徴であったと考えてみたい。苦悩を保持することは、人格の最深部にある統合機能を賦活するのである。そして「月」は統合機能の象徴として、母親の内界をも照らしたのである。さらに、一般に月は女性的あるいは母性的な機能の象徴であるとされ、人格の深層からの再統合の結果、「共に泣き、共に苦しむ」という心境を生み出しつつあった母親の心にとっては、この点でも適切な象徴であったと思われる。

V 苦悩の意味とそれを超えること

本稿で提示した臨床例の2事例では、苦悩しぬくことが、よりポジティブな人生への転換や人格の成長に導くことがわかる。また、手記から引用した母親の体験についても、立ち入った考察は控える必要があるにしても、より深い生命観に導かれたと考えられる。ところで、苦悩させるきっかけとなった出来事は、それぞれ、不幸な形態の恋愛であり、また、病気による後遺症や、悔いても取り返しのつかない生き方、凄惨な事件に巻き込まれて家族を失うことに関するものであった。これらを前もって回避することは、原理上は不可能ではない部分もあるだろうが、現実にはほとんど不可能といってよいであろう。呈示した臨床例の場合、クライアントは自分から好んでこれらの事態に巻き込まれているわけではないし、また症状を惹き起こしたのでもない。クライアントの家族関係の歴史やその他の環境、遺伝的素質、対人関係、などが複雑に絡み合い、個人的な意志はあるにせよ、それではコントロールできない流れの中で発症に至っている。したがって、これらの出来事自体を「運命的」とであるといって差し支えないと思われる。この「運命」とそれによって苦悩するという

人間のあり方は、既述のように、人間の存在構造の考察の対象として意味のあることであろう。人間が「運命」に対して無力であることは、人類史で繰り返し経験されてきたことであり、それは例えばギリシャ神話で運命をつかさどる神「モイラ」に投影されている。モイラは、クロト、ラケシス、アトロポスで構成される3姉妹の女神であり、クロトが運命の糸を紡ぎ、ラケシスが繰り出された糸の長さを測り、アトロポスが鉗でその糸を切断し運命が確定する。この切断による確定は不可逆であり、人間は当然のことながら、神々であってもこれに従わなくてはならない。ここに、運命における不可避性、それに対する人間の意志の無力さといったものの投影をみることができる。したがって、苦悩するきっかけとなる出来事や病気などは、人間の意志などということとはほとんど無関係に、いわば受動的に被らざるを得ないものも多くあるのである。我々は、それを認識した上で、このような全く受動的な状況が、人格成長の契機となりうることを明確に認めるべきではないかと思われる。科学的な思考パターンや方法論があまりにも強力であったため、「運命」などという現象は捨象されるか科学的方法論で扱えるかのような錯覚を起こさせるのであるが、人間にとって受動的、受苦的なあり方（パトス性）は、現代になっても依然として人間存在に不可避的につきまとうものなのである（中村, 1992）。したがって本来、これらパトス的なものは科学的な方法論によって、あらかじめ設定された計画によって処理されるという思考パターンで考えられるべきものではなく、むしろ、パトス的なものによる苦悩は、自分のこととして苦悩することが要請されており、それがパトス的なものの本質であると考えられるのである。（手記から引用した母親の体験においては、「運命」をも包摂する認識に達しているが、それが起こった時点では、やはり多くの人はそのように認識できないであろう。）したがって、臨床家として、クライアントの「問題」を操作的に除去、処理するというような、対象と距離を置いた客観的な態度は、それを要する局面があるにせよ、突出してはならないのであり、技法以前の態度として必要とされるものだと考えられる。

以上のように、苦悩の本質はパトス性を帯びる「運命」的なものによってもたらされるのであって、それを真摯に受け止める作業が人格成長を促すのであるが、既述した事例において、これらの苦悩が人格変容に資する衝撃力を持っていることも、もはや明らかに認められるものと思われる。

これは、臨床素材1では、対象依存から主体性への転換を促すことが認められたし、臨床素材2では人間存在の根源的なものの認識に開かれる可能性すらあることが示唆された。いずれにせよ、苦悩することは自己のあり方についての探求を促すのである。ところで、臨床心理学はこの「運命」自体に対しては無力であるが、援助者がクライアントの苦悩する過程を支えることは可能である。ここで援助者の基本的なあり方が重要になるが、具体的な技法以前に、既述のように、クライアントの苦悩を前にして、「自分もなったかもしれない」、または未来に「なるかもしれない」という可能性に援助者が開かれることが肝要であろうと思われる。これは援助者の能動的な想像力が必要なばかりではなく、むしろ、そのクライアントの苦悩する姿から、いわば共通の運命をたどるものとして、否応なく受動的に感じさせられるものなのであり、逆転移現象として片付けられるような、表面的な援助者の心の動きではない。セラピストは、これらのような基本的な態度を保持し、クライアントが可能な限り苦悩できるようなあり方をするのであって、技法もこの文脈で活きるのである。

VI おわりに

苦悩に深く、忍耐強く向き合うことの意義を論じたが、筆者は人間における運命的なものに対して楽観的なわけではない。病理の重いクライアントに対しては、援助など全く無力であると思われ知らされることも多い。運命的なものとはしばしば、人間の分別など全くかまうことなく人間を破滅へと導く。現代においても、震災等によって、「何の理由もなく」何千人もの命が一瞬にして奪われるのである。まことに「天地不仁」(老子)であって、むしろこれが自然の本性であろう。臨床家はこの自然の本性を率直に認め、また想うことによって、上記のような、共通の運命をたどるものとしての共感が可能になるのであって、一見援助困難と思われる事例においても、希望を見出すことができる場合があるのである。

引用文献

- 服部正明・上山春平 1970 仏教の思想4 認識と超越〈唯識〉角川書店
 石津孝治 2001 うつ病のカウンセリングにおける悲哀の仕事と喪失の日本的受容 - 初老男性の事例を通して カウンセリング研究, 34, 60-68.

- 石津孝治 2002 心的外傷のカウンセリング - 暴力を受けた女性の事例から - カウンセリング研究, 35, 59-66.
 Jung, C. G. 1921/1960/1967 Psychologische Typen. Zurich: Rascher Verlag. (林道義訳 1987 タイプ論 みすず書房)
 Jung, C. G. 1957 Die transzendente Funktion, in Gesammelte Werke von C. G. Jung. Olten: Walter Verlag. (松代洋一 1996 創造する無意識 平凡社)
 中村雄二郎 1992 臨床の知とは何か 岩波書店
 小此木啓吾 1979 対象喪失 中央公論社
 太田久紀 1983 仏教の深層心理 有斐閣
 三枝充恵 1983 人類の知的遺産14 ヴァスバンドゥ 講談社
 山下京子 1998 彩花へー「生きる力」をありがとう 河出書房新社
 山下京子 2003 彩花が教えてくれた幸福 ポプラ社
 横山絃一 1976 唯識思想入門 第三文明社
 横山絃一 1979 唯識の哲学 平楽寺書店

A Psychological Meaning of Sufferings

Kouji ISHIZU

Toyama College of Welfare Science

I discussed a psychological meaning of sufferings through two clinical cases and one note with experiences. I considered a meaning of sufferings. And I made clear sufferings formed personality development. In the first case, I discussed she could live independently by despairing an object relation. In the second case, I discussed sufferings developed mourning work and gave him a deep philosophy of life. And the condition resembled Buddhist thought. In the note with experiences, I discussed sufferings worked a transcendence function of the symbol. Finally, I concluded that destined sufferings was one essence of human being and we had to suffer for our sufferings seriously.

Key Words : sufferings, object loss, personality development, destiny

子どもの行為の成り立ちと自己実現

富山福祉短期大学 村田 透

(受付2008年2月18日)

キーワード

意味分節、相互行為分析、＜意味空間＞生成

はじめに

本稿は、子どもの行為の実際にかかわり、その行為を個または複数の単位でとりあげ、子ども一人一人の行為の成り立ちの在り様から、自己実現について考察するものである。

子どもの行為をとらえ返す意図は、その一つ一つの行為を、子ども一人一人の＜私＞のかけがえのない＜生＞の行為¹として保障するためである。なぜならば、子どもの行為一つ一つは、＜いま—ここ＞²に立ち表れる＜生＞の一貫した営みとしての生きる行為であると感じられるからである。つまり、子どもの一つ一つの行為は、その存在の根拠の立ち表れそのものであると思われるのである。

しかし、今日まで私たち大人は、そのような子どもの行為に対して、大人の側の価値から見るという一方向的なかかわり方をして、大人に都合のよいように子どもの行為の意味をつくりかえてきたのではないだろうか。その結果、子どもを、その現実の＜生＞と切り離して客観的に対象化し、大人という完成体へと段階的に発達する途上の存在であるというとらえ方を固定的にしたのである。そして、それを自明なものとして、子どもの行為にみられるあいまいさを排除してきたと考える³。

そのため、私たち大人自らが固定的な価値概念をいったん括弧に入れて、子どもの行為の場に身を委ねながらかかわっていき、その＜生＞の行為の場を子どもとともに作りだしていくことを試みることにした。具体的には、子どもの造形行為の場に臨み、それをビデオ等に記録し、それに基づいて、＜いま—ここ＞の場の構成の在り方と意味の創出の在り方を分析していくことにする。さらに、井筒俊彦の意味分節理論と意識構造モデルを援用しながら、子どもの意識のはたらきと自己実現の在り様を考察していくことにする。

1. 存在の深みから立ち上がる子どもの行為

1. 子どもの生活世界への回帰

子ども一人一人の行為をかけがえのない＜生＞の行為として保障する試みの態度として、「発達心理学的還元」の態度の実践をあげることができる。この態度について、鯨岡峻は、子どものありのままの事象とかかわるために必要な「ニュアンスを嗅ぎ分ける印象受容能力」を高めるために、学問的関心の保留、確認する態度を還元する態度としている⁴。

この態度をとることの意味は、私たち大人が、子どもの行為の世界に臨み、その場をともに作りあげる実践者となっていく上で、これまで自明なものとしてきた子ども観のままでは立ち行かないことになると思われるからである。なぜなら、子どもたちは、大人とは異なる子ども独自のコミュニケーションをとりながら「訓化した身体」⁵に亀裂を入れ、複雑に意味を交流させて子ども社会をつくりだしていると思われるからである。

私たち大人が、子どもの行為の場の協働の実践者⁶になり、かつ、子ども一人一人の行為を、かけがえのない＜生＞の行為として位置付けられるようにするためには、子ども観そのものにとらえ返しが必要である。すなわち、大人による子どもの生活世界への回帰⁷ということになる。

今回とりあげる子どもの造形行為において、具体的にそれは、子ども一人一人が身体のかかわりによる個性を関与させ、身の周りの世界と意思のままにかかわり、「こうなるとは限らない」、「こういうことも考えられる」、「いや、やってみればわからない」というように、現実や客観性をひらき、柔軟な思考を働かせ、何事かをつくりだしていく場のことである⁸。その生活世界に私たち大人が回帰するということは、自らの先見や予見(作品、プロセス、能率・効率性など)をいったん括弧に入れて、子どもたちの行為の場に身を置き、子どもとともに生きることでありといえる。

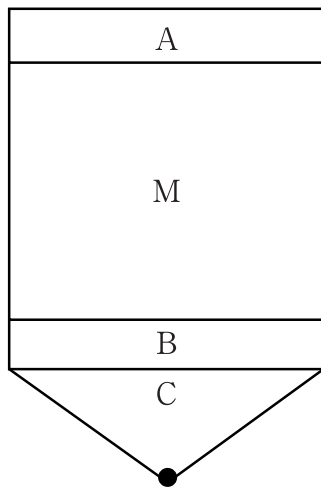
2. 子どもの生活世界への回帰と意味分節理論

井筒俊彦は、我々の目の前に立ち表れる世界を、始めからそこにあるものとして客観的に与えられた実体ではなく、人間が言葉を通じて有意味的に織りだした一つの記号空間であるとして、「現実

一つのテキスト」であるとしている⁹。井筒の考えに基づくと、子ども観やその他の諸概念や自分や他者の存在自体も、一つのテキストとしてみることができる。これらは、作りだされたものである以上、私たち大人が生活世界へ回帰し、「訓化した身体」に亀裂を入れることで新たな織り直しが可能といえる。

そのような考えに基づいて、井筒の人間の意識構造モデルをとりあげ、有意味化して現実の世界をつくりだす人間の意識のはたらきをとらえていくことにする。

井筒は、人間の意識構造モデルを提示し、次のように述べている。



Aは表層意識を、そしてその下は全部深層意識を表す。深層意識領域をさらに三つの領域に分けてB-CおよびMとする。このうち、最も下の一点を意識のゼロ・ポイント。それに続くCは無意識の領域。全体的に無意識ではあるが、Bの領域に近づくにつれて次第に意識化への胎動を見せる。(略) 構造上、C領域の一段上にあるBは、言語アラヤ識の領域。(略) 大体において、ユングのいわゆる集団的無意識あるいは文化的無意識の領域に該当し、「元型」成立の場所である。

そしてBとAとのあいだに広がる中間(M)地帯が、「想像的」イメージの場所。B領域で成立した「元型」は、このM領域で、様々なイメージとして生起し、そこで独特の機能を発揮する。¹⁰

このAの表層意識に立ち表れた世界を我々は現実といっているが、生活世界への回帰というときに指し示す世界はこれに止まるものではない。こ

のA領域の世界は、制度的な表層としての世界のことである。しかし、我々は、通常この世界が現実であると自明視しているからこそ、そこに踏み止まって生きることに何ら疑いを持たないのである。

井筒は、この制度的な表層の下に、世界をつくりだす意味エネルギーが流動的にうごめく創造的意識(深層意識)の次元を想定するのである。深層意識内のM領域の下にB領域を想定し、そこが全ての意味と呼ばれるものが誕生する領域としてアラヤ識を想定している。井筒は、日常の世界とのかかわりのなかで経験したあらゆるものが、深層の意識(アラヤ識)に蓄えられ、次第に意味の「種子」へと変成していくと述べている。この「種子」は条件を整えば表層の意識の次元に浮かび上がってきて顕在化し、意味となり現実をつくりだすとしている。このことから、我々が具体的にかかわる世界は、アラヤ識そのものの外化形態に他ならない¹¹ということになる。このような現実の世界の立ち表れの在り様を、井筒は意味分節¹²と言い表している。

3. 「熏習」のプロセスと行為の成り立ち

ここでは創造性の源がアラヤ識にあると想定した上で、その行為の成り立ちの在り様について考察していく。

子どもが何事かを行為する場面において、身の周りの他者やものとかかわって、何事かをつくりだしていく様子を見ることが出来る。その行為の成り立ちを考察する上で、井筒の「熏習(くんじゅう)」という概念を援用していくこととする。

井筒は「熏習」について、日常の世界とのかかわりのなかで経験したあらゆるものの全てが、次第に意味の「種子」へと変成し、表層の意識の次元に浮かび上がってきて、顕在化し意味となり現実をつくりだす意味分節の在り様であるとしている。このような人間の行為の一つ一つが、心の無意識の深みに何事かの印象を残していく在り様を、「移り香(うつりが)」現象のことにたとえて「熏習」と言い表している¹³。

具体的に言うと、他者やものなどとかかわることによって生じた何事かの経験の一つ一つは、深層の意識の次元に必ず何かの痕跡を残していく。その深層の意識の次元に残った痕跡は次第に意味の「種子」となり、意味の「種子」はアラヤ識に貯えられる。この意味の「種子」は、条件を整えば意味となって表層の意識の次元に浮かび上がる。このプロセスにおいて、経験がアラヤ識を熏習して意

味の「種子」を生み、経験が「種子」を熏習して「意味」を生む。そして、逆に「種子」は新たな経験を触発する。さらに、意味として顕在化しない「種子」は、アラヤ識のなかで潜在状態のままで別の「種子」を生み出していく。「熏習」のプロセスは、「種子」から「意味」へという一方向的な在り様ではない。また、影響を与える側と影響を受ける側の関係も同様で、関係は絶えず入れ替わる。

井筒の意味分節理論に基づくならば、我々が具体的にかかわる世界は、客観的実体ではなく、アラヤ識そのものの外化形態である。私や他者やものなどは、物理的には個別に存在している。しかし、人間の意識野においては、自分の存在も含めたそれぞれは、テキストとして関係のなかに組み込まれた、自分の外と内の世界というように分かちることができない、作用・反作用の内的ドラマであるということができる。つまり、心（意識内の出来事）と体（経験する根拠）とは切り離して考えることはできないということである。

このことは、常に自分自身は他者やものなどの身の周りの世界とかかわり、かかわられる関係が成り立っているということの意味する（以後、自分自身が他者やものとかかわり合いながら何事か作りだしている在り様を、“かかわり・行為している”と表記する）。

以上のことから、人間の行為の成り立ちの在り様は、自分自身を根拠として、意識の深層から表層まで分かちことなく働かせ、自分の身の周り全てを関係のなかに組み、何事かの意味のある現実世界（意味空間）をつくりだす在り様ということができる。

II. 意味空間をつくりだす子どもたちの事例

1. エスノメソドロジーと相互行為分析の視点

実際に子どもの意味空間をつくりだす行為の具体性に迫るために、エスノメソドロジーと相互行為分析という手法を用いて子どもたちの行為の実際を分析、考察していく。

エスノメソドロジーは、カリフォルニア大学のガーフィンケルらが開拓した方法である。その内容は、我々が生活者として生きている“常識”自体を主題化する営みといえる。また、エスノメソッド (ethno-method) とは、人々が使う方法という意味であり、我々が生きていた生活史のなかで形成されてきたいろいろな知識・体験の総体を意味する。その知識・体験の総体＝常識を、一旦括弧に入れて、<いま—ここ>の場面に即して相

対化する営みである¹⁴。つまり、エスノメソドロジーは、生活世界への回帰としての態度そのものであるといえる。

エスノメソドロジーでは「常識」で隠蔽されている「日常」を、具体的な場面で「他の人々とともに推論し行為し、協働して現実を達成している」「協働作業 (reality works)」の場として<いま—ここ>の現実即して凝視することから始める。そのことで「日常」を「協働的实践」の無限の意味生成の場として作りかえていくのである¹⁵。

この構えは、相互行為分析においても共通である。相互行為分析は、個別の社会秩序が規範的秩序としてどのように組み上げられていくかを、丹念に例示していくことで、その社会秩序についての概観をえることである¹⁶。

2. 子どものかかわり・行為 —事例の分析—

(1). 『粘土とともだち』事例分析 (資料1参照)

この事例では、bとdを中心に考察を進めていく。

bは、活動開始からこの場面までの間、aやdと個別やグループになって、粘土を足で踏んだり、手でもんだりして、粘土と何事かの関係をつくりだしている。そして、(04)で、cが雨水に濡らして柔らかくした粘土を手を持って、bにかかわり・行為してくる。この時、bは、cのかかわり・行為の在り様を見ただけである。(05)で、bは、柔らかい粘土を両手で触りながら何事かをしている。そして、(07, 08)でbは、両手で粘土をもみ合わせながら、dに「ね：：：()くっついた」と言う。

このbの言葉から、彼は両手で粘土を触りつづけることで、新たな意味空間 (b<手と手をくっつける>)をつくりだしたと見ることができる。その意味空間ができるうえで、bは(04)で、cの意味空間 (c<粘土を雨水に濡らし柔らかくする>)を見聞きする。そのことでbは、cの意味空間を自分と粘土との関係に組み入れて新たな意味空間をつくりだしたといえる。bは、自分と粘土、自分と他者という二つの関係をつくりつづけることで、新たな意味空間 (b<手と手をくっつける>)をつくりだしていると見ることができる。

dは、(01~08)までの間に、足で粘土を踏んだり、粘土を手で触ったり、粘土を丸太に投げたりする。そのようなdに、bが「手錠はめられた感じ」と言ってくる。このbに対してdは、(09)で「あっそうだ 手に塗ろう」と言って、自分の

手の甲の上に粘土を乗せ始める。

(09)でdは、新たな意味空間(d<自分の手の甲の上に粘土を乗せる>)をつくりだしたと見ることができる。この新たな意味空間は、dが丸太に粘土を投げたり、手で触ったりしてつくりだしてきた自分と粘土との関係に、新たにbの意味空間(b<手と手をくっつける>)を組み入れ、それまでの関係を組み替えることでつくりだしたと見ることができる。

さらに、(11)で、dは、bに「ねえ 手に()って」と言う。このdのかかわり・行為によって、bは、dの意味空間(d<自分の手の甲の上に粘土を乗せる>)を見聞きして、それまでの関係のなかに組み入れたと思われる。そのことで、bには新たな意味空間(b<他者(d)の手の甲の上に粘土を乗せつづける>)がつくりだされたと見ることができる。同時に、dも新たな意味空間(d<他者(b)から、自分の手の甲の上に粘土を乗せられる>)がつくりだされたと見ることができる。このbとdの意味空間の生成の在り様は、かかわり、かかわられるという在り様がより顕在化したかたちで成り立っているということができる。

(2).『ゆめのくにをつくらう』事例分析(資料2参照)

この事例では、aとbを中心に考察を進めていく。

aとbは、活動当初から行動を共にしていた。aとbは、ローラーやスポンジ筆を手にして絵具をつけるなかで、紙の上に線を引き、それが次第に虹になっていく。その描き方もaが一本線を描いたら、次にbがその下に一本線を加えるといった進み方である。その後、aとbは、ボク・ワタシやイチゴをそれぞれ描き始める。

(01)で、aはイチゴを描く行為が一段楽しめたのか、紙をまたいで黄色い絵具が出ているパレットの近くへ移動する。aは周囲を見回したり、考えたりするような仕草をしながら、アシスタントのNに「手かこっかな：：」(02)という。Nとaとのやりとりのなかで、aの世界が認められ、その後のaは(a<黄色絵具を手につける>)(a<黄色の手形を紙につける>)という意味空間をつくりだしていく。

その時bは、同じ紙の上でイチゴを描いていた。その内、(02)でのaとNとのやりとりを見聞きしたり、アシスタントのTの「手つかってもいいんだよ」(03)という働きかけがあり、bの行為も(b

<ピンク絵具を手につける>)(b<ピンクの手形をつける>)へ展開していく。

ここで注目したいのは、bの行為である。bは、虹を描く行為の時点から、aに影響を受ける形で自らの行為をつくりだしている。bの行為は、aの行為がきっかけになっているのである。具体的に挙げると(a<虹の輪を描く>)→(b<aの虹の輪の下に、輪を描く>)、(a<イチゴを描く>)→(b<aのイチゴと同じ向きで、イチゴを描く>)、(a<黄色の手形をつける>)(06)→(b<aの黄色の手形の近くに、ピンクの手形をつける>)・(b<aの黄色い手形の近くに、黄色の手形をつける>)である。

その後aは、虹の絵の近くに(a<黒色の手形をつける>)(07)を行った後、手を洗ったり、周りを見たりしながら座っている。その時、bとTがつくりだした意味空間(b<足の裏に絵具をつける>)(13)、(b<足形をつける>)(15)を見る。aは、虹の輪の一番下にスポンジ筆で黒の線を描いた後、新たな意味空間(a<黒色の絵具を手につける>)、(a<N、Tの腕に黒色の手形をつける>)(18)をつくりだしていく。

aとbとの関係において、常にbの活動を誘発していたaであるが、bやその他の人やもののかかわり・行為のなかで、意味空間をつくりかえていった。さらに遡ると、aの(a<黄色の手形をつける>)(06)は、造形室内での他の班で先に行われていたことである。また、(a・b<虹を描く>)についても、前後関係は定かではないが他の複数の班に見られた。

III. <自己>の実現と子どもの行為

1. 状況に応じてつくりだされる意味空間

この二つの事例の子どもたちのかかわり・行為を、仮に「私ともの」「私と他者ともの」という視点でその特徴を取り上げていく。

「私ともの」の視点において、『粘土とともだち』での意味空間(b<手と手をくっつける>)(04)や(d<自分の手の甲の上に粘土を乗せる>)(09)などで見られるように、子どもたちは粘土を触りつづけるなかで、意味空間をつくりつけていく。その在り様は、粘土のやわらかさ(触覚)やかたちの見え(視覚)、雨水など他の素材との組み合わせなどによって生じる、自分とものとの関係の変化をつくりだし、楽しむ在り様である。この在り様は、『ゆめのくに』のaやbの手形足形をつくるなどの意味空間でも同様にみることができる。

「私と他者との」の視点において、『粘土とともだち』では、(b<手と手をくっつける>) (04) → (d<自分の手の甲の上に粘土を乗せる>) (09) → (b<他者 (d) の手の甲の上に粘土を乗せつづける>)・(d<他者 (b) から、手の甲の上に粘土を乗せられる>) (11) という密接な他者との関わり方の在り様が見られる。『ゆめのくに』においても、(a<黄色の手形をつける>) (06) → (b<aの黄色の手形の近くに、ピンクの手形をつける>)・(b<aの黄色い手形の近くに、黄色の手形をつける>) というように、そこでは他者がかかわり・行為してくる (他者が自らの意味空間をかかわらせてくる) ことで、かかわられる方は、意識するしないにかかわらず、その他者のかかわり・行為を見聞きする (見聞きしてしまう)。そのことで、他者の意味空間を、それまで自分が作りだしてきた関係に組み入れる (組み入れてしまう)。そこから、お互いに関係の組替えが生じ、新しい何事かの意味空間が作りだされていく。

この二つの事例では、子どもたちの年齢的な違いこそあれ、「私ともの」「私と他者との」を通して“意図的、意識的であるなしにかかわらず、また、作りだしたいものを具体的にあらかじめ思い描いてかかわり・行為するしないにかかわらず、その都度ごとの<いま—ここ>の状況に応じて”という意味空間の生成の在り様を共通して見出すことができる。このことは、子どもが作りだした意味空間の在り様は、その子どもにとって必ずしも論理一貫性があるものではなく、明確に具体的な見通しによって作りだされているとは限らないということを意味している。

この様な子どもの意味空間をつくりだす在り様を理解する手がかりとして、子どもたちの言語、その伴うコミュニケーションを取り上げ、考察を進めていく。

I章で、井筒の意味分節理論を取り上げ、我々の目の前の現実世界を、客観的な実体ではなく、アラヤ識そのものの外化形態としてきた。井筒によると、「アラヤ識」は全体として根源的に言語的性格を持つ。ゆえに「意味」は、本性上、「名」を呼び、「名」は「存在」を呼ぶ。その在り様は「存在形象」。つまり、ものの「名」は、そのもの自体を形象的な存在として呼出してくるとしている¹⁷。

我々人間は、根源的本性として、身の周りの世界を言語化し表層的秩序をつくりだすことによって、無限に広がる世界を意味化し理解して生きている。そして、この意味空間は、顕在化した意味や未だ顕在化することのない意味の「種子」や

様々な経験などと双方向的な相互関係で成り立っている。「存在形象」としての意味空間が言語的性格を持つということは、表層の意識の次元で制度的に固定化した意味としての言語的性格ではなく、表層的意識から深層的意識の次元において、未だ顕在化することのない非言語的なものまで含んだ意味での言語的性格なのである。つまり意味空間は、表層から深層的意識の次元までを含んだ意味化のプロセス全体の広がりとして流動性を持って成り立っているのである。

子どもは、b「手錠はめられた感じ」(08) やd「あっそうだ 手に塗ろう」(09) (『粘土とともだち』)、a「手かこっかな：：」(02) やa「黒だらけ：：：」(07) (『ゆめのくに』) に見られるように、言語を発することで、自分のおもい(感想、提案、疑問など)を相手に伝える。同時に、自分と身の周りの世界との関係(意味空間)を自分自身に対して明らかにしているのである。その言語化された意味空間がきっかけとなり、他者やものとの通路ができ、同時に未だに意味を持たない意味の「種子」や経験や先に意味をもった意味空間を刺激して、新たな関係、新たな意味空間をつくり出して行くのである。

このことから、<意味空間>生成=<表層の意識次元⇔深層的意識次元>ということができているのではないだろうか(⇔印は、相互作用をしていることを意味する)。

2. <意味空間>生成と<自己>実現

ここでは子どもの意味空間をつくりだす行為と、子どもの存在根拠とのかかわりについて考察を進めていく。

井筒は人間の意味化のプロセスや意識構造の在り様について、次のように述べている。

本論の前半部分で、まだ東洋哲学のことを話しだす前に、私はユングにならって「自己」と「自我」とを区別する考え方を導入しました。この区別を、今ここで憶い返してみますなら、先ほどご説明いたしましたような形で「無」と「有」のあいだ、つまり無分節と有分節のあいだ、を往還する多層多重的意識構造の全部を、観相的に一挙に自覚した主体が、すなわち東洋哲学の考える「自己」であるということがおわかりいただけたのではないかと思います。¹⁸

ここで言う自己とは、多層多重的意識構造の全部を観相的に一挙に自覚しつつ、多面的存在リアリティに応じていく流動性を有する存在の在り様

である。また、人間存在の根源的在り様としての存在形象の喚起は、心（意識の表層から深層の出来事。意味の「種子」、意味、様々な経験）と体（経験する根拠であり、外の世界との起点）をはたらかせた在り様であった。つまり自己とは、心身（内と外）は分離できない、統合体としての人間の生きる在り様ということができよう。

それでは、子どもの＜意味空間＞生成の行為に見られる、必ずしも“意図的、意識的、論理一貫的であるなしにかかわらず”、“その都度ごとの＜いま—ここ＞の状況に応じて”という在り様と自己とのかかわりは、どの様に理解したらよいのであろうか。

認知科学の“人が何かわかる”という問いに対し、“視点”という概念からアプローチする宮崎清孝・上野直樹は次のように述べる。認知とは、自らの身体を移動させることによって、視点を移動させ、新たな見えを生成し、自分と対象の関係のなかに連続的な“構造”と“機能”の見えをつくりだすということである。認知とは全身的な身体感覚の在り様であり、あらゆる意味で“対話的”であり“状況的”であると述べている。さらに、見えやその変化のなかに含まれる情報は、対象や環境のそればかりではない。私たちは、事物を見ることを通して自らの視点についての情報を抽出しているのである。つまり、見るということは、ある意味では、自分を見ることに等しいのである¹⁹。

このことは、造形活動で言われる素材（粘土や絵具や紙など）の特性や活動内容の理解についても、個々の存在と切り離されて客観的に匿名的に存在する知識や技術などの理解だけではないのである。それは、子どもが“その都度ごとの＜いま—ここ＞の状況に応じて”、連続的な変化のなかで見つけた機能・構造という、その子ども固有の見えであるといえる。そして、その固有の見えすら、子どもにとって多様な可能性の一つに過ぎず、さらにつくりつづけられて、また新たな見えを再構築していくのである。

この認知（“人が何かわかる”）のプロセスは、＜意味空間＞生成のプロセスと言い換えてもよいであろう。そして、一つの見えの可能性に留まらない子どもの在り様こそ、井筒が言う自己（多層多重的意識構造から立ち上がる、多面的存在リアリティ）といえるのではないだろうか。＜意味空間＞生成の行為において、子どもは、自らの身体を根拠にして何事かを感じ、何事かを考え、何事か行為している。かつ共起的に意識の深層から表層まではたらせて、身の周りの世界との関係をつく

り、意味空間（自らの見え）をつくり、自己をつくりだしているのである。

このような心身の統合体としての子どもがつくりだした意味空間であるからこそ、それら一つ一つは、代替可能な抽象的一般的な子ども像がつくりだした意味空間ではなく、その子どもの存在根拠の立ち表れそのものであるといえる。この意味において、子どもの＜意味空間＞生成の行為が、その子どもの特定の名がついたかけがえのない＜生＞の行為であるといえる。

以上のことから、子どもたちの＜意味空間＞生成の行為の在り様は、＜自己＞実現の営みであるといえることができる。つまり、＜意味空間＞生成＝＜表層的意識次元⇔深層的意識次元＞＝＜自己＞実現といえることができる。

3. 他者ととも実現される＜自己＞

ここでとりあげていくのは＜自己＞実現と他者（他者の＜自己＞、他者の＜意味空間＞）との関係である。

先に、子どもがつくりだした一つ一つの意味空間は、他者との相互関係のなかでつくりだされたものであるが、同時に、その子の＜自己＞から立ち上がる、代替不可能なかけがえのないもの（身体感覚を伴った固有の見え）であるとしてきた。つまり、それら一つ一つの意味空間は、どれも異なっているといえる。

このことは、自他の相互の意味空間の交流には、必然的にズレ（差異）が生じる可能性を含んでいることを意味する。しかし、子どもは、粘土をお互いの手に乗せあったり、他者が絵具で手形・足形をつけることを見て真似たりするなかで、意味空間にズレを生じさせ、自らがつくりだしてきた関係を組み替える。同時に、そのズレが新たなズレを生みだし、＜意味空間＞生成のプロセスを閉じることなく展開しつづけていく。

この意味空間の相互交流におけるズレ（差異）の意味について、再度認知科学の視点を取り上げる。先に宮崎・上野が述べたように、視点（見え）について、それに含まれる情報には、対象や環境についての情報に加え、その見えをつくりだした自分自身の身体感覚への視点情報（つまり自分を見ること）が含まれる。

この視点に身体感覚を有することの重要な意味の一つに、他者理解がある。宮崎・上野は他者の心情の理解手段として、＜見え＞の先行方略（その他者が彼の周りの世界についてもっているであろう彼から見た＜見え＞を生成してみる）という

在り様を取り上げる²⁰。

〈見え〉の先行方略について、それが適切なものとして作用するためには、他者の視覚や心情のイメージだけでは十分ではない。なぜなら、自己の〈見え〉が身体感覚を伴っていると同様、他者の〈見え〉についても身体のあらゆる部位にわたる身体感覚がともなっているからである。しかも、適切な見えの生成は、〈見え〉の先行方略がまず完璧な見えを生成し、そこから心情を理解するといった一方向的なものではなく、双方向的である。状況的で対話的な双方向的な過程が遂行される中で、心情が具体的、実感的になるだけではなく、見えもより適切なものをめざして変わっていくとしている²¹。

このことは、〈見え〉の先行方略により他者の身体感覚へ近付くことが、必然的に自己の〈見え〉との差異を身体感覚で実感することを含んでいることを意味する。かつ、そのことで明らかにするのは自己の〈見え〉（自らつくりだした意味空間）であり、その差異へと応じる新たな身体の在り様の生成である。

〈意味空間〉生成の営みにみられる子どもたちの在り様（他者を真似したり、様々な関係をつくりだしたり）は、活動をいきいきと楽しく満足しているという意味を含め、かつそれ以上の大きな意味をもつのである。子どもは、自らの身体（身体感覚）を他者のそれと相互に浸透し、作用し合いながら、関係や意味空間がズレることで、お互いの〈意味空間〉生成＝〈自己〉実現を明らかにしているのである。これは、自分の身体（〈自己〉）を根拠にした、相手の身体をはたらかせた行為の在り様（他者の〈意味空間〉、他者の〈自己〉）の共感、共振ということができよう。

つまり、〈自己〉実現は、一人一人の自らの身体を根拠にしているものの、常に他者との相互にかかわり合う相互関係の間に実現されていくというこの身体（心身の統合体）による実感（身体化）であるといえる。ここにおいて〈意味空間〉生成＝〈自己〉実現＝〈自己⇔他者〉ということが出来る（⇔印は、相互関係があることを意味する）。

以上、子どもたちの行為（〈意味空間〉生成）の成り立ちから明らかになったことは、身の周りの世界との相互関係のなかで、固定化することのない多様な意味空間を生成する「多面的存在リアリティ」としての〈自己〉を他者と協働的に実現させつつけている子どもの姿である。

おわりに

本稿は子どもの行為一つ一つを、子ども一人一人のかけがえのない〈生〉の行為としてとらえ、それを保障するため、子どもの行為の成り立ちを考察することを中心課題とした。

そこで明らかになったことは、子どもがつくりだす意味空間は、固定化することのない流動性を有し、同時に自らの意識の深層と表層とが相互に結びついた在り様である。ここにおいて〈意味空間〉生成＝〈表層的意識次元⇔深層的意識次元〉ということができる。

また、〈意味空間〉生成の在り様は、心身の統合体としての人間の根源的存在の在り様と深く結びついている。その限りにおいて子どもの行為が、その存在根拠そのものの立ち表われといえ、かけがえのない〈生〉の行為であるといえる。その在り様から〈意味空間〉生成＝〈自己〉実現ということが出来る。

このように実現される〈自己〉は、一人一人の自らの身体を根拠としているものの、常に他者との相互関係によって実現される在り様である。〈自己〉実現とは、その様につくりつづけられる在り様を身体（心身の統合体）によって実感（身体化）することである。この意味において〈意味空間〉生成＝〈自己〉実現＝〈自己⇔他者〉といえよう。

以上、このような〈意味空間〉生成の在り様は、造形行為を窓口にした社会との通路を開くとともに、他者理解、自己理解を、より根源的に、より柔軟に可能とするものである。

今回の考察によって明らかになったことは、子どもをより柔軟に現実に即して理解するための過程の一つに過ぎないであろう。子どもの事例も、様々な環境において無限に広がっている。ゆえに可能な限り素直に子どもの行為の場に臨み、自らの身体を共感・共振させる必要がある。そのことによって、はじめて、子ども一人一人の〈自己〉実現を保障でき、同時に大人である我々のそれも実現が可能となるであろう。したがって、今後より多く子どもたちの行為の実際に関与的にかかわり、学びつづける必要があるといえる。

謝 辞

本論文を書くにあたって、協力いただいた子どもたち、施設関係者やスタッフの方々、査読者へたいへんお世話になったことを感謝いたします。

1注および引用文献

- 1) 西野範夫, 「子どもたちがつくる学校と教育」第5回, 『美育文化』, 美育文化協会, pp.50~57参照。西野はここで、西洋近代主義の影響(過度の合理主義や効率主義、客観主義)によって作りだされた既存の基準や概念的枠組をいったん括弧に入れて、自らが他者やものなどと思いのままにかかわりながら、自らの可能性を実現した人間の在り様、または、実現しつつしていく在り様について、それを《私》としている。本稿では、そのような《私》に対応する人間の在り様を、〈 〉で表していく。
- また、西野は、造形行為を〈表現〉行為として、子どもたちが自分を生きる意味を学び、自己を実現していく行為であるとして、子どもたちのあらゆる行為(〈表現〉行為)を、〈生〉の行為としている。
- 2) 山田富秋, 好井裕明, 『排除と差別のエスノメソドロジー』, 新曜社, 1991, p.11参照。この事項に関して、II章で詳しくふれる。
- 3) 西野, 前掲「子どもたちがつくる学校と教育」, pp.50~53参照。
- 4) 鯨岡峻, 『関係発達論の構築』, ミネルヴァ書房, 1999, p.111参照。
- 5) 山田, 好井, 前掲『排除と差別のエスノメソドロジー』, pp.21~26参照。山田は、我々が普段かかわっている現実について、それはくいま—ここ>で人々によって“生きられている”推論形式であっても、実はある一定方向の意味を押し付けられ(「支配的文化」)、がんじがらめに身体が規格されている(「訓化された身体」)可能性があるとしている。
- 6) ハロルド・ガーフィンケル他, 山田富秋, 好井裕明, 山崎敬一編訳, 『エスノメソドロジー』, せりか書房, 1987, p.300参照。この事項に関して、II章で詳しくふれる。
- 7) 城塚登, 片山洋之介, 星野勉, 『現代哲学への招待』, 有斐閣選書, 1995, pp.48~55参照。生活世界とは、私そのものをすでにそこへ投げだして生活している世界のことであり、学問的な営みであれ、他者との対話であれ、一般に私たちの認識や行為のすべてを行う基盤としての世界のことである。
- 8) 西野, 前掲「子どもたちがつくる学校と教育」, pp.54~57参照。
- 9) 井筒俊彦, 『意味の深みへ』, 岩波書店, 1985, p.80参照。
- 10) 井筒俊彦, 『意識と本質』, 中央公論, 1992, p.178参照。
- 11) 井筒, 前掲『意味の深みへ』, p.81参照。
- 12) 同上, p.251参照。
- 13) 同上, pp.78~79参照。
- 14) 山田, 好井, 前掲『排除と差別のエスノメソドロジー』, p.5参照。
- 15) ハロルド・ガーフィンケル他, 前掲『エスノメソドロジー』, p.300参照。
- 16) 西阪仰, 『相互行為分析という視点』, 金子書房, p.197参照。
- 17) 井筒, 前掲『意味の深みへ』, pp.296~299参照。
- 18) 同上, pp.39~40参照。また、井筒は、p.40で「自己」と「自我」について、ユングの場合と同じく、その働きが日常的経験の地平を越えることのない「自我」(つまり本性的に単層構造であるエゴ)は、東洋哲学的「自己」という多層多重構造のごく一部、つまりその表層領域であるにすぎないとしている。
- 19) 宮崎清孝・上野直樹, 『認知科学選書1視点』, 東京大学出版, 1985, pp.73~75参照。
- 20) 同上, p.139参照。
- 21) 同上, p.173参照。

(資料1) 挿入

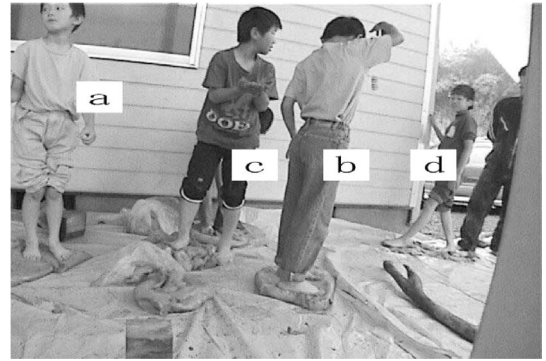
(資料2) 挿入





資料1. 『粘土とともだち』

活動日時 : 平成11年6月 場所 : 長野県
 対象 : 小学生(約60人)
 活動材料 : 粘土(約2トン)、流木、丸太(コブシ大)

【トランスクリプトの表記記号】

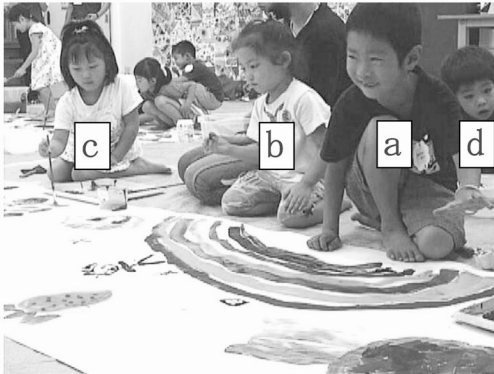
- ①重なり 複数の参加者の発する音声・行為の重なり箇所は、〔 〕で示す。
- ②聞き取り困難 困難な箇所は、()で示す。
- ③音声の伸ばし 直前の音が伸ばされている箇所は、(:)で示す。
- ④つながり 複数での音声・行為のやりとりの箇所は、末尾に(=)で示す。
- ⑤明らかな疑問 音声の箇所の末尾に(?)で示す。
 (記号参照 西阪仰, 『相互行為分析という視点』, 金子書房 参照。⑤の記号は、独自に追加。)



時間	番号	会話	相互行為	相互行為(映像)
(分)	01		aとbとdは、ブルーシートの上に粘土を敷き、その上で足踏みしたり、足元にある粘土に粘土を投げたりしている。	
17"	19	02 d ど: : : :ん ど: : : :ん	d : 粘土に上がったまま、足元にある丸太に手に持っている粘土を投げた後、足踏みを始める。	
	03	b や: : : : :	b : dと同じ粘土に上がっている。そして、dが粘土を投げた丸太に向かって、粘土を投げる。その後、dの前を横切って移動。中腰になりながら足元にある粘土を手に持ち、それを手前に投げる。	03 bd
17"	30	04 c さっきより粘土ドロドロ ほら =	c : 水に濡らしてやわらくなった粘土を両手で持ってbの近くまでやってくる。それをbに見せる仕草をする。 bは、それを見てから、後ろにいるdの方に体をむける。 dは、かがんでaの足の甲の上に粘土を乗せている。	
17"	33	05 b	b : 両手についている粘土で何かをしている。	
17"	37	06 d ど: : : :ん はがせっ	d : 粘土を持ち上げ立ち上がり、足元にある丸太に粘土を投げつける。そして、丸太に付いた粘土をはがしている。	04 bc
17"	40	07 b ね: : : : () くつついた	b : 粘土がついた両手をもみあわせている。手前にいるdに話しかけている様子。	
	08	b 手錠はめられた感じ =	b : dの方を見ながら、粘土がついた両手を突き出す。その後、自分の目の前に両手を持ってきて、もみ合わせている。	
	09	d あっそうだ 手に塗ろう	d : かがんだ姿勢で自分の手の甲の上に粘土を塗る。(乗せる)	
	10	b	b : 体を前の方に折り曲げて、足元にある粘土を持つ。	08 bd
	11	d ねえ 手に() って =	d : bに話しかけている様子。 bは、手に持っている粘土をそのままdの手の甲の上に乗せる。	
	12	b ど: : : :ん	b : dの手の甲の上に粘土を乗せつつける。	
17"	51	13 c ねえ 粘土水に濡らすと柔らかくなるよ =	c : 水に濡らして柔らかくなった粘土を両手に持ってbの隣まで来る。言い終わるとたん、足元にその粘土を投げつける。	12 bd
	14	b 柔らかっ	b : (dが自分の足元に投げた粘土について言ったと思われる。) bは、dの手の甲に粘土を乗せつつける。	
18"	08	15 b いいの?	b : dの手の甲の上に粘土を乗せるのを止める。その後、bは、体を前の方に曲げたまま足元にある粘土を触りつつける。 dは、両手に粘土を乗せたまま立ち上がり、それを足元にある丸太に投げける。	

資料2.『ゆめのくにをつくろう』

活動日時：平成19年9月 活動場所：富山県 対象：保育園児（約20人）
 活動材料：紙（90×250cm）5枚、筆、ハケ、スポンジローラー、水性絵具（赤、黄、緑、青、白、黒、ほか）



N、T…アシスタント H…保育士

時間(分)	番号	人物	会 話	相互行為	相互行為 (映像)
	01	a		aは、緑絵具でイチゴの葉を描き、黄色絵具が出ているパレットの隣へ移動。ローラーを手にする。	
26"00	02	a	手かこっかな：： =	aは、ローラを手にしたまま、黄色絵具が出ているパレットを見ながら、近付く。 aは、周りを見回したり、Nを見ながら話す。ローラーで手に絵具を塗る仕草をする。	
26"26		N	いいよ =	Nは、aの近くに移動する。	<p>【場面02】 c b a</p>
		a	何色でやろ：：： =	aは、自分の手のひらを見て、その後、自分の手を黄色い絵具が出ているパレットにつける。	
	03	T	手使ってもいいんだよ =	bは、Tの隣で、イチゴの絵を描いている。 a Nととのかかわりを受けてTは、aに問いかけ。Tは自分の平をaに見せて、紙に手形をつける仕草をする。 Tの問いかけに対して、うなづく。立ち上がり、紙をまたいでピンクのパレットがあるところへ移動。Tとともに移動。	
		a			
26"30	04	a		aは、右手に黄色絵具をつけて、Tに見せる。	<p>【場面06】 a</p>
		T	いえ：：：い	aは、紙をまたいで、自分が描いていたイチゴの近くに手形をつける。	
	05	b	() =	bは、ピンクの絵具が出ているパレットの近くで、Tに話しかける。	
		T	何色がいい？ =	Tは、bに問いかける。	
		b	ピンク	bは、ピンクの絵具が出ているパレットに手をつける。	
	06	a	だ：：：ん だ：：：ん だ：：：ん	aは、続けて黄色の手形を周囲に三箇所つける。	

時間(分)	番号	人物	会 話	相互行為	相互行為 (映像)
		c		c は、これまで同じ紙の a b から離れた場所で表現活動をしていた。c は、 a b が手形とつける様子を見ている。	
27 ⁿ 12	07	a a a N	黒だらけ：：：： おお：：っ	a は、黄色の絵具を、再度手のひらにつけるが、バケツ内の水で、手を洗う。 a は、緑の絵具が出ているパレットに移動。手に緑色をつける。 a は、N に黒色がついた手をみせる。自らが描いた虹の絵の上に、手形を三箇所つける。 N は、 a の手のひらを見て、驚くの声を出す。	 【場面07】 a
27 ⁿ 40	08	c		T は、 c を誘い、 c もピンクの絵具を手につけて、手形をつけ始める。	
28 ⁿ 20	09	b b		b は、ピンクの絵具がついた手をバケツ内の水で洗う。 b は、手に黄色の絵具をつけて、 a が描いたイチゴの絵の周りの a の手形の近くに、自分の手形をつける。	 【場面11】
28 ⁿ 50	10	a N	水 だろどろになった：：： = かえてくるね：：： 水	バケツの水を交換	 【場面12】 c
29 ⁿ 00	11	T b T b	() またやらんか？ 黄色？ピンク？ = 足やる？ 足やらんか？ 後で洗うねん。 足につける	T は、ピンクの手形をつけ終えた a に問いかける。 b は、 T に手を見せる。 T は、 b に足に絵具をつけることを提案する。	 【場面13】
29 ⁿ 20	12	c		c は、手に黄色い絵具をつけて、自分が描いた顔の絵の横に手形を押す。	
29 ⁿ 30	13	b T		b は、 T とかかわりながら、自分の右足の裏にピンク、左足の裏に水色の絵具をつける。	 【場面14】
	14	a	あははははは：：	a は、 b の足の裏に絵具がついていることを見て笑う。	 【場面15】 b a
29 ⁿ 50	16	N	おっ あしがたいった つぎ：：：	バケツの水を交換して戻ってきたNは、 b と T の様子を見ながら言う。	
30 ⁿ 15	17	b T N		紙の上を歩き終わった b の足を T と N で洗う。	
30 ⁿ 20	18	a a		a は、自らが描いた虹の輪の一番下に、黒絵具がついたスポンジ筆で線を描く。 b の様子や周りの様子も見たりする。 a は、手に黒い絵具をつけ、 T と N のところに行き、その手で、 T と N の腕を触る。	

"The structure of a deed of the child" and "the self realization"

Toru MURATA

Toyama College of Welfare Science

My center subject in this paper is about the meaning of the structure of the deed of the child. For that I was related to several of the deeds of a child. It that I was related concretely is the place of the art deed of a child. Next, I analyzed it about the action and human relations of a child. And I studied the self realization of the child on the basis of the analysis.

The work and event of the child are related to the consciousness structure of a lot of kinds deeply. And, in the place of the deed, the consciousness and body of the child were acting mutually. The state of this child is the state of the origin of a human being and can call with self realization.

The child caused consciousness and body acted mutually and was doing self realization. Simultaneously, always besides the self of the child is formed by the mutual relation with the person. The self realization is to feel realistically the actual with the consciousness and body of the self.

I think that my conclusion in this paper is one of such a process that understands the child better. Therefore, the grown-up needs to continue to learn, related to the place of the deeds of many children more. The by means and the grown-up will able to guarantee the self realization of the child. Even the self realization of the grown-up will become possible simultaneously.

学びのなかの〈ソーシャル・インクルージョン〉の成り立ち

富山福祉短期大学 北澤 晃

(受付2008年2月29日)

要旨

現在、学校教育において、「福祉」は「福祉教育」という学びの枠組の一つに過ぎない状況にある。しかし、子どもたちが、相互に〈生きること〉をつくり出している過程を、現象学的なアプローチによって、学びのなかの〈ソーシャル・インクルージョン〉の成り立ちとして捉え返すとき、〈生きること〉に関わる〈福祉〉は、他者に開かれた過程の学びとして立ち現れてくると言える。

このような相互に〈生きること〉が関わり合う可能性に開かれた場において、インクルーシブな学びの成り立ちを、教育臨床の事例分析によって明らかにする。

本稿で取り上げた実践事例は、インクルーシブ教育を意図して実践されたものではない。子ども同士の関わり合いを如何に深めるかという主題によって実践されたものである。しかし、その関わり合いという関係性のなかで生成する意味のつながりにこそ、インクルーシブな学びの成り立ちの要件があると言える。そして、その要件を保障する教育を基礎として、インクルーシブ教育を構想してこそ、制度的な側面からも、〈ソーシャル・インクルージョン〉の成り立ちの可能性が開かれると言ってよい。

キーワード ソーシャル・インクルージョン 相互行為

1 はじめに

これまで、個々の〈私〉¹⁾が他者との交流の世界を開く意味生成活動の在りようを、子どもの表現行為が成り立つような開かれた場の考察によって明らかにすることを一貫して目指してきた。

なぜならば、現在の教育の問題状況の源は、狭い枠組のなかに子どもたちを追い込み、固定化した「私」の世界に閉じ込めていくような教育や社会の在りようによって、子どもたちの豊かな関係性の感覚や能力を奪っていると考えからである。

そして、子どもたちの〈生きること〉が成り立つような開かれた活動の相互行為分析²⁾によって明らかになってきたことは、子どもたちは、自己

の身体性に委ねられた開かれた場においては、個々の表現世界を相互的に交流させながら、相互の関係性による差異、場の状況・状態による差異等の差異化によって開かれるあいだ(内的な)に新しい〈私〉(〈他者〉を包括した〈私〉)を立ち上げていく存在であるということである。³⁾ その事実を学びのなかの〈ソーシャル・インクルージョン〉の成り立ちとして捉え返していくことにする。

本稿では、便宜的ではあるが、子ども個々の存在の根拠に関わる事柄は、〈 〉のなかに入れ、それに対して、存在が他に統制されがちな事柄を「 」のなかに入れて表記していくことにする。

学校における〈ソーシャル・インクルージョン〉とは、学習への多様な参加を保障する過程であり、教育の効率性の追求や画一化による排斥を減少させることであると考えられる。日本における自立支援教育の場合、障害などによって特別なニーズがある子どもに如何に適切な教育の機会を保障するかという教育制度上の課題がある。しかし、現在の学校においてはインクルーシブ教育を進めるためにも、それを支える教育の在りようとして、子どもの学びの過程における〈ソーシャル・インクルージョン〉を課題とする必要がある。

本来、子どもはインクルーシブなよさや可能性をもっている存在であると言える。にもかかわらず、今日、例えば「学級崩壊」といわれるような状況があるのは、〈他者〉との相互作用、相互行為を〈生きること〉が絶たれ、抑圧された身体が、〈他者〉を強烈に求めていることによると考えられるのである。あるいは、「引きこもり」においても、実体化し、固定化した社会の閉塞感から、まるごとの〈私〉を守ろうとしている子どもたちが増加しているということも言えると考えられる。そして、これらの社会的な問題状況は、子どもたちの社会性の欠如として取り上げられることが多いが、「学校化」⁴⁾と言われる社会状況が、子どものインクルーシブな可能性を排除、抑圧していると言えるのである。

本稿は、「学校化」の状況を乗り越えて、子どもたちが、インクルーシブなよさや可能性を發揮している学びの過程を取り上げ、インクルーシブ

な教育の実現の途を、子どもの学びの過程にある〈ソーシャル・インクルージョン〉の成り立ちから明らかにすることが目的である。そして、その成り立ちの要件を保障しつつ、インクルーシブ教育の推進のかたちを本稿を端緒として、今後、探っていきたいと考える。

II インクルーシブなよさや可能性が発揮される子どもの〈社会〉

造形遊びの実践事例（題材名『ダンボールわくわくランド』〈小2年〉⁵⁾）における交流の世界の成り立ちとその意味について相互行為分析し考察することを通して、そのことが、いかにインクルーシブなよさや可能性を発揮した社会的行為の過程を成り立たせているかを明らかにする。

そのことによって、〈私〉の世界の成り立ちとその過程と、〈他者〉の世界の成り立ちとその過程との多様な相互作用、相互行為によって、意味生成する〈ソーシャル・インクルージョン〉の成り立ちとして捉える。つまり、その都度毎に子どもは、社会的行為による開かれた〈社会〉をつくり出し、互いの〈生きること〉が立ち上がる場を更新していることを明らかにする。

教師から材料や用具等について簡単な紹介がされた後、子どもたちは、一斉にダンボールを持ち出した。そして、持ち出したダンボールを置いた場所が、この時間の自分たちの活動の場となっていく。何ごとかを一人で始める子もいれば、数名の小グループをつかって取りかかる子もいる。各々の子どもの距離は適当にとられ、これから考察するその都度毎の行為とその関係をつくっていくことになる。

（表1）教師がダンボールカッターについて「ノコギリみたいにして使います」という紹介をしたこと、多くのダンボールが大きな板のようにたたんで置かれていたことなどとの関わりから、子どもたちは、そのダンボールに働きかける際に、ダンボールカッターを使う状況を自らつくり出していった。その際、ダンボールカッターを握る姿勢との関わりでダンボールの板は立てられることになる。つまり、ダンボールの板を立てるという行為は、ダンボールを切るという行為との関わりでつくり出されたということが出来る。

このようにして、ダンボールを立ててダンボールカッターで切る行為が立ち上がっているインクルーシブなエリアが生成されるのである。そのエリア内でダンボールを切っていたFさん、Gさん、Hさん（女子3名）は、思ったようにダンボール

表1

003	<p>H：「切るよ：」（ダンボールをしばってあるビニールテープをハサミで切る） F：ダンボールカッターでビニールテープを切ろうとする。 G：Fが切ろうとしたところをハサミでできる。 「ダンボールだわ、そんなの：」 F：「体育館えらい散らかってる」 F：「（ ）」 G：「ちっちゃすぎるよ」 F：「だいじょうぶ、だいじょうぶ」 F：ダンボールを敷いた状態で、ダンボールカッターをダンボールに当てて切ろうとする。 「切れないよこれ：」 G：「切れないよ：せんせ：」 T：「こんなふうにな、立てて使ってごらん」 ・他の子どもがやっているのを見てダンボールを立てる。</p>
-----	---



ダンボールを立てて切る

が切れずに、「切れないよ：せんせ：」と教師に呼びかける[003]。このとき、教師は、「こんなふうにな、立てて使ってごらん」[003]と助言している。この教師の助言は、すでに立ち上がっているダンボールを立てて切るという子どもの行為に後押しされているのである。

（表2）Gさんらは、他の子どもたちがやっているのを見てダンボールを立てたが、3人で一つのダンボールを手がけているために思うように切れず、「よれよれになってきちゃった」[005]と言う。それを見て、「こうやってやるんだぜ」と自分の切る行為を見せる子がいるが、Gさん、Fさんは、「知ってるよ」「そのやり方ちゃんとやっているんだけど」と答える [005]。

Gさんらが、「知っている」「ちゃんとやっている」というやり方は、Gさんらを含むエリアに包括された〈他者〉なのである。このとき、ダンボールはすでに、子どもたちにとって社会的にインクルーシブな対象となっているのであり、ここにダンボールに関わり合う子どもの〈社会〉、つ

表2 社会的対象としてのダンボール

005	F：「あ：（間）悲鳴をあげる」 F：「なんか、だんだんよれよれになってきた」 G：「よれよれになってきた」 F：「ね：せんせ：きれない、だんだんよれよれになってきちゃった」 G：「よれよれになってきちゃった」 S：「こうやってやるんだぜ：」 F：「知ってるよ」 G：「知ってるよ」 F：「そのやり方、ちゃんとやってるんだけどさ：」 H：「分かった、こうやってやればいいんだ」 ・3人で切り続ける。
-----	--

まり、〈ソーシャル・インクルージョン〉が生成しているということができるであろう。

このことに関わることとして、ミードは、次のように述べている。

社会的対象が個人にとって存在しうるのは、社会の他の成員によって遂行される、全体の社会的行為のさまざまな部分が、個人の行為のうち何らかの形で存在している場合のみである。さらにまた、自我が個人にとって存在するのは、個人が他者の役割を取得する場合だけということもまた真である。したがって、個人の行為のなかに、他者が行為するのと同じ行為傾向が存在することによって、個人の経験のなかに社会的対象、すなわち、多くの人びとの複合的反応に対応する対象が現れてくることになり、そして、自我もまた現れてくることになる。実際、社会的対象と自我の出現は相互に関連し合っているのである。⁶⁾

つまり、ここでは、ダンボールという社会的にインクルーシブな対象が現れることと、それにかかわる各々の〈私〉が現れることは相互的な関係にある。インクルーシブな学びの場が保障されることによって、社会性のある自己形成が可能なのだということができる。

更に、ミードは、次のようにも述べている。

人間個人は、自分自身に対する他者の態度を取得するかぎりにおいて、一個の自我となる。この態度が多くの他者の態度であるかぎり、また、共同活動において協同している多くの組織化された態度を取得できるかぎり、個人は自分自身に対する集団の

態度を取得する。⁷⁾

このようなことから、子どもたちは次々とダンボールを切って開くという活動をつくり続けたのである。そして、そこには、〈私〉と〈他者〉が相互行為することによって生成するインクルーシブなあいだとしての〈社会〉が立ち現れているということができるのである。

III インクルーシブな〈社会〉のなかの〈私〉 (1) 相互に包括する態度の取得と社会的な〈私〉

Aさんが相談しながら行為をつくっているグループは、Cさん、Dさん、Eさん（いずれも男子）の4人組であった。彼らは、ダンボールを立てて、切って、開くという行為をつくり続けていたが、その身体的行為性によってインクルーシブな意味を立ち上げていく発話が出てくる。

（表3）Aさんが、「何つくるの？」[010]と聞くと、Eさんは「家」、Dさんは「巨大基地」と答

表3

010	A：「何つくるの？」 E：「家」 A：「じゃ：おれも手伝ってあげる」 D：「巨大基地」 A：「え、巨大基地？はい、でかい」 A：「これでどうすんの？」 A：「じゃ、これどうする？」 C：「家の形に切る」 A：「どのくらいに切る？おおきく？」 C：「屋根とかの形に切りとる」 E：「屋根？」 A：「屋根、分かった屋根ね」 C：「屋根つけなくてもいいか：ドアとかつけられればいいか」 A：「ドアつけんの？それじゃ：おれ、ドアつくる」 C：「人が入れるようなドアつくって」 A：「は：じゃ：これ（ダンボール）全部で大丈夫じゃん」
-----	--



何つくるの？

表4

えている。そして、それらのイメージの意味に関わるような行為を、Aさんは、友だちと相談しながら、立ち上げていく。その際、Cさんが「人が入れるようなドアつくって」[010]と言うことも関わって、更に大きなダンボールを集め、切り開いて、つなぎ合わせていく行為へと展開していく。

Aさんの「何つくるの?」という発話は、ダンボールという社会的な対象に関わって、互いの行為性を包括することを意味する。

更に、＜ソーシャル・インクルージョン＞のリリースとして立ち現れているダンボールによって、個々の身体的行為性は、社会的な意味を持ち、インクルーシブなく私＞を立ち上げ可能なく社会＞をつくり出していると言える。

このようにして、Aさんは、Cさんの身体的行為性に関わる思いを聞き取りながら、Cさん(他者)のダンボールに対する態度を包括し、それに協同している友だちとの関わり合いのなかで、＜ソーシャル・インクルージョン＞を組織化しているのである。

そして、ダンボールを切り開くという行為と、切り開いたダンボールをガムテープでつなぎ合わせる行為が、新たな社会的な対象としてのダンボールに対して相互に包括する態度として取得されながら、つなぎ合わされた巨大なダンボールの板は扉のように立てられることになっていく。

(2) ＜私＞を包括する社会的なく私＞

(表4) Aさんらは、ダンボールをつなぎ合わせた大きな一枚の板を扉のように立てようとするが、そのままでは立たない。Aさんは、「だから、このへんに、重りとか」と言うと、Eさんは、「木」と言い、そのやりとりによって、二人で材料の場にあった流木を取りに駆け出す[043]。Aさんは、集めてきた流木を一旦床に置き、「支えるもの」[044]と言って、立てようとしているダンボールの脇に、ダンボールの箱をあてがうようにして置く。そして、「はい、こんなか(箱)、重り付けなくちゃだめじゃん」[044]と言うが、自分の考えを友だちと共有する(友だちの友だちになる)過程を踏むように、「こんなかの重り何にする?木とか、木、木」[044]と言いながら、自分で木を拾ってダンボールの箱に詰める。

大きなダンボールを扉のように立てるといふ社会的行為は、自己の存在の根拠を関わらせた＜私＞を立ち上げるとともに、その自己を包括する社会的なく私＞になるという重層的な自己の内的な運動をつくり出している。

つまり、「はい、こんなか(箱)、重り付けなくちゃ

042	D: 「中、空洞だし」ノコギリで切った木の棒を持って材料の場に出ていき、近くにいる友だちに空洞になっている木を見せて回る。担任教師にも見せる。
043	A: C: E: つなぎ合わせたダンボールを立てようとする。 A: 「だからこのへんに、重りとか」 E: 「木」 A: 「じゃ: 持ってくる」 A: E: 材料の場に駆け出す。 E: 放すと倒れるのでダンボールを押さえている。 T: 「長いじゃん、これ:」
044	E: 「ガムテープ、Dちゃん貸して: その」 E: Dからガムテープを受け取りしゃがみ込む。壁のように立てたダンボールは倒れる。 D: ノコギリを返す。 A: 「支えるもの」(箱になっているダンボールを立てたダンボールの脇にあてがう)「支える」 C: Aと同じように箱のダンボールをあてがう。 ・立てたダンボールが真ん中で切れて、半分が倒れてしまう。 A: 「はい、こんなか(箱)、重り付けなくちゃだめじゃん」 E: ガムテープを切って、分かれてしまった継ぎ目を留めようとする。 A: 「こんなかの重り何にする?木とか、木、木」(木を拾って箱の中に入れる) A: 「あ: だめだ:」(更に木を集めて箱に入れる) A: 箱を持ち上げると、底が開いて木が出てしまう。



ダンボールを立てる

だめじゃん」というAさんの発話は、ダンボールを立てようとする際の＜私＞の立ち現れであり、その直後の「こんなかの重り何にする?」の発話は、その＜私＞を包括して、新しい＜私＞を立ち上げ可能にする契機となっているのである。

このことに関わることとして、ミードは次のように述べている。

他者に意識的に対峙する (stands over)

自我は、したがって、自分が話すことを自分で聞き、自分がそれに対して答えるという事実、まさにこの事実によって、自分自身にとってひとつの対象、ひとりの他者になる。それ故、内省のメカニズムは、人が自分に対して必然的にとる社会的態度の内に存することになる。そして、思考のメカニズムは、思考が社会的相互作用において用いられるシンボルを用いるかぎり、内的会話 (inner conversation) にほかならないものとなる。⁸⁾

このようなことから、Aさんは、「こんななかの重り何にする？」と友だちと自分自身に問い、「木とか、木、木」と自分で自分に答え、自分で、ダンボールの箱に木を詰めたのである。

この〈私〉の社会的な身体的行為性に関わって、もうひとりの〈私〉と会話できる〈私〉は、社会的なく私〉として立ち上がっているのである。ここで〈私〉の二重化というずれは、〈他者〉を取得しうるあいだ (内的な) を開きながら、社会的なく私〉として、友だちの〈他者〉になることを可能にしていくのである。それこそが、〈ソーシャル・インクルージョン〉の現象学的な意味での成り立ちである。

更に、このような関わり方は、自分から友だちへの一方的な働きかけではなく、相互的な関わり合いを成り立たせている。「はい、こんなか(箱)、重りつけなくちゃだめじゃん」という言い方が、直後に「こんななかの重り何にする？木とか、木、木」という言い方に変わる契機において、〈私〉は〈私〉と会話しながら、友だちに働きかけ、友だちを〈他者〉として〈私〉の内に包括するのである。

(3) 子どもの〈ソーシャル・インクルージョン〉

Aさんらは、大きなダンボールの板を塀のように立てるといった社会的な活動において自分のよさや可能性を発揮していくが、それは、社会的対象であるダンボールとの関わりの中なかで、インクルーシブな可能性を実現している社会化の過程なのである。

(表5) Aさん、Eさんは、自分たちの社会的な活動のエリア近くまで活動を広げてきた他のグループの様子をじっと見ている [055]。そこで活動しているグループは、ダンボールを箱のまま、積んだり並べたりしていた。そして、Aさんが、「あ：：立たないな：」と言うと、Eさんは、「やっぱり、この基地やめる？」と言い、Aさんらの活

動は別の可能性を目指して、新しく展開していくことになる。

ここで、Aさんらは、つなぎ合わせたダンボールを自分たちの社会的対象としているために、そのことによって塀のように立てるといった社会的な意味をつくり出し、その意味の囲いに包括される〈私〉になっているのである。それは、社会的コントロールを受けていることになるが、ダンボールを社会的対象として別の可能性を目指して立ち現れている〈社会〉と関わることによって、やや惰性化した社会的コントロールは解かれ、更にインクルーシブなく社会〉の構築に向けて展開していくのである。

Aさんら4人グループは、二人ずつ組になって分かれ、Aさんは、Dさんと二人で、Bさんの近くに引っ越した。そして、Aさん、Dさんに、Bさん、Iさん (すべて男子) が関わり合って、更にインクルーシブなく社会〉をつくっていくことになる。

(表6) Aさんは、新しい場所で自分を囲うように立てたダンボールを床に立つように固定していく。その際、ダンボールの板が折れて床に面している部分で立つように工夫している [065]。

そして、Iさん、Dさんが手を加えたダンボールが、様々な意味を持ってつながれていく。例えば、Dさんが窓のようにくり抜いたダンボールを持ち込むが、屋根になったり、シートベルトになったりする [067]。これらは、社会的対象としてのダンボールとの関わり方において、何ごとか

表5

055	A：「あ：：立たないな：」 E：「やっぱり、この基地やめる？」 A、E：近くで箱を積んだ活動をする友だちの様子を見る。 E：「じゃ：止める？」 A：「やめるか：」
-----	---



立たないダンボール

表6

065	A：ダンボールの折れて床に当たっている部分同士を合わせて貼る。 A：「これで大丈夫」 I：「大丈夫、Aちゃん」
067	I：別のダンボールを切り始める。 I：「Aちゃん、これさ：できたら壊しちゃうの：：」 A：「知らね：」 D：「穴ぼこ空いたよ：上から見る：」手伝っていたTが持っている。 A：「なんか：たぶん、ちっちゃいと思う」 I：「これも屋根にするか：」 A：「屋根にする」 T：Dが切りにいたダンボールをAの頭の上に被せる。
068	D：Aが横に移動すると替わるにダンボールの下に入る。「シートベルトだ」 A：「チャイルドシートだ」 D：「チャイルドシート」「チャイルドシートになっちゃってない？これ：」 A：ガムテープでチャイルドシートの切れているところを留める。



ダンボールの囲い

表7

070	D：「（ ）」 A：「こんなかに入った方が（ ）」 D：「つなげる？B君もつなげるといいよ」 B：「だって、どこ穴あけるの？」 D：「いいよ、穴なんかあけなくても」 D：B：二人でBのダンボールを囲いの中に運び入れる。 B：「飛行機になるかな、マジで」 D：「飛行機」 D：「うわっ、基地だ」 D：「よし、ほく、ちっちゃいの集めて飛行機つくるか」 B：「できるできる、ほら、Aちゃん、これ」 囲いの中に入れた自分のダンボールの上に座る。
071	A：「屋根（間）だめだ、これは、どうすればいいんだ」 D：ダンボールの箱を持ってもどってくる。 B：「Dちゃん、すごいよ。びよ：ん、びよ：ん、びよ：ん」（飛行機を運転してみせる）「飛行機というより、バイクになった、バイクになった」



「できるできる」

の意味において包括し合っていくという身体の行為性(態度)が共有されていることの表れと言え、そのことによって、＜ソーシャル・インクルージョン＞の過程が更新していくことになるのである。

(表7) Bさんは、Aさんらが、新しい活動の場として隣りにやって来る前から、一つのダンボール箱と関わり合って、自分のよさや可能性を実現していく過程を楽しんでいた。そして、「つなげる？B君もつなげるといいよ」[070]と言うDさんの働きかけで、Aさんらの囲いの中に自分のダンボール箱を持って入ることになる。そして、囲いの中に入れると、そのダンボールの上に腰掛けて「できるできる、ほら、Aちゃん、これ」[070]と言う。

このことは、何ごとかの＜意味＞において包括し合う身体の行為性(態度)によって成り立つ

社会＞の立ち現れということが出来る。

Bさんが、「できる」と言っていることの可能性は、Aさんらにとっての基地であり、Bさんにとっての飛行機であり、その＜意味＞がずれてバイクであるという多義性によって包括可能なく社会＞が実現されているのである。

このように、個々の＜私＞が、自分のよさや可能性を發揮し、その互いの可能性の包括を実現していく過程の関わり合いにおいては、＜他者＞の包括によって社会的な＜私＞が立ち上がり、そこに子どもの＜ソーシャル・インクルージョン＞の成り立ちを見ることが出来る。

このようにして、社会的対象であるダンボールとの関わり合いは、インクルーシブなこと性として＜わたしたちの基地＞となり、子どもたちが自らつくり出した子ども個々の＜生きること＞の成り立ちは、その味わいを共有できる喜びにあふれ

たく社会〉として更新し続けていくのである。

(表8)子どもたちは、その社会的な空間に教師を招き入れて [077]、次々に立ち上げたインクルーシブなく意味〉を、それぞれに伝えている。基地のなかのテレビ画面では、Aさんに代わってなかに入ったIさんが、「こんにちは、お昼のニュースです。今日は、ところにより、飛行機が降ってくるでしょう」[078]と言う。それに対して、教師は、「え：：」というが、飛行機の〈意味〉をつくり出したBさんは、「びゅーん、びゅーん、バンバンバン」[079]と飛行機が落ちる〈意味〉を立ち上げることで答えている。

このようにして、子どもたちは、教師も共に生きられるように、つくり出された〈意味〉のインクルーシブなこと性を伝えてくれるのである。

今日の教育の問題状況は、これまでに述べてきたような子どものインクルーシブな行為のよさや可能性を、大人の閉じられた「社会」の論理によって統制してしまっていることにある。

つまり、あらゆることが、モノ化してしまった大人社会は、実体化したモノによって社会的コントロールを被る「社会」であり、そのようなモノが社会的対象となる「社会」においては、あらゆるモノが隔絶し、〈他者〉を包括する相互作用・相互行為は成り立たない状況となってしまう。そこで取得する他者とは、表層的で固定的な「他者」であり、それを取得し続ける社会化とは、〈私〉の存在の根拠を隔絶していく過程であり、〈私〉を画一的で透明な存在にしていく過程であるということができよう。そして、このような意味での「他者」を取得することを余儀なくしているのが、「学校化」の現状なのである。

このようなことと関わって、ミードは次のように述べている。

重要な問題は、さまざまな形態の活動が人間社会の成員に自然に属し、他者の役割を取得する際、他者の活動が自分自身の性質に属しているのかどうかということである。人間社会の複雑さが中枢神経系の複雑さを越えないかぎり、どのような社会的対象が適切であるのかという問題は、どのような自己意識が適切であるのかという問題と同じく、社会的行為にかかわる無数の行為を知るといような問題ではない。それは、空間と時間における距離、そして、言語や習慣、または社会的地位の壁を越えて、共同の生活活動をともにする他者の役

表 8

076	D：「飛行機、ぶ：は：ん」ダンボールの箱に翼を付けた飛行機をつくって持ってくる。 A：「チャイルドシートとりま：す」 A：「こっから出られなくなっちゃった：：」 A：「はろ：べり：ぐー」 D：飛行機にビニールテープの飾りを付ける。 A：「テレビ中継です」 B：「ここにもテレビ中継できる」 A：「今日、夕方から曇りでしよう」 S：「ね：ね：先生、もう1時間終わった：：」
077	B：「1時間目終わりました。今、1時間目の休み時間に突入します。あと、6分で2時間目の休み時間、キンコンカンコン、終わった」テレビ中継をする。 A：「ここでも、テレビ中継やれるんだよ：」 T：囲いの中に入って、テレビの前に座り、チャンネルを回す。
078	I：Aに替わってテレビの中に入る。 D：飛行機を持って囲いの中に入る。 I：「こんにちは、お昼のニュースです。今日は、ところにより、飛行機が降ってくるでしょう」
079	T：「え：：」 B：「びゅ：ん、びゅ：ん、バ：ンバンバン」 T：「怪しんでるようだから、チャンネルかえてみようかな、カチャカチャカチャ」 T：「チャンネルかわんないぞ」 I：「かわってる、かわられるの：」 T：「かわてるの：：画面いっしょなんだもん」 D：Iに替わってテレビに入る。「テレビつけてくれ：」 A：「これ、守り神なん」Bの飛行機を大砲にする。



ともに生きられる基地

割において、自分自身と会話ができるかどうかという問題である。⁹⁾

これまで考察してきた実践事例における子どもの意味生成活動の在りようからも明らかのように、子どもたちは、材料と関わり合いながら、共に関わり合う友だちの身体の行為性を〈他者〉として包括し、共に生きられる社会をつくり続けていくのである。

そのとき、＜私＞は、自分自身と会話ができるインクルーシブなく私＞として立ち上がっているのである。

V おわりに

私たち大人は、子どもたちが将来を生きること考えるとき、現在の実体的な意味での社会に適應できるように子どもを社会化しなければならないと考えている。そのようなことから、私たちは、疑いもなく、教科の基礎・基本の確実な定着、道徳性の育成などの実体的な社会の断片を社会的な対象として、子どもを社会的にコントロールし、画一的な「他者」を子どもたちに取得させることを正当化しているのである。

さらに、恐ろしいことに、その効率化・徹底化を図るための手だての研究がなされ、子どもたちは、透明な存在へと漂白され続けている状況にあると言わざるをえない。

しかし、本稿での実践事例の考察からも明らかのように、子どもたちは、友だちと共に関わり合える社会的な対象をつくり出し、＜私＞の存在の根拠を関わらせた＜他者＞を相互に包括し、社会的なく私＞となりながら、共に生きられる＜ソーシャル・インクルージョン＞をつくり続けていく存在なのである。

したがって、私たち大人は、子どもがつくり続ける＜ソーシャル・インクルージョン＞に共に生きながら、子どもが関わることで成り立つ社会的な対象の過程の＜意味＞に包括され、共感的に関わられるようにすることが大切なのである。

そのことによって、大人社会の敷き写しでない、子どもがつくり出す新しい＜社会＞を更新し続け、そこに開かれる未来に踏み込んでいくことができるのである。

そのような視点が、現在の教育の場では欠落しており、それは、そのまま、インクルーシブなく私＞であることのよさや可能性を排除しているということになるのである。

引用・注記

- 1) 西野範夫, 「第32回 状況を生きる子どもと造形遊び」『美育文化』, 1999等による。
＜ ＞は交換不可能な一般化できないものを表す。それに対して「 」は交換可能な一般化されたものを表す。
- 2) 西阪仰, 『相互行為分析という視点』, 金子書房, 1997, p.37

- 3) 北澤晃, 『造形遊びの相互行為分析 他者との交流の世界を開く意味生成カウンセリング』, セセラギ出版, 2007, p.34
- 4) 山本哲士, 『学校の幻想 教育の幻想』, ちくま学芸文庫, 1996, pp.264-265.
- 5) 北澤晃, 前掲書, pp.65-79.
- 6) G.H.ミード, 船津衛・徳川直人編訳『社会的自我』, 恒星社厚生閣, 1991, p.58
- 7) 同上, p.69
- 8) 同上, p.8
- 9) 同上, p.72

参考文献

- ベント・G・エリクソン, 二文字理明, 石橋正浩, 『ソーシャル・インクルージョンへの挑戦』, 明石書店, 2007
- 茂木俊彦, 『障害児教育を考える』, 岩波新書, 2007

A Study of "Social Inclusion" that is in the Process of Learning

KITAZAWA, Akira

Toyama college of Welfare Science

The process that the children learn by the interaction is important. I study the social inclusion that is in the process by the approach of phenomenology.

The practice case that I take up with this study is not that was practiced and was plan inclusive education. The teacher practiced by the subject how the interaction between the child is deepened.

The meaning produces by the interaction. Therefore, I think that the production of the event of the meaning becomes an important matter to learn inclusively. And, we need to be materializing inclusive education, by guaranteeing the important matter.

By the realization, we may be said that we can open the possibility of social inclusion even from a society institutional aspect.

Key words the social inclusion the interaction

現代社会におけるいじめの構図(1) —「大河内清輝君いじめ自殺事件」の考察を通して—

富山福祉短期大学 末光 正和

(受付2008年3月3日)

キーワード: いじめ問題、自殺、人間関係、家族関係、現代社会

要旨:

本論文では、1994年に起きた「大河内清輝君いじめ自殺事件」の考察を通して、「現代社会におけるいじめの構図」を明らかにしようとした。第1に、「大河内清輝君いじめ自殺事件の概要」「加害者グループの構造」「学校におけるいじめの認識」を整理し、この問題の全体像を把握した。第2に、「大河内清輝君の遺書」の考察を行なった。大河内君はいじめの事実を家族にも教師にも語っていない。いじめの事実が遺書の発見によって初めて明らかになったのである。そのような経緯から、大河内君のいじめ問題の本質に接近する上で、遺書の内容は重要であると考えた。したがって、抜粋ではなく全文を考察の対象にした。第3に、「大河内清輝君いじめ自殺事件」の構図を通して、現代社会におけるいじめの要素を明らかにした。

はじめに

私は、1990年代後半から2000年代前半にかけて、「子ども問題の複雑・深刻化」が顕著になったのではないかと考えている。長崎の小学生が人間関係のもつれからクラスメートを殺害するといった事件などはその典型であろう。小学生が喧嘩しても、刃物で殺害するといった状況は私にとって想定外のできごとであった。このような子ども問題が複雑・深刻化するといった問題と「子ども問題の全体像」の理解が困難になるという状況が連動するのは、必然ではないかと考える。

今回、私は「現代社会におけるいじめの構図」というテーマを設定した。これには、いじめ問題の複雑性を理解するという意図がある。その複雑性を生み出す構成要素の集合体を「構図」と表現した。

具体的には、1994年に起こった「大河内清輝君いじめ自殺事件」の検証を通して、「現代社会におけるいじめの構図」を明らかにしたいと考える。この事件を選定したのは、1)子ども問題が複雑・深刻化してきた時期と重なること、2)いじめと

いう行為によって自らの命を絶ったこと、3)大河内君の膨大な遺書が残されていること、などが理由である。

最後に、現代社会におけるいじめの構図(1)とした理由について述べたいと思う。矛盾した言い方であるが、本論文だけで、いじめの構図を完全に解明することは不可能であると考えている。しかし、今回のような営みを重ねることによって可能な限りいじめの構図に接近したいという意味を込めて、現代社会におけるいじめの構図(1)とした。

第1章 大河内清輝君に対するいじめの経緯と内実

第1節 「大河内清輝君いじめ自殺事件」の概要

1994年11月27日深夜、愛知県西尾市の市立東部中学校2年生の大河内清輝君(当時13歳)が自宅裏庭のカキの木にロープをかけ首吊り自殺。姿の見えなくなった息子を探していた母親(当時44歳)が発見した。死後、大河内君の遺書が発見され、自殺の原因が「いじめ」によるものであることが明らかになった。

いじめの主犯格は4人(大河内君と同じ剣道部に所属)で小学6年からいじめが始まった。同級生の3人が決闘して「大河内君が一番弱かった」というのがきっかけであった。中学1年になっていじめが本格化し、2年生になるとさらにエスカレートした。大河内君は4人から、しばしばお金を取られていたらしく、休みの前には多いときには6万円、少ないときでも3万円要求され、それに応じないと殴られたり、蹴られたり、暴力を受けていた。

母親あてに書いたと思われる紙には「証明書」とし、8月31日付で100万円以上の金額が書かれており、脅し取られた総額は100万円以上とみられる。さらに、4人は近くの川に大河内君を突き落とし、大河内君が逃げようとする足をつかんで、川の中に再び引き込むといった暴行を行っていた。

父親の話では、大河内君の様子がおかしくなったのは「夏休み前後」からである。乗っていた自転車のタイヤやチェーンが切られていたり、夜遅

くに泥だらけになって帰ってきたりするようになり、家族の財布の中のお金が無くなることもたびたびあった。不審に思った父親は「いじめられて、お金を脅し取られたのでは」と問い詰めたが、大河内君は「転んだだけ。お金は自分で使った」などと言い張ったという。大河内君が亡くなる前日には、無くなった金額が多かったため、父親はいつもより厳しく問い詰めたばかりであった。

大河内君の自殺後、父親は「親が信用しなければいけない、と思っていた。何かあったらお父さんに言え、と最近では1日おきに言っていたが、一言もなかった。可哀そうなことをした。後悔の念でいっぱいです」と語っている(1)。

大河内君にはいじめの対象にされるような「特別な理由」を存在しない(例えば、障害があるとか最近みられる「うざい」「きもい」といったレッテルを貼られるような要素も見られない)。「決闘して一番弱かった」というのも、いじめる動機としては強いものとは思えない。強いて言うならば、大河内君を取り巻く「人間関係の歪み」が、大河内君をいじめの対象にしたと思われる。その「いじめる側」-「いじめられる側」(大河内君)という関係性が時間の経過とともに固定化したのではないかと考えられる。川に突き落とされるという行為は、大河内君にとって「生命の危険」を感じるものである。この「恐怖感」も上記の関係性を固定化させる上で重要な要素であったと思われる。脅し取られた金額が100万円以上である事実からも、このいじめの関係性が強固なものだったことが理解できるだろう。

父親の話によれば、大河内君の異変に気づいたのは中学2年の夏休み前後である。つまり、父親は「小学6年」「中学1年」「中学2年の1学期」の段階においては、大河内君の異変には気づいていない、もしくは、重大視していなかったことになる。中学2年の夏頃、大河内君に「いじめの有無」について尋ねているが、本人は否定している。何故、大河内君が真実を話さなかったという点については複雑な要素によるものと考えられるので後述したいと考える。しかし、父親の「何かあったらお父さんに言え、と最近では1日おきに言っていたが、一言もなかった。」という発言からも理解できるように、大河内君に対して無関心だったとは考えにくい。逆に、息子を救えるものなら救ってやりたいという「親としての感情」が伺える。

母親あてに書いたと思われる紙には「証明書」とし、8月31日付で100万円以上の金額が書かれている。わざわざ「証明書」に金額を記載した理

由として、結果的に高額のお金を家から持ち出したことに対する「罪悪感」と「謝罪の念」を感じ取ることができる。

第2節 加害者グループの構造

大河内君からお金を取っていた「いじめグループ」は、遺書に示された4人だけではなく。その4人というのはリーダー格であり、実際はリーダー格の4人を中心に二重、三重の「序列関係」が存在していた。大河内君に対する連絡役や金を脅し取る役まで決まっていたのである。

学校関係者の報告によると、グループは計11人。大河内君は、このグループに呼び出されては、暴行を受けたり、要求された金を渡したりしていた。リーダー格の少年は、グループ内の力関係から仲間に「社長」と呼ばれ、一目置かれる存在だった。何故、この少年が「社長」と呼ばれる程の力を有しており、「一目置かれる存在」として位置づけられていたかは現段階においては分からない(しかし、今後その点について詳細に調べる必要性はあると考える)。また、リーダーの下にグループ内で「発言力」のある3人がいて、このうち一人が主に金を脅し取る役だった。大河内君はいじめを強く受けた相手として、遺書の中で、「社長」と呼ばれていたリーダー、そして、「発言力」のある3人を遺書に記していた。

グループ内の関係は、例えばリーダーが「ジュースが飲みたい」と言うと、3人が「おれも、おれも」と同調。さらに、残りの7人も同調し、最終的に大河内君が「使い走り」をさせられる図式になっていたらしい。7人の中には、中心の4人の指示で大河内君を呼びに行く役目の少年がおり、大河内君がいないときには代わりに4人からいじめのターゲットにされたこともあったという(2)。

7人の中には、中心の4人の指示で「大河内君を呼びに行く役目」がおり、大河内君がいないときには、代わりに4人からいじめのターゲットにされていた。この事実から、「いじめの対象=大河内君」と単純認識することは危険ではないだろうか。つまり、主犯格にとって自分達の欲求を満たすことが重要であり、「大河内君でなければならない」という認識は薄かったと思われるからである。7人のいじめグループを序列化し、7人の順位が成立している。仮に大河内君がいなければ、7番目の人物がいじめの対象になり、7番目の人物がいなければ6番目の人物がいじめの対象になるといったシステムで、いじめのターゲットが成立し

ていくことになる。

このように解釈すれば、いじめの主犯格は大河内君にこだわったのではなく、「自分達の欲求を満たすことができる人物」にこだわったのではないだろうか。つまり、大河内君は自分達の欲求を満たすための「最適な手段」として選ばれたのであり、結果として「いじめの対象=大河内君」という図式が形成されたと解釈するほうが妥当ではないかと考える。そして、残りの7人は「第2の大河内君」になる「恐怖感」もしくは「自分を守るための手段」として、大河内君へのいじめに加担したとは考えられないだろうか。

第3節 学校におけるいじめの認識

いじめの多くは学校内で行なわれる。つまり、学校はいじめの状況を把握しやすい空間であると考えられる。そのような理由から大河内君および大河内君を取り巻く状況を「学校がどのような認識をしていたか」といった問題は非常に重要であると考えられる。

東部中学校の間宮衛校長は、12月8日午後遺族から求められた大河内君の行動などについての調査結果の一部を公表した。学校は「大河内君が自殺し遺書の内容が明らかになるまで『いじめ』とは認識しておらず、むしろ大河内君を『問題グループの一員』と捉えていた」ようである。

以下、東部中学校が行なった調査結果(担任や生徒指導主事が大河内君の行動に関して記録したもの)を抜粋であるがみていくことにする(点線-出来事、矢印-学校の対応)。

- ・ 4月8日…大河内君が同級生に指示され、別の同級生を殴った。
→大河内君と両親に指導。殴った同級生への謝罪を勧めた。
- ・ 5月16日…
→担任教師が家庭訪問。「問題の多い子たちと一緒にいることが多い」と伝えた。
- ・ 6月30日…大河内君が給食時に、同級生の女子に悪口を言ったり、授業中にふざけた態度を取った。
→担任教師が「命令されたのか」と尋ねたが、大河内君は否定。母親に電話で事情を連絡。
- ・ 7月19日…大河内君がいじめグループらと

夜、神社で喫煙したり花火をしていたことが発覚。

→グループの保護者を呼び、学年主任が事実を説明、今後の指導を要請。

- ・ 9月15日…大河内君らの喫煙が再び発覚。
(実際には2回とも大河内君は喫煙せず)
→担任教師が大河内君らから事情を聴き、指導。学年会で大河内君の様子について話し合う。
- ・ 9月16日…大河内君が保健室に来たが、養護教諭に要件をうまく伝えられなかった。視線が落ち着かず、体の動きが止まらないなど様子がおかしかった。
→養護教諭が9月17日、大河内君に「心理テスト」を実施。「安定して素直な状態」と判断したが、後日カウンセリングを受けるよう家族に勧めた。
- ・ 9月21日…大河内君が体育館で下着姿のまま走っているのを養護教諭が発見。
→養護教諭が口頭で注意。
- ・ 9月22日…グループの数人が刈谷署に保護される。盗難自転車に乗っていたが、大河内君が8月下旬に盗んだものと主張。
→
- ・ 9月24日…大河内君の父親が学校に「清輝の自転車が8月ごろ、壊れた。いじめにあっていてのではないかと調査を依頼。
→「誰かにやられたか」と尋ねたが、大河内君は「自分で転んだ」と主張。
- ・ 10月4日…大河内君がけがの手当てを受けに保健室に来た際、左ほおにあざがあった。
→養護教諭があざの理由を尋ねると、大河内君は「走って防火扉にぶつかった」と答えた。

- ・10月7日…
→大河内君の言動に落ち着きがないことなどから担任教師が親類を通じて大河内君にカウンセリングを受けるように勧める。
- ・10月12日…
→大河内君の家族は「家庭で話し合う」と断る。
- ・10月22日…体育館で大河内君がグループとプロレスごっこをしていた。
→あまりにも激しいので、担任教師がやめさせた。(3)

以上のような経緯を見る限り、大河内君がいじめを受けている可能性が無かったわけではない。そして、学校は、基本的には「大河内君＝問題児」ということを前提とした対応を行っていたように思える。そのため、「いじめの要素」が存在していてもその可能性に関して深く追求するのではなく、それを問題行動に結びつけたのではないだろうか。その結果、学校は、大河内君の遺書の内容が明らかになるまで「いじめの存在」を認識できなかったのである。

そのような事態を招いた要因として、大河内君に対する「先入観」「ラベリング」といった要素が関係しているのではないだろうか。「問題グループに所属している問題児」という「先入観」「ラベリング」が強ければ、そのフィルターを通して大河内君の行動を理解しようとする。結果として、大河内君に対する見方は「固定的」になり、大河内君の異変を軽視するといった状況が生まれたのではないかと考える。

第2章 「大河内清輝君の遺書」の再考

1994年12月1日、大河内君の葬儀の日に発見された遺書はB5版の用紙4枚に鉛筆でびっしり書かれており、引き出しのなかに目立たない状態で置かれていた。そこには母親宛の「約110万円」の借用書も残されていた。

「遺書」と書かれたもの以外に「家族のみんなへ」という遺書に類似する文書も残されているが、今回は前者の全文のみをみてもらうことにする。

《大河内清輝君の遺書》

「いつも4人の人(名前が出せなくてすみません。)

にお金をとられていました。そして、今日、もっていくお金がどうしてもみつからなかったし、これから生きていても……。だから……。また、みんなといっしょに幸せに、くらしたいです。しくしく 小学校6年生ぐらいからすこしだけいじめられはじめて、中1になったらハードになって、お金をとられるようになった。中2になったら、もっとはげしくなって、休みの前にはいつも多いときで60000、少ないときでも30000～40000、このごろでも40000。そして17日にも40000ようきゅうされました。だから……。でも、僕がことわっていればこんなことには、ならなかったんだよね。すみません。もっと生きたかったけど……。家にいるときがいちばんたのしかった。いろんな所に、旅行につれていってもらえたし、何一つ不満はなかった。けど……。

あ、そうそう！お金をとられた原因は、友達が僕の家遊びに来たことが原因。いろんなところをいじって、お金の場所をみつけると、とって、遊べなくなったので、とってこいてこうなった。

オーストラリア旅行。とても楽しかったね。あ、そーいえば、何で、奴らのいいなりになったか？

それは、川のできごとがきっかけ。川につれていかれて、何をするかとおもったら、いきなり、顔をドボン。とても苦しいので、手をギュッとひねって、助けをあげたら、また、ドボン。こんなことが4回ぐらい？あった。特にひどかったのが、矢作川。深い所は、水深5～6mぐらいありそう。図1みたいになってる。ここでAにつれていかれて、おぼれさせられて、矢印の方向へ泳いで逃げたら、足をつかまれてまた、ドボン。しかも足がつかないから、とても恐怖をかんじた。それ以来、残念でしたが、いいなりになりました。あと、ちょっとひどいこととしては、授業中、てをあげるなどかテストきかん中もあそんだとかそこらへんです。

いつもいつも使いばしりにされていた。それに、自分にははずかしくてできないことをやらされたときもあった。そして、強せいの、髪をそめられたことも。でも、お父さんは僕が自分でやったと思っていたので、ちょっとつらかった。そして20日もまた金をようきゅうされてつらかった。

あと、もっともつらかったのは、僕の部屋にいるときに彼らがお母さんのネックレスなどを盗んでいることを知ったときは、とてもショックだった。あと、お金をとっていることも……。

自殺した理由は今日も、40000とられたからです。そして、お金がなくて「とってこれません」っ

ていっても、いじめられて、もう一回とってこいっていわれるだけだからです。そして、もっていかなかったら、ある一人にけられました。そして、そいつに「明日、12万円もってこい」なんていわれました。そんな大金はらえるわけ、ありません。それに、おばあちゃんからもらった、1000円も、トコヤ代も、全て、かれらにとられたのです。そして、トコヤは自分でやりました。とてもつらかったです。(23日)

また今日も、2万円とられました(24日)

そして今日は、2万円もとられ、明日も4万円ようきゅうされました(25日)

あと、いつも、朝はやくでるのも、いつもお茶をもっていくのも、彼らのため、本当に何もかもがいやでした。

なぜ、もっと早く、死ななかったかというと、家族の人が優しく接してくれたからです。学校のことなど、すぐ、忘れることができました。けれど、このごろになって、どんどんいじめがハードになり、しかも、お金もぜんぜんないのに、たくさんだせ、といわれます。もう、たまりません。最後も、御迷惑をかけて、すみません。忠告どおり、死なせてもらいます。でも、自分のせいにされて、自分が使ったのでもないのに、たたかれたり、けられたりって、つらいですね。

僕はもう、この世からいません。お金もへる心配ありません。一人分食費がへりました。お母さんは、朝ゆっくりねれるようになります。〇〇(弟の名)も勉強に集中できます。いつもじゃまばかりしてすみませんでした。しんでおわびいたします。

あ、まだ、いいたいことがありました。どれだけ使い走りにさせられたかわかりますか。なんと、自転車で、しかも風が強い日に、上羽角から、エルエルまで、たしか1時間でいってこいっていわれたときもありました。あの日にはたしかじゅくがあったと思いました。あと、ちよくちよく夜でいったり、帰りがいつもよりおそいとき、そういう日はある2人のためについていっているのです。そういう日はある2人のために、じゅくについていっているのです。そして、今では、「パシリ1号」とか呼ばれています。あと、遠くへ遊びにいくとかいって、と中で僕がかえってきたってケースありませんでしたか。それは、金をもっととってこいっていわれたからです。あと、僕は、他にいじめられている人よりも不幸だと思います。それは、なぜかという、まず、人数が4人でした。だから、1万円も4万円になってしまうので

す。しかもその中3人は、すぐなぐったりしてきます。あと、とられるお金のたんいが1ケタ多いと思います。

これが僕にとって、とてもつらいものでした。これがなければ、いつまでも幸せで生きていたのと思います。テレビで自殺した人のやつをみると、なんで、あんなちょっとしかとられてないんだらうっていつも思います。

最後に、おばあちゃん、本当にもうしわけありませんでした。」(4)

この遺書は「今日、もっていくお金がどうしてもみつからなかったし、これから生きていても……。だから……。」という文面からも理解できるように、大河内君が自殺した当日(1994年11月27日)に書かれたものだと考えられる。

大河内君の遺書はB5版の用紙4枚に鉛筆でびっしり書かれている。この量は遺書としては異例であり、この遺書を通して大河内君は「こころのメッセージ」を発していると考えられる。

まず、「17日にも40000ようきゅうされました。だから……。でも、僕がことわっていればこんなことには、ならなかったんだよね。すみません。」という文章がある。問題は「すみません。」の解釈である。確かに、遺書において家族に謝罪することはよくみられることである。そのような場合、「ここまで育ててくれたのに、自ら命を絶つ」ということに対する親への謝罪というケースが多いのではないだろうか。それに対して大河内君の場合、そのような印象はあまりみられない。むしろ、お金の要求を断れなかった自己に対する罪悪感、そのことと連動して家族に迷惑をかけたことに対する謝罪のように思えてならない。そのことは「僕はもう、この世からいません。お金もへる心配ありません。一人分食費がへりました。」という文面からも理解できる。つまり、大河内君の家族に対する謝罪は、自分自身の感情に基づいた「精神的な罪悪感」というよりいわば「物質的な罪悪感」という側面が強いのではないか。

また、「家にいるときがいちばんたのしかった。いろんな所に、旅行につれていってもらえたし、何一つ不満はなかった。けど……。」「オーストラリア旅行。とても楽しかったね。」という記述がある。文面だけをみれば「家はやすらぎの場」「家族は優しくしてくれた」ということになる。しかし、家族がよくしてくれたこととして「旅行」を挙げるといふことに不自然さないだろうか。つま

り、親から受けた愛情に満ちた出来事が書かれていないということである。確かに旅行も大河内君にとって親からしてもらった楽しい出来事だったに違いない。しかし、旅行というのはお金をかけて行なうイベント的要素が強く、例えば、「父親とキャッチボールをした」というものとは意味合いが違うように思える。すなわち、前者が「物質的要素の強い喜び」であり、後者が「精神的要素の強い喜び」ということになる。

次に、4人のいいなりになった川のできごとの部分を見てもらいたい。そこには「特にひどかったのが、矢作川。深い所は、水深5～6mぐらいありそう。図1みたいになってる。ここでAにつれていかれて、おぼれさせられて、矢印の方向へ泳いで逃げたら、足をつかまれてまた、ドボン。」(下線筆者)と記されている。下線の部分からも理解できるように、「家族にその時の様子を正確に理解してもらいたい」という意思を感じ取ることができる。しかし、「図1」「矢印の方向」といった具体的記述の意図は、「自分はこんなに苦しい思いをしたんだ」ということを伝えることだけであろうか。

次に、自殺の理由について書かれた部分を見てもらいたい。そこには「おばあちゃんからもらった、1000円も、トコヤ代も、全て、かれらにとられたのです。そして、トコヤは自分でやりました。とてもつらかったです。(23日)」「また今日も、2万円とられました(24日)」「そして今日は、2万円とられ、明日も4万円ようきゅうされました(25日)」とある。私が着目したのは「日付」が書かれている点である。大河内君が自殺したのは11月27日、つまり、自殺直前の日付である。大河内君が敢えて日付を記した理由は、日付を入れることで事実を客観的に伝えたかったからではないだろうか。

最後に、遺書の冒頭に「いつも4人の人(名前が出せなくてすみません。)にお金をとられていました。」(下線筆者)という文章がある。また、「家族のみんなへ」という遺書に類似する文書には「僕からお金をとっていた人たちを責めないください。」(5)と記されている。大河内君は、自分を死に追い込んだ加害者の名前を公表しない、さらに加害者に対して配慮までしている。しかし、大河内君は、加害者のいじめが契機となり自殺したのである。では、何故、大河内君はこのような文言を敢えて遺書に盛り込んだのであろうか。

第3章 「大河内清輝君いじめ自殺事件」の構図

大河内君のいじめ問題の特徴は、「いじめを受ける」→「真実を語らない」→「死を決断」→「自殺する」→「加害者をかばう」という図式そのものである。そして、大河内君のいじめ問題の本質に接近するためには「この図式を成立させる要因」を明らかにしなければならない。以上のような認識から、「いじめを受ける」→「真実を語らない」→「死を決断」→「自殺する」→「加害者をかばう」といった図式が何故成立したのかといった問題に関してアプローチしたいと考える。

大河内君にとって親に対する罪悪感も親から受けた愛情も「物質的要素」に基づいたものであるという点においては共通といえる。つまり、大河内君は、「目にみえるもの」に罪悪感を示し、「目にみえること」に対して感謝の気持ちを伝えていることが理解できる。

川でいじめられた場面では、大河内君は、図式化してその状況を示している。そして、自殺の理由について書かれた部分では、自殺する直前の出来事に関して敢えて日付をつけている。「図式化」と「日付」の効果は客観性である。「客観的に示すから理解して欲しい」という感情と「客観的に示さないと分かってもらえない」という感情を読み取ることができる。つまり、大河内君は、「親からの信用を求めている」「親から信用されていない自分を感じていた」ということになる。そして、自分を信用してくれない親に対して間接的に批判しているように思われる。そのような「親への不信任感」が真実を語れなくしたのではないだろうか。

大河内君は死を決断している。つまり、もういじめられる心配も恐怖もない。いじめた人間を書くことも彼らを露骨に非難することも可能だったと思われる。では、何故そうしなかったのか。矛盾するようではあるが、大河内君は彼らに対して「仲間意識」のようなものを抱いていたのではないだろうか。そして、いじめに耐えることで仲間関係を継続させていたとは考えられないか。また、大河内君はいじめに関して一貫して否定してきた。その理由として、「親への不信任感」だけでなく、「問題グループへの帰属意識」の問題も関係しているのではないか。

「いじめを受ける」→「真実を語らない」→「死を決断」→「自殺する」→「加害者をかばう」という図式を理解するためには、問題グループとの関係において大河内君にとって何らかの「プラス面」が存在したと考えるのが妥当である。家族関係において「物質的要素」に基づいた罪悪感や感謝の念を抱いていると述べた。では、遺書の中で

「何一つ不満はなかった。けど……。」という文章の「けど……。」のなかで大河内君は何を語りたかったのだろうか。私は、「物質的要素」に基づいた家族関係に対する批判ではないかと考える。「オーストラリア旅行」もいいけど、大河内君が望んでいたのはむしろ「精神的要素」だったのではないだろうか。問題グループには苦しさもあったが「精神的要素」によるつながりもあったのではないかと考える。

以上のような仮説が妥当であれば、「いじめを受ける」→「真実を語らない」→「死を決断」→「自殺する」→「加害者をかばう」という図式は成立することになる。

第4章 現代社会におけるいじめの構図

以上、「大河内清輝君いじめ自殺事件」の考察を通して「いじめ問題」について考えてきた。本章では、以上の考察を基盤として「現代社会におけるいじめの構図」に接近したいと考える。

第1に、「いじめの捉え方の問題」である。メディアにおいて頻繁にみられる「被害者と加害者とを二極化して捉える」という認識方法には限界があるということである。この点については、大河内君が遺書においても加害者をかばったという事実からも理解できるだろう。

第2に、「人間関係の複雑性の問題」である。この事件の場合、大河内君はいじめの対象に選ばれたというより「人間関係の歪み」によって生み出されたといっている。つまり、誰がいじめられるかわからない、何故いじめられるのかという理由が見えにくい状況下にあるのである。したがって、仲間関係がいじめ関係に変化することも起こりうるのである。

また、大河内君がいじめられても「問題グループ」から離れなかったのは「帰属意識」の強さの表れではないだろうか。つまり、帰属することで、己の「孤独感」「孤立感」を解消していたのではないか。いじめを受けた場合、不登校という手段によってその辛さを回避することも可能だったはずである。その選択をしなかった理由として、帰属していないという状況によって生まれる「孤独・孤立に対する恐怖感」があったと考えられる。

第3に、「他者理解の問題」である。圓岡偉男はそのことに関して以下のように述べている。「われわれは日々当たり前のように他者に接し、他者と話をし、そして、さまざまな理解をそこに感じる。この一連の何げない日々の他者とのかわりに疑問を抱きながら生活する人は少ないだろう。しか

し、これらのことは、果たして当たり前のことなのだろうか？ 本当に、わたしはあなたを理解できるのか？ 本当に、あなたはわたしを理解できるのか？ われわれは時として、相手の〈誤解〉や〈無理解〉に遭遇する。しかし、それは一時的なこと、例外的なことなのだろうか？」(6)「自己は他者を理解し、他者は自己を理解する」という行為を日常的に行なっているということは確かであろう。しかし、この事実と「自己が他者を正確に理解する」「他者が自己を正確に理解する」ということとは次元が異なる。したがって、圓岡が言う「誤解」や「無理解」というような現象が生まれるのである。このような「相互間の理解のズレ」は例外的な現象と考えるより、一般的な現象と考える方が妥当であろう。何故なら、「他者を正確に理解すること」「自己を正確に理解してもらうこと」自体が難解な営みであると考えからである。

大河内君のケースの場合、学校は、自殺し遺書の内容が明らかになるまで「いじめ」とは認識しておらず、むしろ大河内君を「問題グループの一員」と捉えていた。このように、学校(他者)は、大河内君(自己)を正確に理解していなかった。また、身近な存在である家族(他者)も大河内君(自己)を正確に理解していなかったのである。私は単に「大河内君を正確に理解できなかったこと」を批判しているわけではない。むしろ、「他者を正確に理解すること自体が難解な営みである」という意識の希薄さを問題視しているのである。仮に、上記の難解性を意識していれば、自己が認識している他者への理解を疑い、他者を理解するための方法をさらに模索するといった思考が生まれたかもしれない。

第4に、「家族関係の在り方の問題」である。上記で、大河内君は、「目にみえるもの」で罪悪感を示し、「目にみえること」に対して感謝の気持ちを伝えていると述べた。この物理的要素を土台にした家族関係に問題を感じる。大河内君が謝罪しなければならなかったのは、お金のことではなく「自殺を選択したこと」だったのではないか。また、家族の優しさを感じるのは、旅行ではなく「日々の何げない関わり」だったのではないか。自殺することによって自分がこの世からいなくなるという現実是非常に重い。そうであれば、遺書に「悲しみ」「むなしさ」「怒り」……といった自分の素直な感情を書くこともできたはずである。それができなかったのは、家族関係において「精神的つながり」を感じるができなかったからではないか。私は、家族関係において「精神的つな

がり」が基盤であり、「物質的つながり」は前者があってはじめて機能するものであると考えている。大河内君が自分の素直な感情を語らなかった(もしくは、語れなかった)要因の1つとして、このような家族関係の在り方が関係しているのではないかと考える。

最後に、「現代社会の在り様の問題」である。私は、大河内君のいじめ問題自体が「現代社会に影響を受けた子ども問題」であると考えている。つまり、上記で挙げた「いじめの捉え方の問題」「人間関係の複雑性の問題」「他者理解の問題」「家族関係の在り方の問題」という要素と現代社会の在り様とは密接に関係しているのである。「現代社会の在り様の問題」という要素を設けた理由は、いじめ問題を含めた子ども問題を理解するためには、この視点が不可欠であるということを強調したかったからである。

おわりに

現代社会において、「児童虐待」という現象が問題になっている。現代社会の特徴として「核家族化」「都市化」「情報化」などがある。そこでは育児経験のない妻と、幼い子どもだけがアパートなどの一室に取り残される。都市では、「互いに干渉はしない」という意識も働き、近隣との関わりもほとんどない。誰にも相談できないという状況が形成されるわけである。育児書、インターネットだけが頼りの育児は、母親を疲労させ、「育児不安」「育児ノイローゼ」といった精神的不安を引き起こしやすい。この状況が発展すれば児童虐待が起こる可能性が高くなる。虐待によって、子どもが辛い思いをすることは言うまでもない。しかし、「虐待を否定することによって親をかばう」「辛い思いをしても親の側にいる」といった光景はよくみられることである。ここで気づかないだろうか。大河内君は「いじめに関して一貫して否定した」「辛い思いをしてまでも、いじめる人間の側にいた」「遺書においてもいじめた人間をかばった」のである。「児童虐待」と「いじめ」といった異なる子ども問題ではあるが、何らかの「共通性」を見出すことができるのではないだろうか。

すなわち、いじめ問題に接近するためには、いじめ問題を突き詰めていくという視点と同時に他の子ども問題からいじめ問題にアプローチするという多角的視点が不可欠であると考えている。「いじめ問題」「不登校問題」「ひきこもり問題」・・・といった縦割り思考では捉えきれないほど、子ども問題は年々深刻化しているのである。

《謝辞》

本論文を作成するにあたって、貴重なご意見を頂いた査読者の方々に感謝致します。

(脚注)

- (1) 1994年12月2日、「毎日新聞」(大阪) 参照
- (2) 1994年12月14日、「中日新聞」参照
- (3) 1994年12月9日、「産経新聞」(大阪) 参照
- (4) 三浦尚城『冒険の旅』心力舎、1999年、14頁～22頁、本書は大河内君の両親の協力を得て執筆されたものである。
- (5) 前掲書23頁
- (6) 圓岡偉男編著『社会学的問いかけ』新泉社、2005年、180頁

《主要参考文献》

- ・三浦尚城『冒険の旅』心力舎、1999年
- ・『いじめを追う』～いじめ問題で悩むあなたへ～ニホン・ミック、1996年
- ・谷口卓・末光正和編著『実践から学ぶ児童虐待防止』学苑社、2007年
- ・圓岡偉男編著『社会学的問いかけ』新泉社、2005年
- ・小林育子・小館静枝編『保育者のための社会福祉援助技術』萌文書林、2002年

The Composition of a Bullying in Modern Society (1) Through a Consideration of "The Bullying Suicide Incident of Okouchi Kiyoteru"

Masakazu SUEMITSU

Toyama College of Welfare Science

First, I understood a outline of "The Bullying Suicide Incident of Okouchi Kiyoteru" by clearing up "a summary of the incident" "a structure of assailant groups" "a recognition of the bullying in the junior high school".

Second, I considered "Okouchi Kiyoteru's last words". Okouchi did not tell his family and teacher the fact of his bullying. Accordingly I thought his last words was very important and made clear his problem.

Finally, I pointed out the factor of a bullying in modern society through a consideration of Okouchi problem.

Keywords : bullying problem, suicide, human relations, family relationship, modern society

自己実現に関する心理学理論の比較研究 —看護への適用のために—

富山福祉短期大学看護学科 炭谷 靖子

(受付2008年2月1日；改訂2008年3月15日)

要旨：

本研究では、自己実現の概念を看護に適用するため、自己実現に関する心理学の諸理論を比較し、その特徴を明確にすることを目的とした。比較した理論はユング (C.G. Jung 1875～1961)、エリクソン (E. H. Erickson 1902～1994)、マズロー (A. H. Maslow 1908～1970)、ロジャーズ (C. R. Rogers 1902～1987) によるものである。比較の視点は、①理論構築の背景、②人格のとらえ方、③人格の発達過程、④健康な人格、⑤理論の目指すもの、⑥理論の特徴という六つである。更に、それぞれの特徴を踏まえて、今日的な自己実現の目指す姿を明らかにし、現代社会に適用するための自己実現に関する理論の再構築を試みた。

その結果、ユングとエリクソンは、発達、成長の過程を重視していた。一方、マズローは発達の過程について多くを述べていなかった。しかし若年者に自己実現者が非常に少ないことを指摘していた。また、ロジャーズは、幼いころや成長過程は重要ではあるが、それらに支配されることはないとしていた。そして、現在がどうであるか、それを自分がどう見ているかがそれよりもずっと重要であるとしていた。

更に本研究では、自己実現者の特徴を比較、検討し、自己実現者の特徴を再構成した。その結果、①愛の能力、②開かれた自己③人間としての英知、④創造性、⑤真の自由 ⑥深い自己信頼、⑦使命感、⑧全世界・宇宙への信頼と調和、の八つのカテゴリーを抽出した。そしてそれらのカテゴリーを構造化し、自己実現の最初の段階を「人間性の高まり」と命名した。そして次の段階を「天命の認知」とし、これらの段階を経て「全世界・宇宙への信頼と調和」の段階に至ると考えられた。

本研究では、ユング、エリクソン、マズロー、ロジャーズの理論を比較したが、これらの理論家は、ほぼ同じ時代に生きた人々である。また、日本という文化の中でそれらの理論から見出したものがどこまで適合するのかわからない。日本の社会の状況は、西欧の後を追っている観がある。しかし、シュルツ (D. Schultz) は、「健康な人格—人間の可能性と七つのモデル (GROWTH PSYCHOLOGY Models of the Healthy Personality)」の日本語版への序において、そこに紹介した心理学者の見解を学ぶことにより、精神的成長をとげ、人生を豊かにし、その結果、新しいレベルの自己発展、自己実現、自己超越を達成することができる可能性を示唆している。またこれらの考え方をその人生にとりいれることによって、西洋の人間が、東洋の宗教の実践家たちが何世紀にもわたって教えてきた心境に近づくようになる可能性を述べている。これらのことを考え合わせると、東洋の知と西洋の知が出会い、融合する中で、新たなレベルの自己実現を求めていくことが可能になるといえる。そのために、われわれは、日本の地における文化とそこに潜む知恵を明確にし、自分自身の生活の中における実践と、生きることそのものを支える看護活動へとつなぐ努力を続ける必要がある。

キーワード：自己実現 ユング エリクソン マズロー ロジャーズ

はじめに

21世紀は心の時代と言われ、これまでの利益追求型の社会から心豊かな社会の実現を目指した活動の必要性が叫ばれている。ヘルスプロモーションに関するオタワ憲章においても「ヘルスプロモーションとは、人々が自らの健康をコントロールし、改善することができるようにするプロセスである。身体的、精神的、社会的に完全に良好な状態に到達するためには、個人や集団が望みを確

認・実現し、ニーズを満たし、環境を改善し、環境に対処することができなければならない。それゆえ健康は生きる目的ではなく、毎日の生活の資源である。」^{注1}と述べている。また、1998年に開かれた世界保健機関執行理事会 (WHO; EB101) において、「健康の定義」の中へ spirituality 概念の追加案が提出されている。そして、著者がこれまで活動してきた看護の場においても、自己実現のための資源として健康に関わる大切さがさらに

強調されるようになってきている。

また、1997年（平成9年）3月に出された「心豊かで活力ある長寿社会づくりに関する懇談会」最終報告では、「『生きがい』の意味についてはいろいろな考え方はあるが、強いて表現するとすれば、それは『自己実現』である」^{注2}としている。しかし一方では、自己実現を図るためのものとして、生きがいと健康づくり活動を位置付けている。近年このように、自己実現の重要性について、さまざまに述べられてはいるが、自己実現についての混乱を招く記載もある。

心理学基礎用語集によれば、「自己実現（self-actualization）とは、自分の能力を十分に発揮し、自分に備わった可能性を最大限に発揮するものとする。」^{注3}としている。また、自己実現の達成は、ごく限られたもののみ可能であると述べられている。自己実現を目指した社会づくりを目指すのであれば、より、多くの人々が自己実現を達成することが望まれる。よって、自己実現という言葉や理論を看護において用いるためには、自己実現に関する心理学理論の詳細な研究が必要である。さらに、現代社会の文化に適した理論構築が必要である。

本研究では、自己実現に関する心理学理論の比較研究を行い、現代社会における看護に適用するため自己実現に関する理論の再構築を試みた。

1 研究の目的・内容・方法

1.1 研究の目的

本研究では、現代社会における看護において自己実現に関する理論を適用するため、心理学の諸理論を比較し、その特徴を明確にすることを目的とした。また、その特徴を踏まえて、今日的な自己実現の目指す姿を明らかにし、現代社会に適用するための自己実現に関する理論の再構築を試みた。

1.2 研究の内容・方法

本研究では、自己実現について明確にするため、研究対象として、ユング（C.G. Jung 1875～1961）、エリクソン（E. H. Erickson 1902～1994）、マズロー（A. H. Maslow 1908～1970）、ロジャーズ（C. R. Rogers 1902～1987）の理論をとりあげた。

自己実現という言葉はマズローによってアメリカで使われはじめた。その後、この概念は心理学の分野のみに留まらずアメリカにおいて産業労働、政治、社会心理などの様々な分野で用いられるようになった。

よって、本研究では自己実現という概念の創始者であるマズローを中心に置き、年代的にマズローの前後に位置する人々を含み、歴史的背景を加味して検討を進めた。

なおユングは、精神分析的立場から無意識を強調した理論家である。エリクソンは人格の発達に関する理論を提示している。マズローは、自己実現（self-actualization）という言葉をもっと最初に用いた理論家である。そしてロジャーズは人格変容の主な責任を治療者ではなく、患者自身に置く来談者中心療法を発展させた。これらの代表的理論を比較し、自己実現との関連を明確にすることによって、現代社会に適用するための自己実現に関する理論を再構築することが可能になると考えた。

2 自己実現理論の課題

2.1 自己実現に関する諸説の混乱

マズローは「完全なる人間」の序文において、自己実現という言葉の欠点について述べている。それは「この用語は文章表現上不体裁であるばかりか、次のような予想だにしない欠点をもつことが確かめられた。(a) 他愛的というより利己的な意味が強いこと。(b) 人生の課題に対する義務や健診の面が希薄なこと。(c) 他人や社会との結びつきをかえりみないばかりか、個人の充実が『よい社会』に基づいている点を看過していること。(d) 非人間的な現実のもつ強要的性格や本質的魅力、興味を無視していること。(e) 無我と自己超越の面がなおざりにされていること。(f) それとなく能動性を強調し、受動性、受容性についておろそかにされていること、である。わたくしが注意深く努力して、自己実現をする人が他愛的で、献身的で、社会的であるなどと経験的事実を述べても、これはそう受けとられるのである。」^{注4}というものである。

また駒井は、「このようなマズローの自己実現理論については、それがいかにもプチブル的な人間観をもっているという非難が強く浴びせられてきた。欲求階層説を前提とするばあいには、自己実現は、十分に衣食足りた人々にだけ許される特権となってしまう。」^{注5}と記述している。そしてこのようなことの起こる原因として、マズローは、「自己」という言葉の言語上の習慣をあげ、どうにもならないことが多いとしている。

マズローの著書「完全なる経営」の訳者である金井は、その前書きにおいて、「日本で開かれるどのような会合でも、自己実現という言葉を知らないひとがいけないのに驚かされる。また、言葉とし

ては知っている、自己実現が何であるかを知らないひとが多いのにもびっくりさせられる。それは、マズロー自身の著作が読まれず、中途半端な説明を教科書で見たり、同じくらい説明不足な説明を教師や人事部のひとから聞いてきたせいだろう。」と述べている。

つまり今日の社会において、自己実現という言葉だけが独り歩きをしている現状がある。そして、その言葉の印象によって自己実現は、さまざまに語られていると考えられた。

2.2 自己実現の理論研究の意義と視点

前節で述べたように、自己実現という言葉は、真の概念から離れ、言葉だけが独り歩きをしている状況がうかがえる。前出の金井は、amazon.co.jpで、自己実現と名のつく和書をリストすると、139冊もあった(2001年11月現在)。ビジネスパーソンの成功哲学・サクセスもので扱っている通俗的な書物から、逆にチャクラ、悟り、至高経験とのからみで自己実現を扱っているニューエイジ風で宗教的な書物もけっこうある。マズローは、至高経験に興味をもったが、そのようなときしか自己実現の感覚をもてないような生き方には否定的だったし、世間的な成功と自己実現をイコールと考えたことは一度もない。TA(交流分析)や人間関係、社会的適応、さらには能力開発との関連で自己実現をとらえる臨床系・経営系の本も多い。・・・中略・・・学校を出て社会人になってからのキャリアに自分らしく生きるという自己実現のテーマをマズローは認めただろうが、成功哲学のように、キャリアを単に上昇志向のようにとらえる発想と自己実現のアイデアとはそぐわない。」^{注6}と述べている。つまり、しっかりとした理論的基盤の必要性を再認識する必要がある。

時代によって、人間の働き方、働く場のあり方、生活に対する価値観、生き方に対する考え方など様々に変化していく。そして、現代においてその変化はめまぐるしいものを感じる。しかし、このような変化の激しい時代だからこそ、人間の本質を見つめ、人間は何を求め、何を目指して生きていくのかを見つめる必要がある。その目指すところに向かって今の自分を生きることが必要であると考え。そのための基盤として、再度、この時代において、自己実現理論を探求し、現代に適用するための理論構築が必要であると考え。

なお、理論再構築のために行う自己実現理論の検討と比較考察は、①理論構築の背景、②人格のとらえ方、③人格の発達過程、④健康な人格、⑤理論の目指すもの、⑥理論の特徴という六つの視

点で行う。これらの視点は、個人的背景を考慮し、その理論の根幹にあるものを確認し、今後の応用・発展に資することを意図したものである。

3 自己実現の理論研究視点による心理学理論の検討

3.1 ユングの理論

3.1.1 理論構築の背景

ユングが無意識と対面するにいたったきっかけは、自分の人生に意味も面白みもないと感じたことに始まる。1913年、ユングが38歳のとき、外面的には安定し、充実した生活を送っているときである。しかし、内面においては、気が狂いつつあると感じていた。シュルツ(D. Schultz 1934～)は、「彼の知的活動は停止状態に陥っており、ほとんど執筆活動はおこなわなかったし、科学書を読むこともできなかった。知的にも情緒的にもこんなに混乱し、苦しみが多いのに講義をおこなうことなど不可能だと感じ、彼は講師の職を辞し、大学におけるキャリアを断念した。」^{注7}と述べている。精神科医であった彼は、自分自身の混乱の原因を見つけようと自らの人生を振り返り、特に幼児期を検討した。しかし、何も見つけることができず自分の問題を知的レベルで理解しようとするのをあきらめ、自分の心に浮かんだことを何でもやろうと決心をした。そして、無意識が彼に要求することを熱心におこなった。ユングはこのような強烈な個人的体験から、自らの人生の新しい意味と中心を作りあげ、さらに、人間パーソナリティについての新しい理解を得た。

シュルツはユングの精神的健康の定義や処方について「彼の精神的健康の定義や処方は、自分自身の情緒的危機とそれに対してとった解決方法の鏡像である。彼は洗練された人格理論を構築したが、他のどんな理論ともまったく違って、個々人が無意識的経験と直面することと、それに注意をはらうことの必要性に焦点が合わせられている。」^{注8}と述べている。

また、ユングの生育歴について「彼は神経質な両親を持った孤独な一人ぼっちの子どもであった。何年ものあいだ、彼の唯一の友は、彼が自分で彫った木の像であった。両親および両親の夫婦間の問題から逃れるため、ユングは子どもの頃に住んでいた家の屋根裏部屋で木の像と遊び、木の像に心のなかをうち明けて時を過ごした。外の世界から引き離され、彼の心は神話、夢、幻想、空想といった自分自身の世界に集中していた。」^{注9}と述べている。つまり、彼の自分の内面と向き合い、

独自の世界に深く没入する姿は幼い頃の姿から引き続いていると見ることができる。そして、この姿が、彼の理論の中核である人格表面の下にある無意識の世界をつくりだす基本であると言える。

3. 1. 2人格のとらえ方

ユングの理論の特徴は、他のどの理論家よりも、無意識を強調した点にある。また、その無意識の要素として個人がその生活においた蓄積する経験だけではなく、人類や人類の祖先である動物のすべてが蓄積してきた経験も含めている。つまり、われわれ人間は、それぞれすべての時代におけるあらゆる人間の経験がことごとく組みこまれている遺産を所有しているとした。

また、ユングの理論は、患者たちの観察、古代文明の神話や伝説を貪欲に読み、その象徴や儀式、宗教、錬金術、占星術、透視術を探求する中から確立された。

ユングは人格を、独立しているが相互に作用しあっている三つの体系としてとらえている。それは①自我 (ego)、②個人的無意識 (personal unconscious)、③普遍的無意識 (collective unconscious) である。

河合は「ユングは、人間の心の中に意識と無意識の層を分けるのみでなく、後者をさらに個人的無意識と普遍的無意識とに分けて考えた。」^{注10}と述べ図1を示している。以下にその三つの体系について概説する。

①自我

自我は意識的な精神であり、覚醒状態のなかでいつでもみられるすべての知覚、記憶、思考、感情を含んでいる。自我は外界からの多くの刺激を選択的に認知するためのフィルターとしての役目を果たしている。感覚や観念、記憶が自我の意識によって認識され、とりいられなければ、それは見えも聞こえもしないし考えもされないであろう。

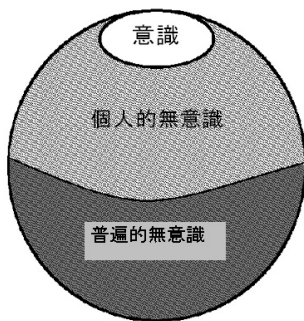


図1 ユングの意識・無意識の層

ユング心理学入門 培風館 河合隼雄 1967 p.93より作成

う。

また、ユングはアドラーとフロイトの対立の中から、両者の相違は、彼らの事象に対する基本的態度の相違であると考え、意識のタイプについて述べている。

フロイトは人間の行動を規定する要因として、その人の外界における人間や事件を考えるのに対して、アドラーはその人の内的な因子を重要視している。このように同じ事象をみてもそれに対する態度が異なると、考え方も見方も変わってくる。つまり、人間には二つの基本的態度 (basic attitude) があり、関心や興味が外界の事物やひとに向けられる外向 (extrovert) 的なものと、逆に内界の主観的要因に向けられる内向 (introvert) 的なものである。そして、基本的な「外向」「内向」を軸にして、それぞれが意識的にとる構えと無意識的にとる構えとでは正反対になるという見方を加味した。

さらにユングは四つの心理的機能として思考 (thinking)、感情 (feeling)、感覚 (sensation)、直感 (intuition) を組み合わせた。このうち思考と感情は合理的な機能であり、さらに相対立する機能として存在する。そして感覚と直観は非合理的な機能でありこれらも相対立する機能として存在する。このユングによる心理タイプの8類型を表1^{注11}に示した。

また、ある個人が主として依存している心的機能を主機能 (main function)、その対立機能を劣等機能 (inferior function) という。これらの機能の関係について河合は図2^{注12}を示している。

つまりユングは、ある時点においてそれぞれ対になっている機能のうち一つだけが優勢になりうるものであり、ひとりの人間が、同時に思考と感情の両様式、または感覚と直観の両様式で行動できないとしている。

表1 ユングの心理的タイプの8類型

心的機能 \ 向性	外向型	内向型
	思考	外向思考型
感情	外向感情型	内向感情型
感覚	外向感覚型	内向感覚型
直観	外向直観型	内向直観型

図説 ユング 自己実現と救いの心理学
河出書房新社 林道義 1998 p.62より作成

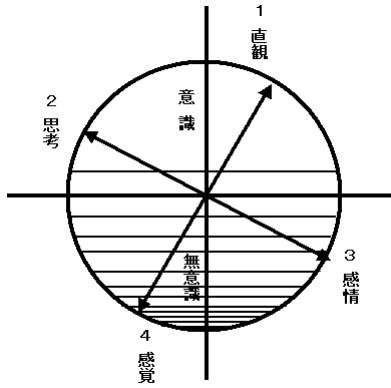


図2 意識と無意識の相補性

ユング心理学入門 培風館 河合隼雄 1967 p.58より作成

②個人的無意識

個人的無意識は①意識内容が強さを失って忘れられたか、意識がそれを回避（抑圧）した内容と②意識に達するほどの強さではないが、何らかの方法で心のうちに残された癡痕の内容から成り立っている。これはより表層的な水準のものであり、もはや意識にはないが、用意に意識にのぼらせることのできる素材の貯蔵庫としてとらえることもできる。

また、個人的無意識の重要な側面は、ユングがコンプレックス（complex）とよんだ、ある共通のテーマに関連した情緒や記憶、思考の集合体である。ある意味において、コンプレックスは人格全体の内部にあるかなり小さな人格であり、何かに強くこりかたまっていることを特徴としている。しかし、そのコンプレックスをもった人間は、そのコンプレックスが意識の一部ではないために自分がそのコンプレックスに支配されていることを気づかないのである。

つまり、コンプレックスは個人的無意識のうちに存在しわれわれに関するすべてのこと（外界をどのように認知するか、価値観や興味、動機など）を決定する。

③普遍的無意識

普遍的無意識は、人類に、むしろ動物にさえ普遍的なものであり、個人の心の真の基礎とみることができ。このように人間の無意識の奥深く、無意識の層を考えるのはユングの特徴である。ユングは人間の普遍的無意識の内容のなかに、共通した基本的な型を見出すことができると考え、それを元型（archetype）と呼んだ。河合はこの元型について「元型は仮説的な概念であって、心の奥深く隠されている基本的要素であり、原始心象

（primordial image）は、その意識への効果、すなわち意識内に浮かび上がってきた心象をさしているとした。つまり『元型そのもの』は、けっして意識化されることがなく、不可視の節点のごときのもので、その表象として原始心象（あるいは元型敵心象とも呼ぶ）とは区別して考える必要がある。」^{注13}と述べている。なおユングが元型として取り上げたもののうち特に重要なものはペルソナ（persona）、影（shadow）、アニマ（anima）、アニムス（animus）、自己（self）と名づけられたものである。

ペルソナは、役者が観客の前で自分と違った顔、すなわち役割を演じるために着けた仮面を意味するものである。ユングはそれと同じ意味でペルソナという言葉を用いている。人はその人生において多くの役割を演じる。現代生活においてこのペルソナは役立つものであり、必要なものである。しかし、真の自己から疎外され膨張したペルソナは縮小した人格の他の側面との間で緊張を生じるようになる。

アニマとアニムスは、相互に関連する一対の元型である。この二つの元型はいくつもの世代にわたって男性と女性が共同生活を営んできた経験のなかで発達してきたものである。つまり、男性の人格には女性的要素であるアニマを含み、女性の人格には男性的要素であるアニムスを含んでいる。

影は、その個人の意識によって生きられなかった反面、その個人が容認しがたいとしている心的内容である。そしてもっとも強力で、もっとも有害なものとなりうる元型である。影は、人間の本性の最悪の側面と最良の側面を包含しており原始的な動物的本能を含んでいる。

最も重要な元型は自己である。自己が発達を遂げるとき、人間は自分自身や世界と調和していると感じる。自己という元型は、人格のすべての部分の一つにまとめ、つりあいのとれた状態にする機能を表わしていると考えることができる。そして自己現実化の要件の一つとして、人格の、自己以外のすべての体系の十分な発現と発達がある。よって、自己現実化は中年期まで起こらないし、中年期が人格の発達において非常に重要な成長段階であるといえる。

3. 1. 3 人格の発達過程

ユングは、人格は生涯を通じて発達し続け、さらに35歳から50歳の間に重要な変容をとげることがを示唆した。

ユングは人格の発達を児童期、青年期・早期成人期、中年期、老年期の四つの段階で記述してい

る。乳児の行動は本能に支配され心理的な問題は存在しないと考えた。

ユングは児童期に自我の基礎が発達しはじめると考え、子供の人格はその両親の人格の単なる反映であるとしている。

本格的な人格の発達は青年期・早期成人期は思春期にはじまる。この時期は、人格が明確な形状と内容を持ちはじめる時期である。この時期の主要な課題は、職業への準備と成人としての責任を担うことへの準備である。エネルギーは外部を志向し、自己から離れていく。この時期の態度は普通、外向的であり、意識が優勢となる。この時期の人生の目標は、世の中の一員として自分の立場を確保することである。

中年期は40歳前後にはじまる。人格に抑うつ的な激しい変化が生じる。ユングは、中年期を人格が必要かつ有益な変化をとげる自然な移行期であるととらえた。人生の前半は外的世界に関心が向き、人生の後半はそれまで無視していた内的、主観的世界に向くのである。そして、これまでの意識への集中は、無意識的経験の意識化によって調整されなければならない。

中年期の興味は、宗教的、哲学的、直感的なものへと移行しなければならない。つまり、自己現実化を達成するためにバランスよく人格のすべての側面を重視しなければならない時期であるとした。

老年期は人格成長の最終段階である。ユングは人生の最後の年月と最初の年月は類似性があるとだけ述べている。

ユングは、個人に内在する可能性を実現し、その自我を高次の全体性へと志向せしめる努力の過程を個性化の過程 (individuation process) あるいは自己実現の過程 (self-realization) と呼び、人生の究極の目的と考えた。

3. 1. 4 健康な人格

ユングは健康な人格について明確に表現をしていない。また、西平は「ユングは45年の間に、様々な仕方でも個性化の説明を試みている。しかし、語れば語るほど、話は豊かになっていく代わりに、ますます全体像がつかみにくくなる。」^{注14}と述べている。ユング自身も「学問的な術語としての<個性化>は解明されているわけではない。むしろそれは、単に無意識における人格形成的な中心へと向かうプロセスの、まだきわめて曖昧で、研究の余地を残した領域を、表しているにすぎない……このプロセスは、人間の知性によっては、いくら時間をかけても解き得ないほどの謎

に満ちている。そもそも知性が、その謎を解くのに適しているかも、疑わしい。……」^{注15}と述べている。しかし、あえてシュルツはユングの著作をまとめ以下のように表現している。

「個性化した人間は、年齢的には中年期以降の人間であり、彼らは、その時期における人格の本質の変化による重大な危機を、無事に乗りきっている。彼らは、幾年かを費やして自らの自己、生活、志望、希望、目標などについて熟考したことであろう。彼らは無意識が外にあらわれてくるのを認めたので、自分の性質のこれまで押さえていた面を自覚するようになっていく。その結果、個性化した人間は、高い水準の自己知識を達成している。つまり、意識と無意識、双方の水準における自分自身を知っているということである。

自己知識と併行するのが自己の受容である。個性化した人間は、自己探求の時期に明らかになった自己に関する内容を受け入れる。彼らは、自分自身の本質を—その強さも弱さも、聖人的側面も悪魔的側面も—受け入れる。彼らは、状況が違えば違うペルソナを着けるかもしれないが、それは単に社会的にみてそのほうが都合がよいからそうするというだけである。個性化した人間は、自分が役割を演じているということを知っており、その役割と自分の真の自己とを混同したりしない。

個性化した人間の第3の特徴は自己の統合である。人格のすべての側面が統合され、調和をとるようになるため、すべての側面—異性の特徴、それまで劣勢だった態度や機能、無意識全体—が表現できるようになる。生まれてはじめて、どの側面、態度、機能も優勢でなくなる。

人格のすべての側面を統合し、そしてそれらを表現することは、精神的健康の中心的部分であり、したがって、この自己表現を個性化した人間の第4の特徴として考えなければならない。

このような人間はまた一般的な意味での人間の本質に対する受容と寛容をその特徴としてあげることができる。個性化した人間は、集合的無意識 (人類のあらゆる経験の貯蔵庫) を率直に受け入れることができるため、人間の条件をより深く認識しており、そしてそれを許容することができる。……中略……

健康な人間は、ユングがその生活においてそうであったように、未知で神秘的なものの受容をその特徴とする。」^{注16}

つまり、ユングのみる健康な人格とは普遍的な人格であり、個性化した人間を意味する。その個性化した人間を言葉で表現することには無理があり、

『特定の心理的タイプに分類することは不可能である』という特徴を持つことは確かであると考えられる。

3. 1. 5 理論の目指すもの

ユングの理論が目指すものを個性化した人間であるとするれば、人生の豊かな完結へと向かっているとも考えられる。西平は「ユングは、死のうちに人生の目標を見ることは、人類に共通するといふ。なぜなら、すべての偉大な宗教体系が、みな同じくそう教えているのであるから。そういつて『宗教』についてこう語る。

宗教が、仮に人間が作り出したものであったとしても、けっして『人間の頭』によって作り出されたものではない。意識的に考え出されたものではなく、人類に共通した無意識的な心(ゼーレ)の深層から生まれてきた。」^{注17}と述べ、ユングの「したがって、死を単なる無意味な終止と見ずに、人生の意味の実現、人生本来の目標と見ることは人類一般のこころ(ゼーレ)に対応するよう思われる」^{注18}という言葉を示している。よって、ユングの理論が目指すものは、人生の豊かな完結であり、究極的には死に向かうものであると考えられる。

3. 1. 6 理論の特徴

ユング理論の特徴は無意識を強く強調したことにある。そして、その無意識を構造化した。また、心的機能を分類し、それらの関係において自己を現実化し、個性化の過程として自己実現を目指すという特徴を持つ。

そして、個性化した人間は『特定の心理的タイプに分類することは不可能である』という特徴を持つとしている。

3. 2 エリクソンの理論

3. 2. 1 理論構築の背景

西平はエリクソンの自伝ノートをもとに「エリクソンは幼少時代、再婚した母と養父と3人で、西南ドイツ、カールスルーエの町で過ごしていたことになる。故国デンマークから一人移り住み、一人息子を産み育てていたこの母親には、多くの芸術家仲間がいたということであるから、エリック少年もまた芸術家の空気を吸って過ごし、芸術家を通して世界を見ていたことになる。

他方、当地のユダヤ人会長を務めていた養父ホンブルガー氏は、小児科医院を開業していたというから、少年エリックは、自分の家では、病気になった子どもたちが回復し元気になってゆく姿をみながら過ごしていたことになる。」^{注19}と述べている。

また、岡堂は「エヴァンズ教授(Richard I. Evans)が指摘しているように、エリクソンは基本的には正統派の精神分析の立場にたつが、前身が画家であったせいか彼の文体は絵画的であり、ヘンリー・マイヤーによれば『エリクソンはふといタッチで背景を描き、そして直接前景を繊細に満たしていく』のである。フロイトと同様に、エリクソンの資料のほとんどは、彼の臨床的事例から得られている。フロイトがギリシャの神話からエディプス・コンプレックスなどの概念を導きだしたように、エリクソンは詩歌や民間伝承・風俗あるいは日常生活の知恵から彼の概念を明らかにしている(たとえば、基本的徳)。」^{注20}と述べている。

そして、西平は、エリクソンはその体験を基礎として、彼の研究の中心にはく子どもが回復する>ということがあった。そしてそれと同時にその関心は外へ向かって広がり、常に異なる文化、異なる時代へと向かっていたと提示している。

上記の状況から導かれ、エリクソンの理論の基礎的構えが生まれたと考えられる。つまり、エリクソンは、<個人が生き生きするのは歴史とどうかかわっている時なのか、子どもが生き生きするのは社会や歴史とどういう関係を持つ時なのか>と問いを立てているのである。

3. 2. 2 人格のとらえ方

岡堂はエリクソンの自我発達論の特徴として、「人間が漸成的各段階で出会う社会的環境との交わりの過程の中で、本質的に社会的な人間の特徴が開花すると考えるところにある。(一般の人類学者が仮定しているように)『しつけ』や『社会化』によって、本質的に社会的でない個人に社会的規範を付加していくとはみないのである。エリクソンによれば、社会は、人間が漸成的な発達において各段階特有の課題を解決していく方法に影響を与えることで、彼をその社会の一員とするのである。」^{注21}と述べている。

また西平は、エリクソンのライフサイクル・チャートについて「エリクソンの、よく知られたライフサイクル・チャートの8段階のうち、前半五つはフロイト理論から、後半三つはユング理論から、借り受けたものであるとの指摘は、以前から何度か耳にしていた。しかし、そんなに簡単に、接木できるものなのかどうか。

実は、エリクソンはフロイトからはいくつかの用語を受け継いだものの、根底のところでは、かなりユングに近いのではないか。むしろ、ユングのいう個性化を、ライフサイクルの問題として論

じ直したのではないか。個性化を、生涯全体にわたるプロセスとして展開し、同時に人生を八つの段階に分け、それぞれの場面ごとに特有な、八つの異なる個性化の形を描いたのではないか。」^{注21}と述べている。

つまり、エリクソンの人格のとらえかたは、根底には社会的人間としての性質を遺伝子レベルで備えており、それが社会という環境と相互に影響しあいながら社会的人間として開花していくものであると考えられる。

3. 2. 3 人格の発達過程

エリクソンの理論は、心理-社会的な発達段階として8段階を提示している。そして、その各段階に心理-性的な漸成を関係づけることによって、自我の漸成的研究の基礎をつくりあげた。

また、エリクソンは、ライフサイクルの各段階にはその段階において解決しなければならない固有の発達の課題があるとした。そして各段階における課題の解決は、その前の段階で準備され、その後の段階ではさらにすすんだ解決がなされる。

さらにエリクソンは、各段階における課題解決の成功と失敗の両極端を記述しているが、実際の結果は両極端の均衡であるといえる。エリクソンの提示したライフサイクルの8段階とそれぞれの発達課題、および成功と失敗の両極端について岡堂は図3^{注22}を提示している。

またエリクソンは、漸成図式として図4を示し、用語について以下のような説明を行っている。

「誕生から死に至るまでの心理・社会的発達の諸段階の継列を再述するにあたって、まずジョアン・エリクソンと私が各段階に付した、希望 (hope)、忠誠 (fidelity)、世話 (care) といった誤解を受けやすい用語について説明しておく必要があるだろう。これらは、三つの主要人生段階における同調傾向 (syntonic tendencies) と失調傾向 (dystonic tendencies) の葛藤から現れる心理・社会的な強さを表すものである。希望は、乳児期における基本的信頼対基本的不信 (basic trust vs. basic mistrust) の対立の中から現れ、忠誠は青年期における同一性対同一性混乱 (identity vs. identity confusion) の対立から、世話は成人期における生殖性対自己耽溺 (generativity vs. self-absorption) の対立から現れるものである (この vs. は『～対～』(versos) の意味であるが、対比される二つの特性には或る相補性があり、『～とその逆の～』(vice versa) という意味もこめられている)。これらの用語の多くは次のような主張、つまり希望や忠誠や世話は、若者には世代継承的

サイクルに参入する『資格』を与え、成人にはそのサイクルを完結する『資格』を与えるいくつかの基本的資質を表わしている、という主張と無関係ではない。」^{注23}

つまりこれらの用語は、発達段階において新しい段階に参入したり、今いる段階を終わらせたりする事に必要な「資格」を与える幾つかの基本的資質を表している。また、各々の段階は一方向にだけ関係を持っているのではなく、各々の段階が各段階で高次の (まだ発達途上の) または低次の (すでに発達し終わった段階) にも新しい意味を付け加えている。

そしてまたエリクソンの示した図式は、水平の欄と垂直の欄は相互に関係しており、(ある特性の) 初期状態やその後必然的に生じる後期の結果と発達の深く関連している。

さらにエリクソンは発達図式における最後の段階である老年期についておおよそ次のように述べている。

老年期の失調要素は「絶望」であり、最初の幼児期の同調要素は「希望」である。これは、絶望と希望の間に橋が架けられているという事でもある。「希望」という特質が無ければ人生が始まる事も、意味を持って終わる事もありえないのである。そして、図左上隅の希望の最終形態は「信仰」と名づける事が相応しいと考えられる。

また、ライフサイクルが最後の段階で再び最初の段階へ回帰するとすれば、成長した希望の骨格は信仰の中などに、それを子供のなものとして認識する何かが残されている。これは、最後の段階は最初の人生段階でも大きな意味を持っているということでもある。事実、活力ある文化の中で子供は老人との出会いによって思慮深さを学んでいく。

しかし、老年期が長期化し、長い老年期を多くの人が経験することとなった現在、新しく活力ある儀式化が必要になる。この儀式化は明確な「締め括りの感覚」と死に行く事への積極的な予期と準備を提供する。そして、人生の始まりと終わりとが意味深くつながりあえるものでなくてはならない。これら全てを表すものとしても「英知」や「絶望」という言葉を使用するという事は妥当なことである。

つまり、人生の最後の段階において、人生のすべてを統合し、英知を持って次の世の希望へとつなげることが「信仰」となるのではないだろうか。

3. 2. 4 健康な人格

上記のように、エリクソンは人生の八つの発達

表2 エリクソンの人間発達漸成論における作業仮説表

発達段階	心理-社会的課題と危機	基本的徳目(活力)	重要関係の範囲	社会的秩序の関連要素	心理-社会的モダリティ	心理-性的段階(フロイト)
I	基本的信頼感と不信感	希望	母性	宇宙的秩序	得る、お返しに与える	口唇・呼吸器的、感覚・筋肉運動的(取り入れモード)
II	自律感と恥、疑惑	意思	親	「法と秩序」	保持する放出する	肛門・尿道的、筋肉的(把持-排泄的)
III	主導感と罪悪感	目的	基本家族(親・同胞との関係)	理想の原型(手本)	作る(求める)、「～のように作る」(あそび)	幼児・性的的、移動的(侵入-包含的)
IV	勤勉感と劣等感	コンピテンス	「近隣」・学校	技術的要素(原則)	ものを作る(完成する)、ものを結びつける	「潜在期」
V	アイデンティティとその拡散	忠誠	仲間集団・外集団、リーダーシップのモデル	イデオロギー的展望	自然に振舞う(振舞えない)、活動を共有する	思春期
VI	親密感と孤独感	愛	友情、性愛、競争、協力の関係におけるパートナー	協力と競争の模範	存在を作る、世話する	性器期
VII	生殖感と沈滞感	世話	分業と家事の共有	教育と伝統の思潮	あるがままに存在する、非存在(死)に直面する	
VIII	統合感と落胆	英知	「全人類」「わが一族」	知恵		

エリクソンは語る アイデンティティの心理学 R.I.エヴァンス 新曜社 1996 より作成

表3

発達段階	A 心理-性的段階(フロイト)	B 心理-社会的課題と危機	C 重要関係の範囲	D 基本的強さ	E 中核的病理 基本的な不協和傾向	F 関連する社会的秩序の原理	G 統合的儀式化	H 儀式主義
I 乳児期	口唇-呼吸器的、感覚-筋肉運動的(取り入れ的)	基本的信頼感 対 不信感	母親の人物	希望	引きこもり	宇宙的秩序	ヌミノース的	偶像崇拜
II 幼児期初期	肛門-尿道的、筋肉的(把持-排泄的)	自律感 対 恥、疑惑	親の人物	意志	強迫	「法と秩序」	分別的(裁判的)	法律至上主義
III 遊戯期	幼児-性的的、移動的(侵入-包含的)	自主性 対 罪悪感	基本家族	目的	制止	理想の原型	演劇的	道德主義
IV 学童期	「潜在期」	勤勉性 対 劣等感	「近隣」・学校	適格	不活発	技術的秩序	形式的	形式主義
V 青年期	思春期	同一性 対 同一性混乱	仲間集団・外集団、リーダーシップの諸モデル	忠誠	役割拒否	イデオロギー的世界観	イデオロギー的	トークリズム
VI 前成人期	性器期	親密 対 孤立	友情、性愛、競争、協力の関係におけるパートナー	愛	排他性	協力と競争のパターン	提携的	エリート意識
VII 成人期	(子孫を生み出す)	生殖性 対 停滞性	(分担する)労働と(共有する)家庭	世話	拒否性	教育と伝統の思潮	世代継承的	權威至上主義
VIII 老年期	(感性的モードの普遍化)	統合 対 絶望	「人類」「私の種族」	英知	侮蔑	英知	哲学的	ドグマティズム

ライフサイクル、その完結 E.H.エリクソン みすず書房 1996 より作成

段階を経る中で、同調傾向と失調傾向の葛藤を繰り返す、その中で心理・社会的な強さを獲得していく、または開花させていくと考えていた。つまり、希望、意志力、目的意識、適格意識、忠誠心、愛の能力、世話、英知という強さを獲得していくことが健康な人格を発達させていくことであると考えられる。

そして、岡堂は健全なパーソナリティを論ずるときのがかりの役目を果たすものとして表2「エリクソンの人間発達漸成論における作業仮説表」を提示している。またエリクソンは、表3を提示している

3. 2. 5 理論の目指すもの

エリクソンの理論が目指すものを人格の統合と考えるならば、究極の目的は、英知を持って死を受容し、次の世界と世代への希望を持つということになると考える。

つまり、エリクソンは、人生のその目標に向かって、いかに、どのように生きるかを見出し、生きていく葛藤のなかから強さを獲得していくための地図を描こうとしたのではないだろうか。

3. 2. 6 理論の特徴

エリクソンの理論は、心理-社会的な諸段階を八つの段階に規定し、人格発達をライフサイクルの各段階で葛藤と混乱を経て形成されていくアイデンティティの問題としてとらえている。

つまり、人生の各段階において解決しなければならぬ固有の発達課題があり、その課題を達成することにより、人間としての強さを獲得していくとしている。そして、人間は漸的に発達を遂げ、その強さによって次の世代や世界へつながっていくと考える特徴をもっているととらえられる。

3. 3 マズローの理論

3. 3. 1 理論構築の背景

シュルツは、マズローが幼少のころ、彼は貧しく孤独で不幸であったことが彼を慰めのための本や勉強に向かわせたとしている。彼は、1908年4月1日にニューヨーク・ブルックリン地区のスラム街で、貧しい樽屋の息子として生まれた。7人兄弟の長男であり、兄弟が多かったために、叔父の家に引き取られて育った。その後、父の仕事が軌道に乗り、中流階級の仲間入りをするが、そこでもまた、ユダヤ人であるがために様々な差別を体験することになる。

しかし、ブルックリン・ボローハイスクールにおいて才能を発揮するようになり、多くの学友の尊敬を受けるようになる。

その後、父のすすめで法律を学ぶが、人を悪く見たて、人の罪悪を扱うことが彼の思想的立場と合わず、コーネル大学やウィスコンシン大学で心理学を学ぶようになる。

20歳のとき彼の人生を広げることになった二つの出来事があった。そのひとつは結婚であり、もうひとつはワトソンの行動主義心理学への入門である。ウィスコンシン大学でマズローはハーロウの指導のもとにサルの実験を行い、しばらくの間行動主義の道具や原理の適用に熱心に取り組んでいた。その後フロイトや他の哲学者の著作に触れ、自分の子供の誕生によって彼の行動主義に関する考え方は覆されることになる。

彼の思考を形作ってきた経験は、抽象的な理論的アイデアでもなければ、分析的研究による発見でもなく、きわめて感情的、個人的出来事である。そして特に重要な経験として、結婚（それ自体がひとつの学校である）、父親になったこと、多数の著名な先生方に対する尊敬と愛情をあげている。

そして、また、マズローが自己実現について研究するに至った経緯には彼の個人的、直接的なことが関与している。つまりマズローが自己実現についての先駆的な研究を手がけるきっかけになったのは、ゲシュタルト心理学者のマックス・ヴェルトハイマー (Max Wertheimer 1880-1943) と人類学者のルース・ベネディクト (Ruth Fulton Benedict 1887-1948) との出会いと彼らへの興味である。

彼らはマズローに人間性の最も優れたものを研究し、人間に到達できる最高段階を理解しようとする強い欲求を起こさせることになった。そして、彼らはまさに人間の最高段階がいかに偉大なものであるかを示す最初のモデルを提供することになった。

その後マズローは、友人や著名な人物、学生などから精神的健康性のモデルになると思われる49人を選び、様々な技法を用いて研究を行った。そしてその結果、人間はすべて、本能性の欲求をもって生まれているとの結論に達することになる。

3. 3. 2 人格のとらえ方

マズローの研究の最高の目標は、人間が最大限の発達や表現をするのに、どの程度潜在的な能力をもっているかを知ることであった。つまり、人間性の病理的側面をみるのではなく、健康な側面に焦点をあてたのである。それは心理学におけるパラダイムシフトであるといえる。そして、マズローは、動機づけ理論を基盤として、以下に述べる本能としての基本的欲求、欲求の階層、高次の

欲求を見出している。

①本能としての基本的欲求

マズローは、人間はすべて自己実現しようとする生まれつきの意欲または傾向を持っているとしている。また上田によれば、マズローは人間における広義の本能を以下の事実に見出しているとしている。

- a. 人間自身に、成長し、自己実現をとげようとする固有の傾向が存在する。
- b. 心理治療者、特に精神分析医の経験から出た事実である。(分析医の経験では、ある特定の欲求の場合、それが満たされないと病気になるが、またある欲求の場合は、たとえ不満があっても、病気にはならない。しかしある欲求の満足は健康をもたらすが、別の欲求満足は健康をもたらすことがない。しかも前者の場合には、いかなる代理物でも代償価をもたず、行動についても外から生じた事情と考えるよりも、それ自体疑問の余地のない出発点として解釈したほうがよく説明がつく。…このような事実は人類一般が持つ性質特性、身体構造、遺伝的素質と考えたほうが説明がつく。)
- c. 人間性に関する力動論の発展が本能説のもつ長所をクローズアップさせた。
- d. 本能を根本的に善と考える立場に立っている。
- e. 人間の本能は、本能以外の行動要因と密接に結びついており、完全な本能と完全な非本能とを峻別できない。
- f. 本能は理性や知性と対立するものではなく、本質的に共働するものである。
- g. 食欲や性欲といった低次欲求にとどまらず、

むしろ愛情欲求や尊重欲求、知識や美を求めるといった高次の欲求に本能的特質を見出している。

②欲求の階層

マズローはさらに上記の欲求が階層をなしているとしている。つまり、自己実現を達成するための先決条件は①生理的欲求、②安全欲求、③所属と愛の欲求、④尊重の欲求、であるとしている。そして人間は同時に五つの欲求すべてによって動機付けられるものではなく、あらゆる特定の瞬間には、ただひとつの欲求のみが支配的である。以下に五つの欲求について検討する。また要約したものととして図5^{注25}を示す。

a. 生理的欲求 (physiological needs)

生理的体系としての自己を維持しようとする欲求であり、具体的には食物、水、空気、休養、運動などに対する欲求である。

b. 安全欲求 (safety-security needs)

安全な状況を希求したり、不確実な状況を回避しようとしたりする欲求である。

c. 所属と愛の欲求 (belongingness-love needs)

社会的欲求 (social needs) ともいわれ、集団への所属を希求したり、友情や愛情を希求したりする欲求である。

d. 尊重欲求 (esteem needs)

自己尊厳を希求する欲求であり、具体的には、他人からの尊敬や責任ある地位を希求したり、自律的な思考や行動の機会を希求したりする。後者は、とくに自律欲求 (autonomy needs) として、独立に考えられることもある。

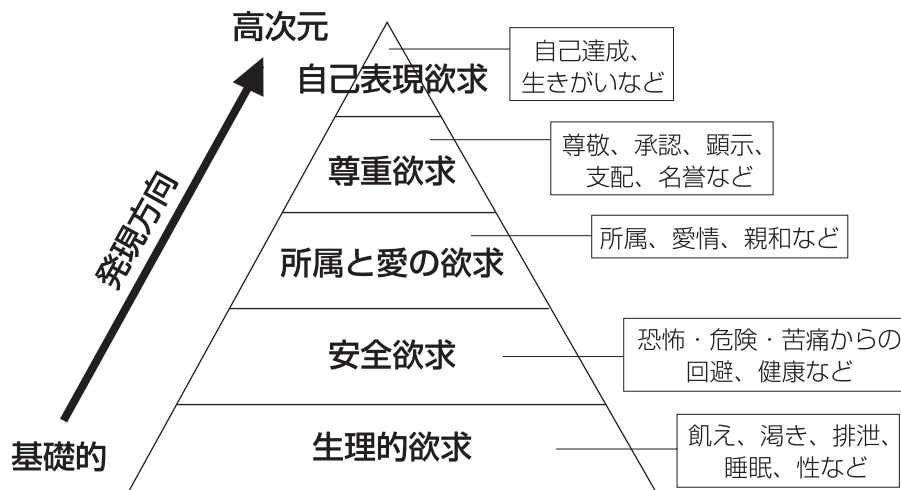


図5 マズローの5段階欲求階層

注25 「生きがい」とは何かー自己実現へのみち 小林司 NHKブックス597 日本放送出版協会 1995 p.119より作成

e. 自己実現欲求 (self-actualization needs)

心理学基礎用語集には、「自己実現とは、自分の能力を十分に発揮し自分に備わった可能性を最大限に現実のものとするをいう。」^{注24}と記されている。よって、自己実現欲求は自己の成長や発展の機会を希求したり、自己独自の能力の利用および自己の潜在能力の実現を希求したりする欲求であるといえる。

人間は、上記の尊重欲求までの四つを満たされたとき、最高の欲求によって動かされる。これについてシュルツは「自己実現は、われわれの能力の最高の発達と活用、すべての資質や力量の発揮として規定される。たとえ低次の欲求が満たされても―われわれが身体的にも情緒的にも安定感を持ち、所属や愛情の感覚を保持し、自分を価値ある人間と感じたとしても―自己実現の欲求を満たすことができなければ、挫折と不安と不満足を感じざるであらう。もしもそのようなことになれば、自分の心を平静に保つことができず、精神的に健康ということができないのである。」^{注25}と述べている。

また、マズローは上記の第一の欲求階層に付随するものとして第二の欲求階層を提案している。それは知る欲求と理解する欲求である。人間は自分のおかれた周囲の世界を知り、理解することがなければ、これと有効に対応し、安全、愛情、尊重、実現を獲得することもできないのである。

このように、自己実現は第一次の基本的欲求階層の欲求と知る欲求、理解する欲求とが絡まりあって達成されていくものである。そして、生命に直結する欠乏欲求が満たされ、高次の成長欲求が人格を支配するとき、はじめてその人格は、自己実現をとげたということができるのである。

③高次動機 (成長動機)

前述したように、マズローは自己実現する人々を動かすものとして高次動機の存在を指摘している。

そして、欠乏動機と成長動機は欲求階層論における各欲求の関係とは異なり、質的に異なった以下に示す特質がある。

a. 衝動について、欠乏動機が衝動を否定する態度を示すのに対し、成長動機は衝動を肯定する立場に立つ。

b. 満足の結果について、欠乏動機の場合は一応の緊張解消で終わるが、成長動機の場合は、満足は、ますますその衝動を高める形をとる。

c. 自我の意識に関して、欠乏動機の場合は自己の欲求満足を中心にこれとかかわりをもつ範囲のこ

とがらに強い関心もたれるが、成長動機においては、自己の利害とは関係なく、もっぱら外界の事実をありのままにとらえ、しかもその課題に傾倒することができる。

学習に関しては、欠乏動機の支配的な人格では、欠乏動機の満足を達成する手段として学ぶことをするが、成長動機の支配的な人格では、学習は洞察、発見、創造の意味をもつ。

また、上田は、高次段階にある人が目標とするB価値とそれらが満たされない事態に置かれた条件、その結果としての高次病の症候群をまとめて表4を示している。

3. 3. 3 人格の発達過程

マズローは自己実現について、「自己実現は人格の発達と考えることができるが、それは人が未発達からくる欠乏の問題や、人生における神経症の(あるいは小児的、空想的、無益、「非現実的」)問題から脱却し、人間生活の「現実」の問題(それは本質的、究極的に人間の問題であり、避くべからざる「実存」の問題で、これに対しては完全な解決はあり得ない)に立ち向かい、これに耐え、これと取り組むことができるようになることである。つまり、自己を実現するということは、問題がなくなることでなくて、過渡的あるいは非現実的な問題から、現実的な問題へと移ることである。つまり、人間性のもつ『欠陥』を否定するのではなく、それと立ち向かい、勇気をもって受け容れ、これに甘んじて楽しみさえ見出すというのと、ほとんど同じだからである。」^{注27}と述べている。また、「最高の動機は動機づけられるものでもなければ、努力すべきものでもない。」と述べている。つまり、言い換えればシュルツが言うように「自己実現する人たちは努力するのではなく、発達するのである。」^{注28}ということが出来る。

上記のことからマズローの理論における人格の発達過程は、まずは基本的欲求を満たすプロセスの中で、より上位の階層の欲求に動機づけられ、発達していくものである。そして、基本的欲求が満たされたとき、高次動機が生じてくる。それは満たされればさらに強くなる欲求であり、人は常に動機づけられ人格は生涯発達し続けるといえる。

3. 3. 4 健康な人格

マズローの理論における健康な人格をもった人間とは、高次に動機付けられている人間である。そして彼らは、①現実についての有効な認知、②自然、他人、自分自身についての全般的な受容、③自発性、純真と自然性、④自己の外にある問題に対する熱中、⑤プライバシーや独立に対する欲求、

⑥自律的機能、⑦不断の斬新な鑑賞眼、⑧神秘的経験あるいは「至高」経験、⑨広く深い社会的関心、⑩親密な対人関係、⑪民主的な性格構造、⑫手段と目的の区別、善悪の識別、⑬敵意のないユーモアの感覚、⑭創造性、⑮文化受容に対する抵抗、といった特徴をもつ。しかし、自己実現者はすべてにおいて完全なわけではない。彼らは、時には健康な人格ではない人々との共通する特徴(愚かで、思慮が浅く、頑固で腹を立てやすい、独善的で冷酷、気まぐれなど)をもつ。しかし、その不完全さは、健康な人のほうが、健康度の低い人よりは経験する度合いがはるかに少ない。以下に高次に動機付けられている人間の15の特徴を概説する。

①現実についての有効な認知

自己実現する人は、自らをとりまく外界の対象

や人々を客観的に認知する。マズローはこの客観的認知を存在、またはB認知と呼んだ。つまり、健康な人格をもった人は外界をこうあってほしいとか、こうあるべきという枠組みをもってみるのではなく、ありのままの姿で見ようとする。よって、健康な人格をもった人は人を正しく判断し、その的確な認知は芸術や科学、政治など様々な方面に及ぶ。そしてその判断は流行や、権威者に依存するのではなく、自分自身の判断や認知にのみ準拠している。

②自然、他人、自分自身についての全般的な受容

自己実現する人は、自分自身の欠点や長所を受け入れ、不平や悩みを持たない。彼らは、自分の性質をあるがままに受け入れられるのである。

しかし、自己実現者も自分や他人のうちにある怠惰、無思想、嫉妬、偏見、羨望といった改善可

表4 高次段階にある人が目標とするB価値とそれらが満たされない事態に置かれた条件、その結果としての高次病の症候群

価値	欠乏	個々の病理現象
1 真実	虚偽	不信、疑い
2 善	悪	利己主義、憎しみ、ニヒリズム
3 美	醜さ	俗悪、無趣味、荒廃、粗雑
4 統合性	混乱	バラバラで統一のないこと
5 二分法の超越	結合の喪失	まとまりのないこと
	黒か白かの二分法	オール オア ナッシング あれかこれかの考え方
	両極性	すべてを対立的に見る考え方
6 躍動	二者択一	自己を完全に決定されていると感ずる
	生き生きとした	生きがいの喪失
	生氣のないこと	
7 独自性	画一的	個性の感覚の喪失、匿名性
	代理可能性	
	同質性	
8 完全性	不完全性	まやかし、だらしないこと
	欠陥	
9 必然性	偶然矛盾	前途が混沌としていて予測できないこと、不安、警戒心
10 完成・終局	未完成	まだ完成できないとの感情、焦燥、あきらめ
11 正義	不正	義憤、不信、無法
12 秩序	権威の崩壊	不安定、油断のならない状態、警戒、用心、緊張、監視の必要性
	混乱	
13 単純	錯雑	混沌、はなはだしい複雑さ、紛糾
14 豊かさ	貧困	不景気、沈滞
15 無為		緊張、努力、硬直、ぎこちなさ、不器用
16 遊び		不機嫌、ゆううつ、楽しむ能力の欠如
17 自己充足	偶然性	行きあたりばったり、責任回避、他人まかせ
18 意味	無意味	無意味感、人生に対する無感覚

注26：人間の完成—マズロー心理学研究 上田吉一 誠信書房 1994 p.82の表により作成

能な欠点に悩まされる。それは、前記の弱点が完全な人間の成長や表現を妨げるからである。

③自発性、純真と自然性

自己実現者は、人生のすべての面において、解放的であり、率直な方法で振舞い、見せかけの行動はとらない。つまり、自分の天性に従って行動している。しかし、他人に対しては思慮深く思いやりを持っている。つまり、自然で率直な意見が他人を傷つけるかもしれない場合や、些細な問題にすぎない場合は一次的に自らの感情をコントロールするのである。一方、彼らにとって大切だと考えられていることがらに支障をきたす場合は、躊躇することなく社会的習慣を否定する。

④自己の外にある問題に対する熱中

マズローが研究対象とした人たちは、いずれも使命感をもって仕事に傾倒する人たちであった。自己実現者は、強い仕事に対する献身によって、高次欲求を達成し、実現することができる。

彼らは、金銭や名声や権力のために仕事に従事するのではなく、仕事が高次欲求を満たし、能力に挑み、これを達成させるからである。そして、彼らにとって仕事は苦役ではなく、遊びでもある。

⑤プライバシーや独立に対する欲求

自己実現する人は、一歩かけ離れて孤独でいたいという強い欲求をもっている。彼は人間的な接触を避けはしないが、他の人々を求めようにも思われない。彼らは自分の満足のために他人に頼ることがない。よって、孤独を保ち、控えめでもある。つまりこれは、彼らが自分で決断する能力をもち、自分で決定し、自らの動機や基準にもとづいて実施する力があることを示している。

⑥自律的機能

自己実現する人は、もはや欠乏動機に支配されてはいない。つまり、自分の満足のために現実の世界に依存することがない。成長動機の満足は自分自身の内部から生じるものであり、その発達は自分自身の潜在能力や内的資質のもとづいている。

つまり、健康な人格は、自給自足的であり、その高度の自律性はむしろ危機や損失に無関心ならしめる。

⑦不断の斬新な鑑賞眼

自己実現者は、たとえ同じ経験が繰り返されたとしても、常に新鮮なよろこびと恐れ、驚きの感覚をもって感じるができる。つまり、彼らは人生の経験に飽きたり、退屈を覚えたりしない。そして、その結果、彼らは、自分の所有し、経験できるものに感謝の念を持ち続けている。そして彼らのよろこぶ経験とは、往々にして些細な日常

の活動や出来事である。

⑧神秘的経験あるいは「至高」経験

自己実現する人たちは、深い宗教的経験に似た激しい圧倒的な恍惚感、無上のよろこび、畏敬の念を経験することがある。マズローが健康な被検者に共通して見出したこの至高経験のあいだ、自我は超越し、人は、自分が達成したり成長したりできないものは何もないのだという力強い信頼と決意の感覚にとらえられる。この至高経験の強弱により、マズローは自己実現者を「非至高者」と「至高者」の二つのタイプに分けた。「非至高者」は実践的な人である傾向が強く、「至高者」は、時として聖人のように見え、より神秘的、詩的、宗教的であり、美に対して敏感であり、改革者や発見者となりやすい傾向を特徴としてもつ。

⑨広く深い社会的関心

自己実現者は、人類のために役立ちたいという願望と同時に、あらゆる人間に対して、深い共感と愛情の心をもっている。彼らは人類という家族のようである。

⑩親密な対人関係

自己実現者は、平均的な精神的健康をもつ人と比較して、より親密な人間関係を結ぶことができる。しかし、その数は非自己実現者よりも少ない。

自己実現者が、他人に感じる愛情は欠乏愛（D愛情）ではなく、存在愛（B愛情）である。つまり、欠乏によって動機づけられたものではない。

⑪民主的な性格構造

最高に健康な人は、社会階級、教育水準、政治的宗教的帰属、人種、皮膚の色の如何を問わず、すべての人と交わり、これを受け入れる。このような差異は、自己実現者にとって問題ではない。マズローは、彼らがめったにこれらの差異に気づいていないと考えた。

⑫手段と目的の区別、善悪の識別

自己実現者は、手段と目的をはっきりと区別している。彼らにとって目的、目標はそれらに到達する手段よりも重要である。しかし、自己実現者においては、非自己実現者が手段と考えていることが目的となることがある。つまり、自己実現者にとって、手段がそれらのもたらす楽しみや満足ゆえに目的となるというのである。

また、自己実現者は、明確な倫理的、道徳的基準をもち、どんな状況においても、その基準を堅持する。

⑬敵意のないユーモアの感覚

それほど健康ではない人は3種類のユーモアで笑う。それは、①誰かを傷つけるような敵意を

もったユーモア、②他人や他の集団の劣等性に乘ずる優越感を持ったユーモア、③エディプス状況やみだらなことに関する権威反抗的なユーモアである。

一方、自己実現者のユーモアは、哲学的である。それは、笑いを誘うと同時に何か指摘することを意図した教訓的なものであることが多い。そして、微笑を誘う程度のものである。

⑭創造性

創造性は、人が自己実現しつつある人に求める特徴である。マズローはこの創造性を、子供のもつ素朴な創意や想像性、ものごとをまともに素直に見るとらえ方にたとえている。創造性は態度の問題であり、精神的健康性の表現でもある。

⑮文化受容に対する抵抗

自己実現者は、自己充足的であり、自律的である。特定の様式で考えたり、行動したりすることを強要する社会的圧力に抵抗することができる。個人的重要性をもつことに重要な問題が起こったときは、彼らは、はっきりと、社会のルールや規範に挑戦する。しかし、彼らが些細なこととみなしていることについてはまったく習慣に従っている。

3. 3. 5 理論の目指すもの

マズローが目指す最高の精神的健康は自己実現である。マズローは自己実現者のその特徴を明確にし、欲求を段階的に充足していく意味を強調したのではないかと考える。人は一気に自己実現するものではなく、欲求の階段をひとつずつ登ることにより人格を発達させ、自己実現へ向かうのではないかと考える。この理論が目指すものは、人間の最高価値の発揮である。

3. 3. 6 理論の特徴

この理論の特徴は、マズローが自己実現しているのとらえた人たちの状況を分析するなかから見出したものである。その中から欲求と動機づけの観点からそれを階層化し、欠乏欲求と成長欲求に分類している。そして高次欲求と高次病の概念を提示している。

3. 4 ロジャーズの理論

3. 4. 1 理論構築の背景

ロジャーズは厳格な家庭の6人兄弟の4番目として生まれた。ロジャーズは両親のことを「両親は私たちの世話をよくみてくれ、いつも子どもたちの幸福を心がけていました。また私の両親は、微妙な愛情のこもったやり方で子どもの行動をきつく拘束していました。」^{注30}と語っている。この

両親の宗教的教えは少年期、青年期を通じて彼をしっかりと拘束していた。

大学はウィスコンシン大学の農学部へすすむが、在学中の学生宗教会議に参加するなかで彼の志望は、農学者から牧師へと変化する。そして、中国で行われた世界キリスト教学生連合会議 (World Student Christian Federation Conference) に参加する機会を得ることとなる。

中国での異文化の人たちとの体験を通して彼は宗教的にも知的にも両親との絆を断ち切ることになる。ロジャーズはこの時期について「ふりかえってみますと、他のいかなる時期にもましてこの時期にこそ私は一人の独立した人間になったと思っております。」^{注31}と述べている。

そして、ユニオン神学校での体験をとおして自分自身の人生観に従って歩むようになる。つまり、これらの経験を通してロジャーズが獲得した自分の経験に対する信頼が、その後の人格研究の基礎となったと考えられる。

3. 4. 2 人格のとらえ方

ロジャーズは、人格転換の援助を求めている人たち、つまり問題を持った人たちを取り扱ってきた。彼はこれらの問題をもった人たちを来談者と呼び、人格変容の主な責任を治療者におくのではなく、来談者自身におく治療法(来談者中心療法)を発展させた。

そして、彼は、来談者中心療法によるサイコセラピーを受けた後にみられる人間の三つの特徴を以下のように示している。

①このような人間は自分の経験に開かれているだろう。(open to his experience)・・・自分の経験に開かれている人間の場合、有機体内部に起こる、あるいは環境から起こってくるすべての刺激は防衛機制によって歪曲されることなく神経組織を通じて自由に中継される。そして、その刺激を生き (living it)、そして完全にそれを意識するようになる。

②十分に機能している人間は実存的に生きるであろう。・・・自分の経験に十分に開かれている(まったく防衛のない)人間は、「次の瞬間にわたくしがどのような状態にいるのか、どのように行動するのかはその瞬間から生まれてくるのであり、だから先のことはわたくしにも他人にも予測することはできない」ということを自覚している。

③自分の経験に十分に開かれている人間は、有機体が個々の実存的状況において最も満足すべき行動に到達するためには、自分の有機体が信頼すべき手段であることを発見するであろう。……

彼はまさにこの瞬間に「正しいと感じられた」ことをするであろうし、そうすることは一般に行動を導く有能で信頼できるガイドであることに気づくであろう。

またロジャーズは、上述したように人が自分自身の人格の変容に対して責任をもち、その能力があるのだとすれば、人は意識的であり、理性的な存在でなければならない。つまり、人は自分自身や自分をとりまく外界について意識的認知によって導かれるのであり、無意識的な力によって導かれるのではない。そして、人の最終的な基準は自分自身の意識的経験であり、その経験が知的情緒的な枠組みをつくり、人格は其中で成長をつづける。ロジャーズによれば、幼少期の経験は重要であるが、それに支配されることはない。過去の経験は自分が現在を見るあり方に影響しているのである。よって、現在と、それを自分自身がいかにかみで認識するかが、健康な人格にとっては過去よりもずっと重要であるといえる。

3. 4. 3 人格の発達過程

ロジャーズは、人格体系において、単一の動機（ひとつの基本的な欲求）を設定している。それは、個人のあらゆる側面を維持し、実現し、高めようとするものである。そして、その傾向は生得的で、成長の生理的・心理的構成要素を包含している。

しかし、ロジャーズは生物学的水準では健康な人と不健康な人をなんら区別していない。一方心理学的側面では違いが現れてくる。

シュルツは、自己の発達について「人は年齢が増すにつれ、自己が発達し始める。同時に実現における強調は生理学的なものから心理学的なものへ移る。身体およびその特定の形態や機能が大人の発達水準に達したとき、成長はその人格に集中する。ロジャーズはこの移行がいつ生ずるのか明らかにしていないが、彼の著作から、それが幼年期にはじまり、青年期に完成すると推定してよいであろう。

いったん自己が出現しはじめると、自己実現への傾向が現れる。この生涯にわたって持続する過程は、人の一生において最も重要な目標である。自己実現は自分自身になる過程であり、その人独自の心理学的特徴や可能性を発達させる過程である。人間は創造しようとする生得的衝動をもつが、最も創造的産物は自分自身である。その目標は心理学的に病気の人よりも健康な人によってはるかによく達成されると、ロジャーズは信じている。」

と述べている。

注32

また、その発達の過程を小林は、以下のように要約している。

「赤ちゃんは初めは肯定的な尊重(反対せずに尊重する配慮)を求める欲求を発達させる。つまり、大人たちに愛情を求めるようになる。しかしそのうちに、他者の態度には直接には影響されない、自己に対する肯定的な態度(自己配慮)になってくる。この自己配慮がはっきりした形をとり始めると、当然に個人の経験のうちには事故配慮に値しない部分と値する部分が出てくる。つまり、その個人は価値づけをできるようになったのである。ある経験がその生体を維持したり強化したりするものとして知覚されると、肯定的な価値を与えられるが、(不快)に知覚される経験には否定的な価値を与え、こうして価値づけの過程が始まる。

このようにして自己経験、自己概念の象徴化ができてくると、幼児の経験の一部が『自己』として分化していき、自己実現の傾向も分化して自分なりの価値づけの物差しが次第に発達していく。『自己実現』というのは、人が自分の内部で起こっていることを受容的に意識し、したがって、いつも変化し、複雑さの中で動いていける、ということの意味している。」^{注33}

以上のことをまとめるとロジャーズは、自己実現について以下のように見ていると考えられる。

- ① 自己実現は到達点。完了した段階ではなく過程である。
- ② 自己実現は、困難で苦痛を伴う。
- ③ 自己実現をしている人は、ありのままの自分である。

3. 4. 4 健康な人格

ロジャーズが示す健康な人格は、完全に機能する人間である。そして彼は、以下に示す完全に機能する人間の五つの特定の機能を提示している。

- ① 経験に対して開かれている(防衛的態度なしに、自由に感情や態度を経験できる)。その結果として、人は柔軟になり、生活上の経験をよく受け入れるだけではなく、それらを認知や表現の新しい手段を切り開くために使うことができる。
- ② 実存のあらゆる瞬間を完全に生きている(どの経験も、以前にまったく同じ様式で存在しなかったものとして、斬新に認知される)。その結果、それぞれの経験が表明されるにつれて興奮がみられる。
- ③ 自分の直感を信頼できる(正しいと感じる方法で行動することは、活動の進行を決定するのに最も信頼できる道標であり、理性的または知能的要因よりもずっと信頼できる)。健康な人はすべての

経験に向かって開かれており、それらを十分に生かしているため、すべての関係要因が比較考慮され、場のすべての側面が最も満足できるような決断に達する。

- ④ 自由であると感じている(拘束や禁止なしに自由に選択でき、何でもできると感じる。過去や境遇に支配されない)。健康な人は、この自由や力の感情のために、人生に非常に多くの選択肢を見出し、自分がやりたいことは何でもできると感じる。
- ⑤ 創造的である。上記の特徴から完全に機能している人間は、彼らの存在すべての領域で創造的であり、その創造的 생활の中に自己表現をする。

3. 4. 5 理論の目指すもの

ロジャーズは、人間とは、自分自身の中に、自己理解に向かい、そして自己概念と基本的態度を変容して、自主的行動を発展させていくような果てしない力をもつものにとらえている。そしてもし、純粹性、無条件の肯定的配慮、共感的理解の三つの条件が整えば、その力は限りなく開発されていくとしている。つまり、ロジャーズの理論が目指したのは、本来人間が持っている能力を最大限に発揮することである。そして、ロジャーズは、人間が完全に機能することで、人間の本来もっている力によって誰しもが自己実現する可能性をもっていると考えている。

3. 4. 6 理論の特徴

ロジャーズによれば、精神療法の目的は、個人がこれまでまったく気づいていなかった自分自身の要素や経験の要素を、自分もっていたことに気づくことができるように支援することである。彼は来談者の自己決定を尊重し、来談者の中にある「成長への衝動」を治療の目的とした。

つまり、人間の本来もっている自己実現の傾向を信じ、個人が本来もっている自分自身の力に気づき、自分の力を信じ、成長していくことを支援しようとしたのである。そしてそのために「自分自身であること」と「いま、ここ」という呼びかけをしているところに特徴があるといえる。

4 自己実現の理論研究視点による心理学理論の比較考察

以上自己実現に焦点を当ててユング、エリクソン、マズロー、ロジャーズの理論を検討した。本章では、それぞれの理論を、理論家の個人的背景を考慮し、その理論の根幹にあるものを確認し、今後の応用・発展に資するために、①理論構築の背景、②人格のとらえ方、③人格の発達過程、④健康な人格、⑤理論の目指すもの、⑥理論の特徴

という六つの視点で比較し考察する。

4. 1 理論構築の背景

理論構築の背景として、それぞれの子ども時代、理論構築とかかわりの深いと考えられる体験等の要約を表5に示した。

ユングは、神話、夢、幻想、空想といった自分自身の世界に集中していた。そして、38歳の時に体験した虚無感と自分自身の無意識との対面が、無意識の世界を強く意識する基礎となっている。

エリクソンは、芸術家との交流の深かった母の影響を受け、それが、その後の理論表現の基礎となっている。また、養父が小児科医であったことから、子供が病気から回復していく姿を見ていた体験が発達を見つめる視点に影響していると考えられる。

マズローは貧しく不幸な体験、ユダヤ人であるための差別を体験している。それが、人格者と考えられる人たちへの興味の基礎となったと見ることもできる。

ロジャーズは、自分が感じていた両親からの拘束を自分自身で解き放つ経験が、その後の人格研究の基礎となった。

いずれの場合も個人的体験が、その後の研究や理論構築と深くかかわり、理論構築の基礎となっている。そして、彼らの個人的体験は、複雑な人間の人格を研究する上でのきっかけとなる側面を、彼らに提示したのだとみることができる。

それぞれの背景や出発点が異なっても、それぞれの理論は、人格の成長という目標は同じである。つまり、様々な背景をもちながらも人間は、自己の実現に向けて、常に成長したいと望む特徴を持っているということがこの理論家たちの背景の違いから見出すことができるのではないかと考える。

4. 2 人格のとらえ方

人格のとらえ方として、①理論構築の源泉、②人格の観点の比較表を表6に示した。

理論構築の源泉を、ユングは、患者たちの観察、古代文明の神話や伝説、その象徴や儀式、宗教、錬金術、占星術、透視術の中に求めた。

そして、エリクソンは、彼の臨床的事例から、また、詩歌や民間伝承・風俗あるいは日常生活の知恵から彼の概念を明らかにしている。

マズローは、友人や著名な人物、学生などから精神的健康性のモデルになると思われる49人を選び、様々な技法を用いて研究を行った。

ロジャーズは人格転換の援助を求めている人たち、つまり問題を持った人たちとのかかわりの中

表5 自己実現の観点による心理学理論の比較（1）—理論構築の背景

	ユングの理論 1875～1961	エリクソンの理論 1902～1994	マズローの理論 1908～1970	ロジャーズの理論 1902～1987
子供時代	神経質な両親を持った孤独な一人ぼっちの子どもであった。彼の心は神話、夢、幻想、空想といった自分自身の世界に集中していた。	母の影響で芸術家の空気を吸って過ごし、小児科医の養父の影響で病気になった子どもたちが回復し元気になってゆく姿をみながら過ごしていた。	貧しく孤独で不幸であったことが彼を慰めのための本や勉学に向かわせた。ユダヤ人であるがために様々な差別を体験することになる。	ロジャーズは厳格な家庭の6人兄弟の4番目として生まれた。両親の宗教的教えは少年期、青年期を通じて彼をしっかりと拘束していた。
理論構築とかかわりの深い経験	38歳のとき自分の人生に意味も面白みもないと感じた。そして、無意識と対面する。	少年エリックは、自分の家では、病気になった子どもたちが回復し元気になってゆく姿をみながら過ごしていた。	マズローが自己実現についての先駆的な研究を手がけるきっかけになったのは、ゲシュタルト心理学者のマックス・ヴェルトハイマーと人類学者のルース・ベネディクトとの出会いと彼らへの興味である。	中国での異文化の人たちとの体験を通して彼は宗教的にも知的にも両親との絆を断ち切るようになる。それらのロジャーズが獲得した自分の経験に対する信頼が、その後の人格研究の基礎となった。

表6 自己実現の観点による心理学理論の比較（2）—人格のとらえ方

	ユングの理論 1875～1961	エリクソンの理論 1902～1994	マズローの理論 1908～1970	ロジャーズの理論 1902～1987
理論構築の源泉	ユングの理論は、患者たちの観察、古代文明の神話や伝説を貪欲に読み、その象徴や儀式、宗教、錬金術、占星術、透視術を探求する中から確立された。	エリクソンの資料のほとんどは、彼の臨床的事例から得られている。また、エリクソンは詩歌や民間伝承・風俗あるいは日常生活の知恵から彼の概念を明らかにしている。	マズローは、友人や著名な人物、学生などから精神的健康性のモデルになると思われる49人を選び、様々な技法を用いて研究を行った。そしてその結果、人間はすべて、本能性の欲求をもって生まれているとの結論に達することになる。	人格転換の援助を求めている人たち、つまり問題を持った人々たちを取り扱ってきた。彼はこれらの問題をもった人々たちを来談者と呼び、人格変容の主な責任を治療者におくのではなく、来談者自身におく治療法（来談者中心療法）を発展させた。
人格の観点	ユングは人格を、独立しているが相互に作用しあっている三つの体系としてとらえている。それは①自我、②個人的無意識、③普遍的無意識である。	エリクソンの人格のとらえかたは、根底には社会的人間としての性質を遺伝子レベルで備えており、それが社会という環境と相互に影響しあいながら社会的人間として開花していくものである。	自己実現は第一次の基本的欲求階層の欲求と知る欲求、理解する欲求とが絡まりあって達成していくものである。そして、生命に直結する欠乏欲求が満たされ、高次の成長欲求が人格を支配するとき、はじめてその人格は、自己実現をとげたということができるとある。	ロジャーズは、人格体系において、単一の動機（ひとつの基本的な欲求）を設定している。それは、個人のあらゆる側面を維持し、実現し、高めようとするものである。そして、その傾向は生得的で、成長の生理的・心理的構成要素を包含している。

から人格変容の主な責任を治療者におくのではなく、来談者自身におく治療法(来談者中心療法)を發展させた。

つまり、彼らがその理論構築のために探索した領域は、精神療法を受ける患者やカウンセリングをうける問題を抱えた人たち、友人や学生、そして古代文明の神話や日常生活の知恵にまで至っている。すなわち彼らの探索はそれぞれ違った状況の人たちや伝えられたものに対して行われている。そして、違う対象を取り扱っているからこそ、そこに同じように見出されたことは、より普遍性の高いものであることを示しているといえる。

次に、それぞれの人格のとらえ方をみると、ユングは人格を、独立しているが相互に作用しあっている三つの体系(①自我、②個人的無意識、③普遍的無意識)としてとらえている。

エリクソンは、人格を根底には社会的人間としての性質を遺伝子レベルで備えており、それが社会という環境と相互に影響しあいながら社会的人間として開花していくものであるとしている。

マズローは、人格を、第一次の基本的欲求階層の欲求と知る欲求、理解する欲求とが絡まりあって達成していくものである。そして、生命に直結する欠乏欲求が満たされ、高次の成長欲求が人格を支配するとき、はじめてその人格は、自己実現をとげたということができるのであるとしている。

ロジャーズは、人の最終的な基準は自分自身の意識的経験であり、その経験が知的情緒的な枠組みをつくり、人格は其中で成長をつづけている。

これらは、人間が人という生物の特性として遺

伝子レベルで自己実現へ向かう特性をもっていることをそれぞれに述べているのであると考えられる。

4. 3 人格の発達過程

前節では、人間が人という生物の特性として遺伝子レベルで自己実現へ向かう特性をもっていると考えられることを述べた。しかし、その特性はすべての人間で開花するわけではない。それぞれの条件の下でそれぞれに発達していくと考えられる。人格の発達過程の比較を表7に示す。

発達の過程について、ユングは、個人に内在する可能性を実現し、その自我を高次の全体性へと志向せしめる努力の過程を個性化の過程あるいは自己実現の過程と呼び、人生の究極の目的と考えた。そして、人格の発達を児童期、青年期・早期成人期、中年期、老年期の四つの段階で記述している。

また、意識が優勢になるのは青年期・早期成人期以降であり、中年期に大きな転換期があるとし、この時期から無意識の意識化をはかり、人格のバランスを調整しなければならないことを示している。

エリクソンは、心理-社会的な発達段階として8段階を提示している。また、そのライフサイクルの各段階には、それぞれの段階において解決しなければならない固有の発達の課題がある。そして各段階における課題の解決は、その前の段階で準備され、その後の段階ではさらにすすんだ解決がなされるとしている。

なお、エリクソンの理論について、西平は、前述したように、ユングの理論に近いとし、ユング

表7 自己実現の観点による心理学理論の比較(3) - 人格の発達過程

ユングの理論 1875~1961	エリクソンの理論 1902~1994	マズローの理論 1908~1970	ロジャーズの理論 1902~1987
<p>人格の発達を児童期、青年期・早期成人期、中年期、老年期の四つの段階で記述している。</p> <p>個人に内在する可能性を実現し、その自我を高次の全体性へと志向せしめる努力の過程を個性化の過程あるいは自己実現の過程と呼び、人生の究極の目的と考えた。</p>	<p>心理・社会的な発達段階として8段階を提示している。</p> <p>ライフサイクルの各段階にはその段階において解決しなければならない固有の発達の課題があるとした。そして各段階における課題の解決は、その前の段階で準備され、その後の段階ではさらにすすんだ解決がなされる。</p>	<p>人格の発達過程は、まずは基本的欲求を満たすプロセスの中で、より上位の階層の欲求に動機づけられ、発達していくものである。そして、基本的欲求が満たされたとき、高次動機が生じてくる。それは満たされればさらに強くなる欲求であり、人は常に動機づけられ人格は生涯発達し続けるといえる。</p>	<p>人の最終的な基準は自分自身の意識的経験であり、その経験が知的情緒的な枠組みをつくり、人格は其中で成長をつづける。</p>

のいう個性化をライフサイクルの問題として論じ直したのではないかと述べている。また、理論の目指すところが究極的には両理論とも人生の豊かな完結である。そして、エリクソンは、最終的には英知をもって死を受容し、次の世界と世代への希望を持つことによって第一段階の徳目である「希望」と円環的なつながりを見出している。

マズローは、人格の発達過程は、まずは基本的欲求を満たすプロセスの中で、より上位の階層の欲求に動機づけられ、発達していくものである。そして、基本的欲求が満たされたとき、高次動機が生じてくる。それは満たされればさらに強くなる欲求であり、人は常に動機づけられ人格は生涯発達し続けるといえるとしている。

また、マズローは高次欲求、B価値、高次病の概念を提示している。これらは、ユングが、中年期における大きな転換期を指摘したことと共通するものがある。

ロジャーズは、人の最終的な基準は自分自身の意識的経験であり、その経験が知的情緒的な枠組みをつくり、人格はその中で成長をつづけている。つまり、自分自身の意識的経験に大きな意味を見出している。これはロジャーズの科学観から出発していると考えられる。このロジャーズの科学観について佐々木は、「ロジャーズには、主観が根本的に優位であるという信念がある。科学者であろうが誰であろうが、人間は自分の主観的世界に生きているのであり、科学がどれほど客観的に研究されようとも、それは人間の主観的な目的と選択の結果なのである。」^{注34}と述べている。つまり、ロジャーズは、今ここにいる人間の意識、感じ方にすべての焦点を当てているのである。そして、人は自分自身や自分をとりまく外界について意識的認知によって導かれるのであり、無意識的な力によって導かれるのではないとしている。これは一見、ユングの無意識を強調した立場とは相反しているように見える。しかし、その過程は、ユングの個性化の過程と共通する概念として見ることもできる。

シュルツはユングの個性化した人間について「個性化した人間は、年齢的には中年期以降の人間であり、彼らは、その時期における人格の本質の変化による重大な危機を、無事に乗りきっている。彼らは、幾年かを費やして自らの自己、生活、志望、希望、目標などについて熟考したことであろう。彼らは無意識が外にあらわれてくるのを認めただので、自分の性質のこれまで押さえいていた面を自覚するようになっている。その結果、個性化し

た人間は、高い水準の自己知識を達成している。つまり、意識と無意識、双方の水準における自分自身を知っているということである。」^{注35}と述べている。つまり、この高い水準の自己知識を達成していく過程は、今ここにある自分自身をユングの無意識という概念の表出を手がかりに意識化していく過程と共通すると見ることができる。

4. 4 健康な人格

健康な人格に関する比較を表8に示す。

ユングは、健康な人格についてその特徴を、以下のように示している。

- ① 意識と無意識、双方の水準における自分自身を知っている。
- ② 自分自身の本質を－その強さも弱さも、聖人的側面も悪魔的側面も－受け入れる。
- ③ 人格のすべての側面が統合され、調和をとるようになる。
- ④ 特定の心理的タイプに分類することは不可能である。
- ⑤ すべての側面－異性の特徴、それまで劣勢だった態度や機能、無意識全体－が表現できるようになる。

エリクソンは、①希望、②意志力、③目的意識、④適格意識、⑤忠誠心、⑥愛の能力、⑦世話、⑧英知という強さを獲得していくことが健康な人格を発達させていくことであるとしている。

マズローは、自己実現者の特徴を以下のように示している。

- ① 現実についての有効な認知
- ② 自然、他人、自分自身についての全般的な受容
- ③ 自発性、純真と自然性
- ④ 自己の外にある問題に対する熱中
- ⑤ プライバシーや独立に対する欲求
- ⑥ 自律的機能
- ⑦ 不断の斬新な鑑賞眼
- ⑧ 神秘的経験あるいは「至高」経験
- ⑨ 広く深い社会的関心
- ⑩ 親密な対人関係
- ⑪ 民主的な性格構造
- ⑫ 手段と目的の区別、善悪の識別
- ⑬ 敵意のないユーモアの感覚
- ⑭ 創造性
- ⑮ 文化受容に対する抵抗

そして、ロジャーズは、以下の五つの特徴を示している。

- ① 経験に対して開かれている
- ② 実存のあらゆる瞬間を完全に生きている
- ③ 自分の直感を信頼できる

- ④ 自由であると感じている
- ⑤ 創造的である。

上記に示した33の概念について、比較検討した。さらにカテゴリー化、その構造化を試みた。その結果、以下に示す八つのカテゴリーに集約した。また、構造図を図6に示す。

- ① 愛の能力(親密な人間関係、敵意のないユーモアの感覚、世話、愛の能力)
- ② 開かれた自己(自己の外にある問題に対する熱中、広く深い社会的関心、現実についての有効な認知、経験に対して開かれている)
- ③ 人間としての英知(手段と目的の区別、民主的な性格構造、英知)
- ④ 創造性(創造的である、不断の斬新な鑑賞眼、創造性)
- ⑤ 真の自由(自律的機能、自由であると感じている、自発性、純真と自然性、実存のあらゆる瞬間を完全に生きている)
- ⑥ 深い自己信頼(意識と無意識、双方の水準における自分自身を知っている、自分自身の本質を—その強さも弱さも、聖人的側面も悪魔的側面も—受け入れる、適格意識、自分の直感を信頼できる)
- ⑦ 使命感(目的意識、意志力、プライバシーや独

立に対する欲求、文化受容に対する抵抗、忠誠心)
 ⑧ 全世界・宇宙への信頼と調和(特定の心理的タイプに分類することは不可能である、すべての側面—異性の特徴、それまで劣勢だった態度や機能、無意識全体—が表現できるようになる、希望、人格のすべての側面が統合され、調和をとるようになる、自然、他人、自分自身についての全般的な受容、神秘的経験あるいは「至高」経験)

上記の八つのカテゴリーをさらに図6のように構造化し、最初の段階をその特徴から「人間性の高まり」と命名した。そして次の段階を「天命の認知」とした。これらの段階を経て「全世界・宇宙への信頼と調和」が起こるこの段階がマズローが述べている至高者(超越者)の段階といえる。

4.5 理論の目指すもの

それぞれの理論が目指す自己実現者の状態を表9に示した。

ユングが目指すのは、個性化した人間であり、エリクソンが目指すのは人格の統合である。マズローは人間の最高価値の発揮であり、ロジャーズは完全に機能する人間である。それぞれの命名が、幼いころの体験や個人的体験とかかわり特徴づけられていることが伺える。つまり、それぞれの理

表8 自己実現の観点による心理学理論の比較(4) —健康な人格

ユングの理論 1875~1961	エリクソンの理論 1902~1994	マズローの理論 1908~1970	ロジャーズの理論 1902~1987
意識と無意識、双方の水準における自分自身を知っている	人生の八つの発達段階を経る中で、同調傾向と失調傾向の葛藤を繰り返す、その中で心理・社会的な強さを獲得していく、または開花させていく。	マズローの理論における健康な人格をもった人間とは、高次に動機付けられている人間である。	ロジャーズが示す健康な人格は、完全に機能する人間である。
自分自身の本質を—その強さも弱さも、聖人的側面も悪魔的側面も—受け入れる人格のすべての側面が統合され、調和をとるようになる	希望、意志力、目的意識、適格意識、忠誠心、愛の能力、世話、英知という強さを獲得していくことが健康な人格を発達させていくことである	①現実についての有効な認知、②自然、他人、自分自身についての全般的な受容、③自発性、純真と自然性、④自己の外にある問題に対する熱中、⑤プライバシーや独立に対する欲求、⑥自律的機能、⑦不断の斬新な鑑賞眼、⑧神秘的経験あるいは「至高」経験、⑨広く深い社会的関心、⑩親密な対人関係、⑪民主的な性格構造、⑫手段と目的の区別、⑬敵意のないユーモアの感覚、⑭創造性、⑮文化受容に対する抵抗、	① 経験に対して開かれている ② 実存のあらゆる瞬間を完全に生きている ③ 自分の直感を信頼できる ④ 自由であると感じている ⑤ 創造的である。
特定の心理的タイプに分類することは不可能である			
すべての側面—異性の特徴、それまで劣勢だった態度や機能、無意識全体—が表現できるようになる			

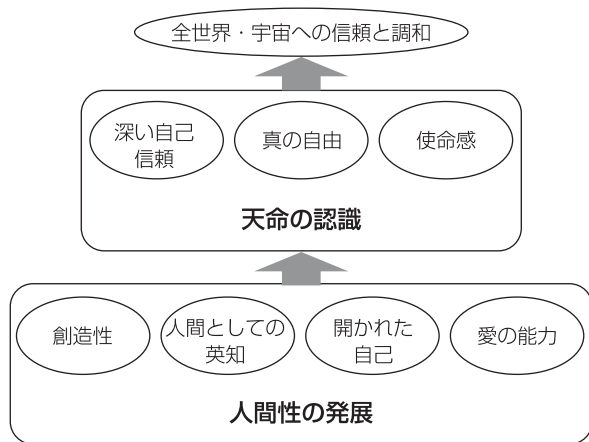


図6 自己実現者の特徴から見た自己実現の高まりの構造

論家が求めるところにより、研究をすすめ、作り上げた理論である。しかし、表現は違っても、その求める究極の姿において、多くの一致を見ることができ。様々なデータや理論との対話の中で、人間の生きる価値を求め、作り上げられた理論であるといえる。そして、前節で述べたように最終的に目指すのは、「全世界・宇宙への信頼と調和」なのだと思える。

4.6 理論の特徴

それぞれの理論の特徴を表10に示し、要約する。

ユングは、人格の発達を児童期、青年期・早期成人期、中年期、老年期の四つの段階で記述している。無意識を強く強調し、無意識を構造化した。また、心的機能を分類し、それらの関係において自己を現実化し、個性化の過程として自己実現を目指している。

エリクソンは、心理-社会的な諸段階を八つの段階に規定し、人生の各段階において解決しなければならない固有の発達課題があるとした。そして、その課題を達成することにより、人間としての強さを獲得していく。

また、人間は漸次的に発達を遂げ、その強さによって次の世代や世界へつながっていくとしている。

マズローの理論は、彼が自己実現しているところから人たちの状況を分析するなかから見出したものである。欲求と動機づけの観点からそれを階層化し、欠乏欲求と成長欲求に分類している。そして高次欲求と高次病の概念を提示している。

ロジャーズは、純粋性、無条件の肯定的配慮、共感的理解の三つの条件が整えば、人間の力は限りなく開発されていくとしている。

彼は来談者の自己決定を尊重し、来談者の中にある「成長への衝動」を治療の目的とした。また、来談者が自分の力を信じ、成長していくことを支援しようとした。そしてそのために「自分自身であること」と「いま、ここ」という呼びかけをしている。

ユングとエリクソンは、発達、成長の過程を重視している。一方、マズローは発達の過程について多くを述べていない。しかし若年者に自己実現者が非常に少ないことを指摘している。ロジャーズは、幼いころや成長過程は重要ではあるが、それらに支配されることはないとしている。現在がどうか、それを自分がどう見ているかがそれよりもずっと重要であるとしている。

5 研究の結論と今後の課題

5.1 研究の結論

本研究では、自己実現の概念を看護に適用するため自己実現に関する心理学の諸理論を比較し、その特徴を明確にすることを目的として、各理論を検討し、比較した。比較の視点は、①理論構築の背景、②人格のとらえ方、③人格の発達過程、④健康な人格、⑤理論の目指すもの、⑥理論の特徴という六つの視点で行い、その特徴を踏まえて、今日的な自己実現の目指す姿を明らかにし、現代社会に適用するための自己実現に関する理論の再

表9 自己実現の観点による心理学理論の比較(5) —理論の目指すもの

ユングの理論 1875~1961	エリクソンの理論 1902~1994	マズローの理論 1908~1970	ロジャーズの理論 1902~1987
個性化した人間	人格の統合	人間の最高価値の発揮	完全に機能する人間
人生の豊かな完結	究極の目的は、英知を持って死を受容し、次の世代と世代への希望を持つ		ロジャーズの理論が目指したのは、本来人間が持っている能力を最大限に発揮することである。

構築を試みた。

その結果、理論の特徴として、ユングとエリクソンは、発達、成長の過程を重視していた。一方、マズローは発達の過程について多くを述べていなかった。しかし若年者に自己実現者が非常に少ないことを指摘していた。また、ロジャーズは、幼いころや成長過程は重要ではあるが、それらに支配されることはないとしていた。そして、現在がどうであるか、それを自分がどう見ているかがそれよりもずっと重要であるとしていた。

さらに本研究では、自己実現者の特徴を比較、検討し、自己実現者の特徴を再構成した。その結果、①愛の能力、②開かれた自己③人間としての英知、④創造性、⑤真の自由 ⑥深い自己信頼、⑦使命感、⑧全世界・宇宙への信頼と調和、の八つのカテゴリーを抽出した。そしてそれらのカテゴリーを構造化し、自己実現の最初の段階を「人間性の高まり」と命名した。そして次の段階を「天命の認知」とし、これらの段階を経て「全世界・宇宙への信頼と調和」の段階に至ると考えられた。

5. 2 今後の課題

本研究では、ユング、エリクソン、マズロー、ロジャーズの理論を比較したが、これらの理論家は、ほぼ同じ時代に生きた人々である。また、日本という文化の中でそれらの理論から見出したものがどこまで適合するのかは不明である。しかし、日

本の社会の状況は、西欧の後を追っている観がある。

また、シュルツは、「健康な人格—人間の可能性と七つのモデル」の日本語版への序においてそこに紹介した心理学者の見解を学ぶことにより、「精神的成長をとげることで、人生を豊かにし、その結果、新しいレベルの自己発展、自己実現、自己超越を達成することができるでしょう。またこれらの考え方をその人生にとり入れることによって、わたくしたち西洋の人間は、東洋の宗教の実践家たちが何世紀にもわたって教えてきた心境に近くようになるのかもしれませんが。」^{注36}と述べている。これらのことを考え合わせると、東洋の知と西洋の知が出会い融合する中で、新たなレベルの自己実現を求めていくことが可能になるといえる。そのために、われわれは、日本の地における文化とそこに潜む知恵を明確にし、生活の中における実践と生きることそのものを支える看護活動へとつなぐ努力を続ける必要がある。看護が人と向き合い生きることを支え、人生の豊かな終結へと支え続けるために自己実現に関する理論を軸とした看護の理論を構築していきたい。

○ おわりに

本研究では、ユング、エリクソン、マズロー、ロジャーズの理論を、自己実現の観点から、その特

表 10 自己実現の観点による心理学理論の比較（6）—理論の特徴

ユングの理論 1875～1961	エリクソンの理論 1902～1994	マズローの理論 1908～1970	ロジャーズの理論 1902～1987
人格の発達を児童期、青年期・早期成人期、中年期、老年期の四つの段階で記述している。	心理-社会的な諸段階を八つの段階に規定している。	マズローが自己実現していると考えた人たちの状況を分析するなかから見出したもの	純粋性、無条件の肯定的配慮、共感的理解の三つの条件が整えば、その力は限りなく開発されていくとしている。
無意識を強く強調した	人生の各段階において解決しなければならない固有の発達課題がある。	欲求と動機づけの観点からそれを階層化し、欠乏欲求と成長欲求に分類している。そして高次欲求と高次病の概念を提示している。	彼は来談者の自己決定を尊重し、来談者の中にある「成長への衝動」を治療の目的とした。
無意識を構造化	課題を達成することにより、人間としての強さを獲得していく。		
心的機能を分類し、それらの関係において自己を現実化し、個性化の過程として自己実現を目指す	人間は漸性的に発達を遂げ、その強さによって次の世代や世界へつながっていく		自分の力を信じ、成長していくことを支援しようとした。そしてそのために「自分自身であること」と「いま、ここ」という呼びかけをしている。

徴を明確にすることを目的として検討した。その比較検討の視点は、①理論構築の背景、②人格のとらえ方、③人格の発達過程、④健康な人格、⑤理論の目指すもの、⑥理論の特徴という六つの視点であり、その特徴を踏まえて、今日的な自己実現の目指す姿を明らかにし、現代社会に適用するための自己実現に関する理論の再構築を試みた。

その結果、①愛の能力、②開かれた自己、③人間としての英知、④創造性、⑤真の自由、⑥深い自己信頼、⑦使命感、⑧全世界・宇宙への信頼と調和、の八つのカテゴリーを抽出した。そしてそれらのカテゴリーを構造化し、自己実現の最初の段階を「人間性の高まり」、次の段階を「天命の認知」とし、これらの段階を経て「全世界・宇宙への信頼と調和」の段階に至ると考えた。そしてこれらは、東洋の宗教的思想に関連していると考えられた。

これらの研究過程をとおして、個々の理論は、理論家個々人の内面と深くかかわり、自己を見つめ、外界との比較検討を行う中で発展してきたと考えられた。そして心理学とは、様々な方法で人間を見つめていく学問である。しかし、その最も基本にあるのは、自分自身を見つめることであり、一人の人間としての自分を追及していくことでもあると深く感じた。限りない人間への関心、生きることへの関心、宇宙への関心、そして自分自身への関心を大切にしていきたい。また、今後、日本という地において、西洋と東洋の文化が融合していく中で、さらに今日的な自己実現に関する研究を進展させ、看護が人と向き合い生きることを支え、人生の豊かな終結へと支え続けるために自己実現に関する理論を軸とした看護の理論を構築していきたい。

なお、本研究に際して心理学博士の永井正直先生から研究の計画、論文の構成まで細部にわたり、温かいご指導をいただいた。また、執筆中も温かい励ましの言葉と共に多くのご助言、ご指導をいただいた。心より感謝申し上げます。

文献

- 注1 21世紀の健康戦略2ヘルスプロモーション－WHO：オタワ憲章－ 島内憲夫（訳） 垣内出版 1990
- 注2 平成15年版厚生労働白書 厚生労働省監修 ぎょうせい 2003
- 注3 基礎心理学X 心理学基礎用語集 八千代出版 加藤義明・中里至正（編）1990

- 注4 完全なる人間－魂のめざすもの－ 誠信書房A.H.マズロー（上田吉一 訳）1979
（Toward a Psychology of Being, D. Van Nostrand Co. Inc. A. H. Maslow, 1962 in USA）
- 注5 完全なる経営 日本経済新聞社 A.H.マズロー（金井壽宏 監訳）2001（Maslow on Management, John Wiley & Sons, Inc. A. H. Maslow, 1998 in USA）
- 注6 前掲 注5
- 注7 健康な人格－人間の可能性と七つのモデル－ 川島書店D. シュルツ（上田吉一 監訳）1982（Growth Psychology； Models of the Healthy Personality, D. Schultz, Litton Educational Publishing, Inc., D. Schultz 1977）
- 注8 前掲 注7
- 注9 前掲 注7
- 注10 ユング心理学入門 培風館 河合隼雄 1967
- 注11 図説 ユング 自己実現と救いの心理学 河出書房新社 林道義 1998
- 注12 前掲 注10
- 注13 前掲 注10
- 注14 魂のライフサイクル 東京大学出版会 西平直 1997
- 注15 心理学と錬金術 C.G.ユング（池田絃一、鎌田道生訳）人文書院1976（Psychologie und Alchemie, C. G. Jung
- 注16 前掲 注7
- 注17 前掲 注14
- 注18 前掲 注14
- 注19 エリクソンの人間学 東京大学出版会 西平直 1996
- 注20 エリクソンは語る－アイデンティティの心理学 R.L.エヴァンズ（岡道哲雄 中園正身 訳）新曜社 1996（Dialogue with Erik Erikson, Richard I. Evans, Harper & Row Publishers, Inc., New York, 1967）
- 注21 前掲 注14
- 注22 前掲 注20
- 注23 ライフサイクル,その完結 みすず書房 E.H.エリクソン（村瀬孝雄 近藤邦夫訳）1996（The life cycle completed a review, E.H.Erikson, W.W. Norton & Company, New York, 1982）
- 注24 前掲 注3
- 注25 「生きがい」とは何か－自己実現へのみち 小林司 NHKブックス597 日本放送出版協

会 1995

注26 前掲 注7

注27 人間の完成－マズロー心理学研究 上田吉
一 誠信書房 1994

注28 完全なる人間－魂のめざすもの A.H.マズ
ロー（上田吉一訳） 誠信書房 1994
（Toward a psychology of Being,
A.H.Msalow, D.Van Nostrand Co. Inc.1962
U.S.A.）

注29 前掲 注7

注30 人間論（ロジャーズ全集12） C.R.ロ
ジャーズ（村山正治訳） 岩崎学術出版
1989

注31 前掲 注30

注32 前掲 注7

注33 前掲 注25

注34 ロジャーズ－クライアント中心療法 佐治
守男 飯島喜一郎編 有斐閣 1989

注35 前掲 注7

注36 前掲 注7

Comparative Study of Psychological Theories on Self-actualization : Application to Nursing Activities

Yasuko Sumitani

Toyama College of Welfare Science
Department of Nursing

This study aimed to compare several theories on self-actualization and to clarify their characteristics in order to apply the concept of self-actualization to nursing activities. In this study, the theories proposed by Jung (C. G. Jung, 1875 – 1961), Ericsson (E. H. Erickson, 1902 – 1994), Maslow (A. H. Maslow, 1908 – 1970), and Rogers (C. R. Rogers, 1902 – 1987) were compared based on the following six subjects: (1) background of theoretical construction, (2) method to grasp personality, (3) development process of personality (4) healthy personality, (5) purpose of theory, and (6) characteristics of theory. Based on the characteristics of each theory, we attempted to clarify the relevant purpose of self-actualization and construct a contemporary theory on self-actualization in order to apply it to modern society.

Jung and Ericsson ha. attached importance to the development an. growth process of personality. On the other hand, Maslow's description of the development process was not very detailed. However, he indicated that very few youths actualized themselves. Rogers indicated that although the development process during youth was important, it did not influence self-actualization. He pointed out that the present situation and the standpoint of the present situation were more important than the development process during youth.

Moreover, this study compared and examined the characteristics of self-actualizing individuals. Consequently, the following eight categories were extracted: (1) the ability to love, (2) the exposed self, (3) wisdom as a human being, (4) creativity, (5) true freedom, (6) considerable self-reliance, (7) a sense of mission, and (8) confidence in and harmony with the whole world and the universe. These categories were then structuralized, and the initial and next stages of self-actualization were named as "the rise of humanity" and "cognition of destiny," respectively. Self-actualization was considered to reach the stage of "confidence in and harmony with the whole world and the universe" via these two stages.

Jung, Ericsson, Maslow, and Rogers, whose theories were compared in this study, are almost contemporaneous philosophers. It is uncertain as to what extent the opinions, which are extracted from these theories, can be applied to Japanese culture. However, the Japanese society appears to have adopted Western culture. The preface of the Japanese edition of the book titled "Growth Psychology: Models of the Healthy Personality" written by Shultz (D. Schultz) suggests the possibility that by learning psychologists' opinions described in this book, mental growth could be accomplished and life could be enriched, and consequently, new levels of self-aggrandizement, self-actualization, and self-transcendence could be attained. Moreover, he also suggested the possibility that by adopting these opinions in life, Western people could approach the state of mind that has been taught by Eastern religious priests for several centuries. Therefore, it is considered possible that the new level of self-actualization can be achieved in the situation wherein Eastern intelligence and Western intelligence are collated and merged. In order to realize this possibility, we must clarify Japanese culture and the wisdom hidden in it. Moreover, we must continuously actualize ourselves in our daily lives and apply self-actualization to nursing activities, which sustain people's lives.

ろうあ高齢者の生活実態と介護ニーズに関する一考察

富山福祉短期大学 鷹西 恒

(受付2008年3月15日)

要旨：

近年、わが国では高齢者の介護に関する研究や調査が広く行われているが、一方で聴覚障害のある高齢者（以下ろうあ高齢者とする）にどのような生活課題があるのか十分に明らかではない印象がある。これらのことについて、富山県高齢ろうあ者に関わる調査検討委員会が平成19年5月28日～12月20日の期間で実施したろうあ高齢者に対する実態調査結果を概観し、将来起こりうる可能性が高い介護の問題や整備の必要な福祉施設等のニーズについて考察した。結果、情報の得にくさと外出の関係や医療機関での診察リスク、将来の介護リスク、手話通訳者の重要性について示唆が得られたので報告する。

キーワード 「ろうあ高齢者」「介護」「コミュニケーション」

1 はじめに

わが国では過去に経験のない少子高齢化の進展に伴い、高齢者介護の問題が社会全体の大きな問題となってきた。介護を必要とする状態になっても自立した生活を送り、人生の最後まで人間としての尊厳を保てるよう、介護を社会的に支援するシステムの必要性が認識されてきた。このような背景から2000年4月より介護保険制度が開始された。同制度における聴覚障害者の問題については、全日本ろうあ連盟、日本手話通訳士協会、全国手話通訳問題研究会、その他多くの関係者において、その問題点、課題が提起され、今日まで検討・研究・研修が行われてきた。そこで提起された問題として①介護保険制度の説明に対して情報保障、コミュニケーション支援がなされていない、②訪問調査員がろうあ高齢者やその家族と十分なコミュニケーションが図れていない、③通所介護（デイサービス）等において、サービス従事者がろうあ高齢者や他の利用者と、コミュニケーションが十分に図られていない、障害への配慮がないなどがあげられている。

本研究では平成19年5月28日～12月20日の期間に富山県高齢ろうあ者に関わる調査検討委員会

が実施した「ろうあ高齢者に対する実態調査1」の結果を元に、ろうあ高齢者が現在どのように地域住民と関係をつくっているか、あるいは地域社会とどのような関わりをもちながら生活しているか、また、家族や近隣、医療機関や福祉施設の職員とのコミュニケーションの状況を知り、その問題点を据えた上で、将来、介護が必要になった場合の通所介護（デイサービス）やろうあ老人ホームなどの社会資源の必要性、あり方、整備等の検討を試みるものである。

【用語の説明】

「ろうあ者」：耳が聞こえず、話しことばが話せない状態にある人とする。（先天性あるいは乳幼児期から高度の難聴があって音声言語の習得ができなかったことによる。）

「コミュニケーション」(Communication)

：方法には、音声によるコミュニケーション、手話によるコミュニケーション、指字、点字、拡大文字、オーディオ、アクセシブル・マルチメディア、朗読支援、アクセシブルな情報通信技術を含むその他補完的あるいは代替的方法が含まれる。

2 実態調査結果からみえるもの

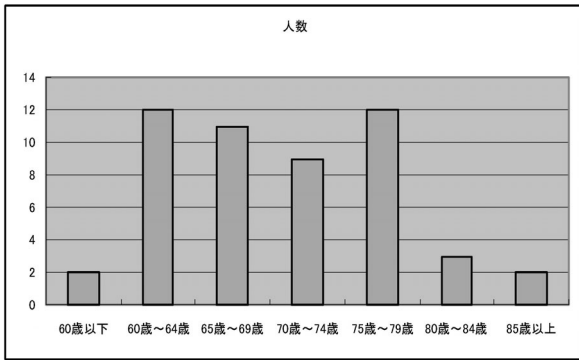
富山県高齢ろうあ者に関わる調査検討委員会が平成19年の実施した実態調査の分析を筆者が行う機会があった。

調査対象者は富山市またはその近郊に住まいする60歳以上（平成19年3月31日現在）の身体障害者手帳を取得している聴覚障害者のうち、104人を対象とした。

調査方法は、①家庭訪問または②対象者が希望する場所のいずれかで個人面接調査となっている。調査員は聴覚障害者1名と手話通訳者1名の2名とし、主に聴覚障害者が対象者の手話や身振りなどで質問し、回答を調査員がアンケート用紙に記入する形式である。（家族の同席は原則なし）

コミュニケーションがかなり困難な方に対しては、ご家族が同席、助言（通訳）を実施した。調査票は送付104通のうち13通が本人死去や送付先不明で返却となり、送付91通のうち51通（男性26、女性25）を回収、回収率は56%となっている。

年齢層分布は60～80歳で約85%に及ぶ高齢者

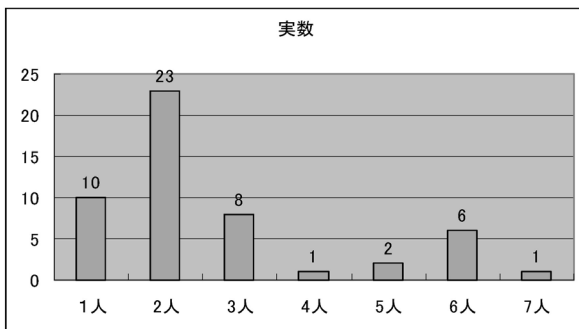


グラフ1 人数と年齢層分布

である。障害者手帳の等級は1級が30人(60%)、2級が18人(36%)、不明3人(4%)で重度の状態である。障害名は「聴覚障害」が25人(50%)「ろうあ」が9人(18%)などとなっている。

2-1 本人及び家族の状況

家族の構成数については、独居が10人(20%)、2人暮らしが23人(45%)と全体の65%が2人未満の家族構成となっている。

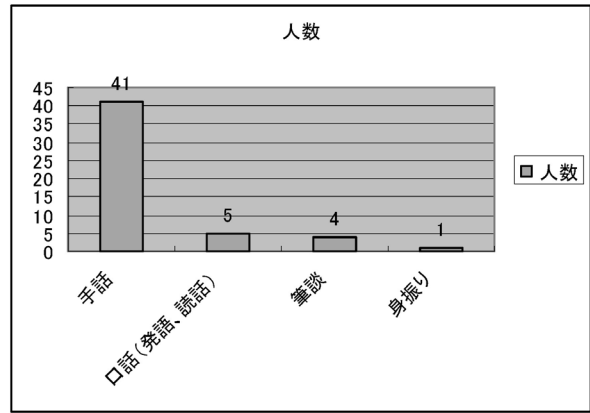


グラフ2 家族構成

独居世帯や2人世帯では今後の加齢にともなう身体の不自由や、介護の問題が発生してくる可能性がある。また、それがろうあ夫婦の場合は介護の問題から派生した形で社会的孤立の状況が生じる恐れも否めない。さらに独居の10人の内、6人が緊急時に連絡できる家族がいないと答えている。

家族以外で連絡できる人の有無については10人中6人はいると答え、誰に相談しますか?の問いに、手話通訳者、民生委員、友人等と答えている。一方、連絡できないと答えた人が4人いることで緊急対応時が危惧される。

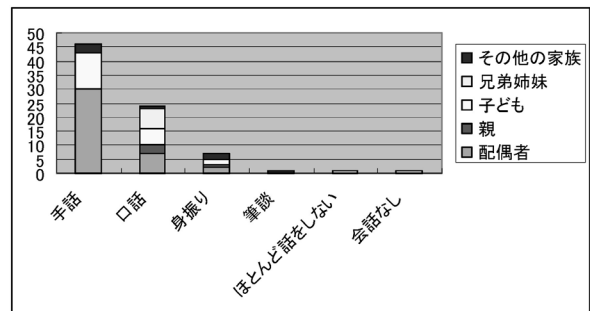
コミュニケーションには手話を使う者が41人(80%)で圧倒的に多い。これは筆談や身振りが少なく、健聴者側にコミュニケーション障害をきたす可能性が高いことを表している。聴覚障害者の



グラフ3 コミュニケーション方法

立場からみるコミュニケーションや方法が社会に浸透していない現実から、これまでの人生の中で職業選択等の社会参加に不利益を生じてきた可能性が高いと思われる。

家族とのコミュニケーションの状況は46人(90%)が手話を用いている。



グラフ4 家族とのコミュニケーション方法

しかしながら、コミュニケーションが手話以外で行われている場合もあり、家族の理解や手話の技術、家族機能が十分ではないと思われる。

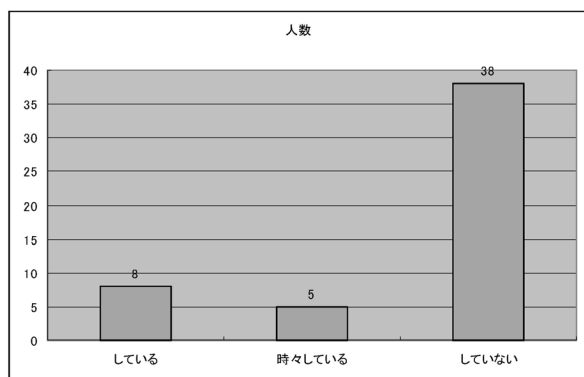
家族には家族員にしかできない情緒的安らぎの供給や、本人が生きてきた歴史的な存在証明をする機能もある。その意味でも円滑なコミュニケーションが重要となる。

2-2 生活の状況について

「就労」については何らかの仕事をしている人が13人(26%)となっている。

平成18年度版の国民生活白書による高齢者の就労率65～70歳以上男女平均値は25%となっている。

「外出」については普段家事やテレビなど家で過ごしている人が50%以上いる。これは出かける場

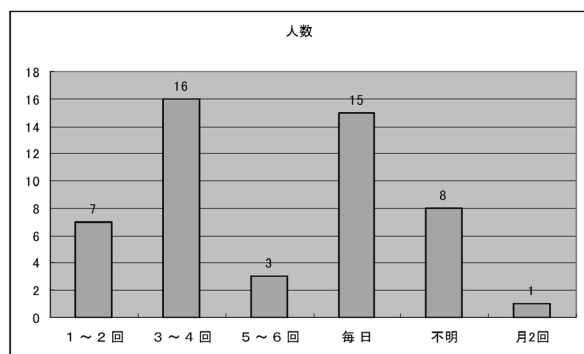


グラフ5 就労の有無

所が少ないことと、他者とのかわりがない状況にあることを示している。

「休日の過ごし方」では友人とおしゃべりや趣味、娯楽、旅行、スポーツと幅広く楽しんでいる。移動や身体的なADLに大きな支障がない人が多いことがわかる。ないと答えた人(3人)の事由については病気その他が影響していると考えられる。

「外出」については一週間のうち、1～4回の人46%となっており、週の半分は家から出ない人がいることがわかる。



グラフ6 一週間の外出回数

「住まい」の状況は76%以上の人が持ち家に住んでいる。

次に住居のことで困っていることを訪ねたところ、38人(75%)が、ないと答え、あると答えた11人(他未回答2)の具体的な回答の内容は、「シロアリ被害」、「庭の手入れができない」、「玄関の上り口の踏み台がほしい」、「車があると買い物便利」、「部屋との段差に転んだことあり」、「風呂の壁が汚い、狭い、滑りやすい、不便」、「洗濯機が古い」、「畑が大変」、「階段の昇降が不便」、「壊れているところの修繕ができない」、「2階寝室になっていて階段が急で不便」、「地震で倒壊が心配」

住居	持ち家(二戸建てマンション)	賃貸住宅(公営マンション)	賃貸住宅(公営一戸建て)	施設(老人ホーム・特別養護老人ホーム・障害者施設)	その他(娘宅)	その他(グループホーム)
人数	39	9	1	0	1	1

表1 住居の状況

などとなっている。

困ったことがあると答えた人のニーズでは、バリアフリーに関するものが多い。また、家屋や家財の老朽化に伴う問題が見受けられる。「収入」については68人(71%)が障害基礎年金、厚生年金、家族の年金等に頼っている状況にある。生活保護受給者はいない。

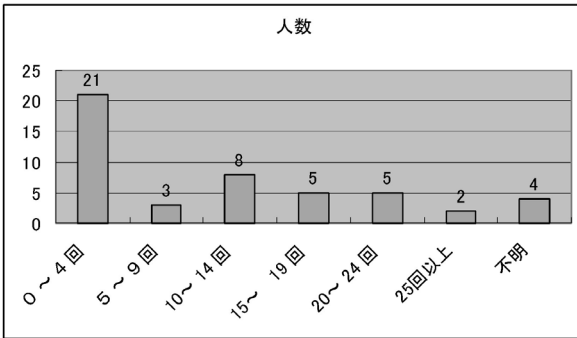
収入	本人の給料	配属者の給料	配属者以外の家族の給料	厚生年金	遺族年金	障害基礎年金	家族の年金	その他の年金	生活保護	預貯金	仕送り	その他(配偶者の厚生年金)
人数	10	4	6	21	2	42	2	1	0	7	0	1

表2 収入源について

金銭のことで困った際の相談相手については「困っていない」と答えた人が29人(52%)いる。調査員に遠慮して答えた可能性も考えられる。

同居家族以外の人と話しをする(会う)のは1ヶ月に何回位かという質問では、24人(50%)の人が10回以下であり、他者とのコミュニケーションが少ないことがわかる。

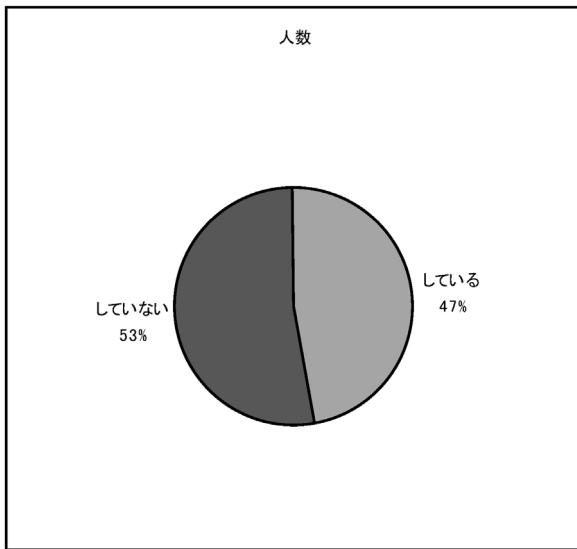
話し相手について聞いたところ、約50%が友人、近所等身近な人と答えている。このことからコミュニケーションが困難であることがわかる。



グラフ7 家族以外と話す回数（一ヶ月）

2-3 地域社会とのかかわりについて

地域社会とのかかわりについては、普段挨拶を交わす程度が29人（54%）である。つきあいが無い人が15人（29%）おり、あいさつをする程度が、つきあいがあると答えた人36名中26名に上ることから、ほとんどつきあいのない状況にあると思われる。



グラフ8 地域活動の参加状況

活動している人のうち町内会に参加している人もいるが、老人クラブや婦人会といった健聴者の集まりに参加している人は少ない。一方で手話サークルやスポーツサークルへの参加もあり、手話でコミュニケーションできる場所にはそれなりに参加している

地域での活動で困っていることはないかの質問には45人（88%）の人が「ない」と答えている。しかし、あると答えた6名のうち、地域との交流に必要な情報の伝達や理解の不足している人がいることがわかる。また「当番を外される」といっ

た、差別なのか配慮なのか本人の主観によって判断の分かれる問題が生じていることがわかる。

ゴミの分別がわからない	回覧板の内容がわからない	情報が届かない	集まりや行事に参加しても話を通じない	町内会費	その他（娘任せ）	その他（当番を外される）	その他（息子に任せているので困らない）	その他（家族任せ）
0人	4人	4人	1人	0人	1人	1人	1人	1人

表3 困っていることの内訳

2-4 健康状態について

最近の健康状態について質問したところ、40人（63%）が病気や服薬中と答えている。

区分	健康である	まあまあ健康である	体調が悪い	病気である	薬を服薬	体調は悪いが通院せず
人数	10	13	1	21	16	2

表4 健康状態（複数回答あり）

服薬は82%が自立しており、他も家族や世話人によって管理されている。体調が悪いにもかかわらず通院していない人が2人いる。

理由として「我慢している」や「病院に通うのが面倒」と述べており、危惧される状況にある。

病院職員との主なコミュニケーション方法には「筆談」を用いている。通院については43人（83%）が一人または家族のサポートで通院している。手話のできる病院スタッフの整備が望まれる。

病気になって通院した際に困ったことについて質問したところ、自分で症状の説明をすることや医師の説明が理解できなかった人が2人いる。診察内容や家族への説明等が本人の同意のないまま行われている可能性がある。

また、困ったことはないと答えている人が38人

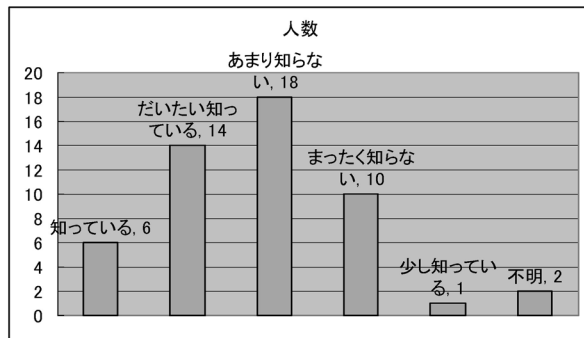
区分	身振り	筆談	家族が話す	妻が書いたものを渡す	通訳同行	口話	息子が同行	不明
人数	5	26	7	2	1	5	1	1

表5 病院とのコミュニケーション方法

(75%)いるが、病気の知識の正しい伝達がなかったり、家族等の世話になっている現状から「困る」という意味そのものがわかっていない可能性がある。

2-5 介護保険や他の福祉サービス理解

介護保険制度についてあまり知らない人、まったく知らない人が約60%いる。また、年金と同じ意味であると誤解している人がいる。



グラフ9 介護保険の認知度

申請主義を基本とする介護保険では、制度の周知・理解といういちばん最初の段階で問題が発生することになる。音声や文字によって情報を伝達できない人には手話で伝える方法をとらなければならない。

要介護度を判断する訪問調査では、介護支援専門員が、ろうあ者についての正しい理解をもち、自由に話ができるかが問題となる。専門員に理解がなく、手話での会話もできない場合は、手話通訳保障をされない限り、調査が正しく行われることはないと考えられる。

介護保険サービスを利用している人は51人中4人で、内訳はデイサービス、ショートステイ、ホームヘルプサービス、福祉用具貸与となっている。利用しない理由については38人(88%)が必要ないと答えており、残りの5人のうち1人はイヤだから、1人は今後必要かもしれない、3人は不明

という結果となった。

また、介護申請がわからないや、申請したが自立となったという人はいなかった。

「ろうあ老人ホーム」の認知については、知っていると答えたのは23人(45%)で周知が不十分であることがわかった。もし、県内にあったら利用したいかの質問には、入所したいと答えた人が56%(29人)いる。これはすでに日常生活で何らかの支障が生じている可能性を表している。

理由	入所したい	入所したくない	わからない	考えていない	不明
人数	29	12	8	1	1

表6 老人ホーム入所の希望

県内にろうあ老人ホームがあれば入所したいと答えた人の65%(26人)が、利用者が「ろうあ」であることが入所を決めるための重要な判断要素と答えている。

入所したくないと答えた12人の理由は、家で暮らしたい、家族と一緒にいたい、ろうあ者に会いたくない(4人)等となっている。ろうあ者に会いたくないと答えた人が4名いるが、こちらは理由について調査する必要がある。

区分	利用者がみんなろうあ者だから	職員が手話できると思うから	情報が入ると思う	設けられている障害に配慮して	その他	わからない
人数	26	3	3	4	2	2

表7 入所したい理由

さらに「ろうあデイサービス」があったら利用したいかについて同様の質問をしたところ、30人(59%)がしたいと答えている。

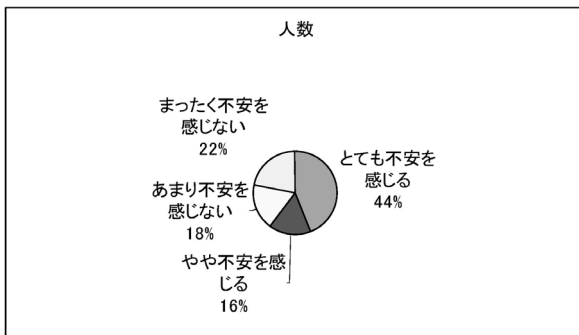
利用したい理由については利用者がろうあ者である(69%)、職員が手話可能(10%)、情報が入る(2%)、聞こえないことに配慮されて

いると思うから（10%）その他（7%）となっている。

障害者自立支援法を知っているかの質問では46人（90%）があまり知らない、まったく知らない、わからないと答えている。

2-6 災害への不安について

最後に災害への不安について質問したところ、30人（60%）の人が災害に対する不安を感じていると答えている。あまり不安を感じない、まったく不安を感じないと答えている20人（40%）理由について調査する必要がある。（情報の欠落の可能性あり）



グラフ10 災害に対する不安

3 考察と今後の課題

聴覚障害をもつ人の生活や介護のニーズに対して、現在の介護保険や医療サービスが十分に機能していないことや、それらを踏まえて今後のサービス体制の整備にあたって重要と思われる点について明らかにする必要がある。現在の問題点は、わが国の聴覚障害者の生活実態が、健聴者との比較の上において、十分に把握されていないことにある。今回の調査は以上のことを目的に実施されたものである。

「本人及び家族の状況」については今回調査対象とした聴覚障害のある高齢者で、身障者手帳1, 2級の重度の人が多く、80%以上の人が手話によるコミュニケーションが可能であることがわかった。

「家族構成やコミュニケーションの状況」については、家族ともに「手話」を使う者が多いことがわかった。しかし、一部に家族とのコミュニケーションが手話以外で行われており、情報の伝達が十分ではない可能性がある。また、一人暮らしの聴覚障害者のうち緊急時に連絡可能な家族

がない人がおり、富山市の災害時要援護者支援事業などへの登録が望まれる。但し、同事業は地域支援者に助力を求める方式であり、聴覚障害者の場合、地域支援者と日頃から円滑なコミュニケーションを図ることに困難があり、緊急時に機能が発揮できるのか大きな疑問が残る。

「生活の状況」の項では、就労している人は20%で、80%は日中や休日に、家事や友人とのおしゃべり、趣味、娯楽、スポーツと幅広く楽しんでいることがわかった。また、高齢になっているにもかかわらず就労している人がいるが、年金生活に頼る人の多い中で、その背景に所得保障の代替的機能が存在する可能性があると感じた。さらに、移動や身体的なADL

に大きな支障がない人が多いが、健康リスクがないわけではない。このことは表4からも明らかである。家屋の状況では約20%の人がバリアフリー化などのニーズを持っており、聴覚障害以外のニーズ（介護等）も顕在化しつつあることがわかった。今後もこのパーセンテージは上昇すると思われる。

「地域社会とのかかわり」の項では、近所とのつきあいをしていると答えた人が70%おり、町内会関係と障害者団体の活動に参加している人が50%以上を占めている。しかし、老人クラブや婦人会といった健聴者の集まりに参加している人は少ない。一方で手話サークルやスポーツサークルへの参加もあり、手話でコミュニケーションできるところにはそれなりに参加している。地域活動で困っていることについては、88%の人が「ない」と答えているが、あると答えた6人のうち、情報の伝達や理解の不足している人がいることがわかった。

しかしながら、従来地域社会が担ってきた相互扶助的な機能を公共や民間のサービスが代替するようになってきたことなどから、個人と地域との関わりは相当希薄化しているといえる。（外的要因による）

「健康状態」については体調が悪い人や服薬中の人が80%を占めている。そのうち「病気である」と答えた人が40%弱存在した。病気であると答えた人に対して今後、生活の習慣や状況について確認する必要がある。病気などで医療機関を利用する際に困ったことについて、自分で症状の説明をすることや医師の説明が理解できなかった人が2人いる。このことは診察内容の理解や家族への説明等が本人の同意のないまま行われている可能性

がある。今後手話通訳者の常駐体制をとる必要を感じる。

「介護保険や他の福祉サービス理解度」の項では、「ろうあ老人ホーム」や「通所介護（デイサービス）」の必要性については約60%の人が必要になれば利用したいと回答している。今後の高齢化進行を視野に入れて建設の準備を検討する必要がある。

「障害者自立支援法」についてはさらに深刻であり、70%以上がまったく知らないと答えている。同法ではその第二条の三で「意思疎通について支援が必要な障害者等が障害福祉サービスを円滑に利用することができるよう必要な便宜を供与すること～略」と明記されており、今後早急に対応しなければならぬ必要性を感じる。聴覚障害者が社会の一員として生きていくためには、情報とコミュニケーションをいかに保障できるかが肝要となる。行政をはじめ聴覚障害者団体、専門職である手話通訳者、手話、要約筆記サークル等と地域住民が連携した支援システムをつくる必要がある。

「災害への不安」についての項では、緊急事態への対応について認識が不足している。日常的に孤立を防いだり、高齢ろうあ者の生活への様々な働きかけがあってこそ緊急事態への対応も可能となる。今回明らかになった、高齢ろうあ者と家族の存在やかかえる問題について明らかにしておくことが必要となろう

最後に「手話通訳者」の重要性について述べる。今回の調査で、手話通訳者が従来の通訳業務のみでなく、日常的に高齢ろうあ者の相談に応じたり、具体的に生活をサポートしていることがわかった。手話通訳事業をさらに改善・発展させるためには手話通訳者の身分保障ができる制度の早期構築を図る必要がある（要約筆記者も同様）。また、手話通訳士資格2所持者を増やすことも急務といえる。

4 おわりに

高齢ろうあ者の自立を支援し、社会参加を促進するために、本人やその家族の立場にたった施策やニーズにあった福祉事業を展開する必要性を感じた。具体的には、現行の各種支援事業の見直しと最適化、また、今後の高齢化進行や要介護の問題に対応できる福祉サービス（通所介護他）の建設を早期に検討することが必要である。いづれにしても生活実態による個別ニーズを詳らかに把握することが最重要課題である。また、今後も定期的に調査を継続していくことが介護予防や要介護

ニーズへの対応に役立つと考えられる。

謝辞

本論の作成にあたり、富山県高齢ろうあ者に関わる調査検討委員会の方に多大な協力をいただいたことを心より感謝いたします。

引用・注記

- 1 「ろうあ高齢者に対する実態調査」平成19年5月28日～12月20日に富山県高齢ろうあ者に関わる調査検討委員会が実施したもの
- 2 手話通訳士とは、聴覚障害者と健聴者の間のコミュニケーションを円滑に図る担い手として重要な役割を果たす、社会福祉法人聴覚障害者情報文化センター認定の資格である。聴覚障害者と健聴者の両者の意見や立場を知りうる唯一のポジションにあり、高い通訳技術と公正な判断力、豊富な知識を駆使して両者の代弁を瞬時に行う必要がある。このため手話通訳士には、ハイレベルな手話のスキルはもちろん、障害者福祉のあり方や対人援助に関する基本的知識が求められる。

参考文献等

- ・手話通訳者の労働と健康についての実態調査 2005報告（調査概要編）全国手話通訳問題研究会健康対策部2007年2月17日報告
- ・ろうあ高齢者実態調査報告書 社会福祉法人長野県聴覚障害者協会介護推進委員会 2004年
- ・聴覚障害者福祉のビジョン策定委員会 「中間報告」 社会福祉法人滋賀県聴覚障害者福祉協会 2007年

Analysis on the living condition and care needs of the elderly deaf people

TAKANISHI Hisashi

Toyama college of welfare science

Recently many researches and studies have been done on care services for the elderly in Japan, however, it seems that they don't include the issue of the elderly deaf people in terms of daily life. This paper examines the problem of a high demand for their care needs and the special necessity of nursing home facilities on the basis of analysis of the Toyama Prefecture Research Report on the elderly deaf. It shows that the elderly deaf people have many difficulties of accessing the information and going out, face the risk of miscommunication in medical examination, need the proper service of sign language interpreter and worry about the future care and support system for them.

『共創福祉』投稿規定

1. 『共創福祉』への投稿資格者は、富山福祉短期大学の教員とする。さらに、旧教員、非常勤講師等、広く本雑誌編集委員会が執筆を依頼し、あるいは投稿を認めることができるものとする。また、共著の場合は、第1著者は原則として投稿資格を持つ者とする。
2. 投稿原稿は、広く福祉に関連した内容を持ち、富山福祉短期大学の教育・研究活動に基づくもの、または、教育・研究活動に有益と認められるもの。
3. 投稿論文は次の5種とする。いずれも未公開のものに限る。
 - a. 原著論文
福祉の発展に貢献すると考えられる、投稿者による研究結果。
 - b. 総合報告
特定の主題に関する一連の教育・研究およびその周辺領域の発展を投稿者の見解にしたがって総括的、かつ体系的に報告したもの。
 - c. 教育・研究ノート
教育・研究速報、新しい発想、提言、問題提起、事例報告など教育・研究上記録に留めておく価値があると認められるものや、既発表の論文に対するコメントで、教育・研究上記録に留めておく価値があると認められるもの。
 - d. 教育・研究詳解
福祉の特定の教育・研究領域における成果を、最近の結果や知見を加えて分かりやすく説明したもの。
 - e. 教育・研究資料
歴史的なデータ、入手困難なデータや福祉技術等の比較検討のために有用なデータ、あるいは歴史的文献の翻訳や解釈など。
また、次の2種は、原則として、編集委員会が原稿作成を依頼する。
 - f. 富山福祉短期大学教育・研究活動の具体例（例：福祉フォーラム実施報告）
 - g. その他。
4. 投稿された原稿は編集委員会において、項目1、2、3に照らし、適切な投稿か否かを事前に判定される。倫理上問題があると編集委員会が判断した原稿は受理しない。原著論文については、編集委員長等が選定・依頼した査読者の審査を経て、掲載の可否を決定する。
5. 原稿はオリジナルの他、コピー2部を提出する。フロッピーディスクあるいはUSBによる提出が望ましい。
6. 著作権
 - (1) 掲載される論文等の著作権は、その採択をもって富山福祉短期大学に帰属するものとする。
 - (2) 投稿原稿の中で引用する文章や図表の著作権に関する問題は、著者の責任において処理するものとする。
 - (3) 著作者人格権は著者に帰属する。著者が自分の論文等を複製、転載、翻訳翻案等の形で利用するのは自由である。この場合著者は掲載先に出典を明記する。
7. 原稿は別に定める執筆要項に従って作成する。

『共創福祉』執筆要項

1. 原稿はワープロによる場合は、A4用紙に1行40字で1頁40行とする。原稿の長さは原則として表・図を含めて12頁相当以内とする。（手書きの場合には、200字詰め、または、400字詰め原稿用紙を用い、横書きに清書する。表・図の挿入箇所は、原稿の本文の右側の欄外に赤字で指定する。）

2. 原稿は以下の順に書くものとする。

[第1頁] 標題、所属名、著者名、和文要旨（500字程度、文献の引用および数式は原則として避ける）。和文キーワード（8語以内）。

[第2頁] 英語による、標題、著者名、所属名、Keywords（8words and phrases以内）。Abstract（450ワード程度）。ただし、投稿規定第2項のf、gには、Keywords、Abstractは不要。Abstractは問題の所在、得られた結果等がそれだけで理解できるようにする。

[第3頁以降]

① 本文：

章、節の番号は、第1章に当るものは、“1”、第1章第1節に当るものは、“1.1”というように着ける。また、式番号は、章ごとに（2.1）、（2.2）のようにして、式の左側に統一する。

② 参考文献：書き方は本要項の第4項を参照。

③ 表：

一枚の用紙に一つの表を書く。表の番号は論文中に現れる順に従って、表1、表2、…または、Table 1、Table 2のようにする。

④ 図：

図はそのまま写真版できる鮮明なものを用意する。大きさは印刷出来上がりの1～2倍とし、トレースが必要な場合は原則として著者が行うものとする。図の番号は論文中に現れる順に従って、図1、図2、…または、Fig. 1、Fig. 2、…のようにする。

3. 本文中での参考文献の引用は、著者名（出版年）とする。例えば、Bush（1998）、小泉（2006）。

4. 参考文献の書き方

① 雑誌の場合：

著者名（出版年）、標題、雑誌名、巻、ページ（始・終）、（雑誌名は省略しないものとする）。

② 叢書の中の一巻の場合：

著者名（出版年）、書名（編集者名）、叢書名、発行所名、発行地名。

③ 単行本等の場合。

著者名（出版年）、書名、発行所名、発行地名。

④ 編集書の中の一部の場合：

著者名（出版年）、標題、編集書名（編集者名）、巻、ページ（始・終）、発行所名、発行地名。

なお、同じ著者によるものが同一年に複数個現れる場合には、（2005a）、（2005b）などとして区別する。文献は、日本人をふくめ、著者名のアルファベット順に並べる。

5. 著者校正は原則として一回とする。その際、原著論文は、印刷上の誤り以外の字句や図版の訂正、挿入、削除等は原則として認めない。

編集委員会

編集委員長 大工原 桂

編集委員 市田 和子 竹田 好美 吉崎 朗光（書記）

共創福祉2008年 第3巻 第1号
Synergetic Welfare Science

2008年（平成20年）3月31日発行

編集・発行 富山福祉短期大学
〒939-0341 富山県射水市三ヶ579

印刷 株タニグチ印刷

Synergetic Welfare Science

Vol.3, No.1, 2008

Contents

Research Papers

A Psychological Meaning of Sufferings	<i>Kouji ISHIZU</i>	1
"The structure of a deed of the child" and "the self realization"	<i>Toru MURATA</i>	9
A Study of" Social Inclusion" that is in the Process of Learning	<i>Akira KITAZAWA</i>	21
The Composition of a Bullying in Modern Society (1) Through a Consideration of "The Bullying Suicide Incident of Okouchi Kiyoteru"	<i>Masakazu SUEMITSU</i>	31
Comparative Study of Psychological Theories on Self-actualization : Application to Nursing Activities	<i>Yasuko SUMITANI</i>	41

Research Notes

Analysis on the Living Condition and Care Needs of the Elderly Deaf People	<i>Hisashi TAKANISHI</i>	69
--	--------------------------	----